特252
889

良書百選

第五輯

社團法人 日本圖書館協會編

始

露光量違いの為重複撮影

特252
889

序

我が日本圖書館協會は昭和六年七月以來文部省援助の下に社會教育上裨益するところある優良圖書の推薦を行つて來た。本協會はそれがために特に調査部を設け、調査委員十一名をあげて新刊圖書に就き調査に當らしめ、毎月一回定期に調査委員會を開いて愼重審議の上推薦したる良書を、「圖書館雜誌」に發表して、一般社會人の圖書選擇の利便に供して來たのである。かくて昭和七年五月推薦圖書百種を選んで「良書百選」と名づけ其第一輯を翌昭和八年三月其第二輯昭和九年三月其第三輯昭和十年三月其第四輯を刊行して全國公私立圖書館並に各關係方面に頒布したが、更に今回は昭和十年四月より翌十一年三月に至る推薦圖書を收錄して、茲に其第五輯を刊行することとなつたのである。幸にこれが嘗く讀書人の圖書選擇上の指針となることを得ば本協會の洵に本懷とするところである。

なほ特に推薦文を執筆せられた各方面の權威者に對して深く謝意を表する次第である。

昭和十一年三月

社團法人日本圖書館協會理事長
松本喜一

増補新版

齋藤秀三郎 著
九大教授 文學博士 豐田實 增補

SAITO'S IDIOMOLOGICAL ENGLISH-JAPANESE DICTIONARY

英和中辭典

新輯增補漸く完成し面目を一新したる最新の辭典！

土居光知教授 推薦の言葉 「英和中辭典」は天才的な英語學者であつた齋藤秀三郎氏が心血をそゝいで書かれたもので、著者の個性が毎頁に感ぜられ、譯語の妙味と熟語の豐富さとに於て群を拔き、幾十萬の英語研究者によつて愛用される名辭典であつた。私も初めて英語教師をした頃から、此辭典の必要缺くべからざる事を知り、その譯語と、熟語の集め方に感心し、また大に恩惠を蒙つてゐた。昭和八年岩波氏が此辭典の發賣者となるや豐田教授に改訂を委囑し、今日その完成を見るに至つたのは喜ばしい次第である。改訂版を見るに、原著の長所を尊重して、少しも毀損する事なく、たゞ原著者が失念したと思はれる英語及譯語を精密な考慮を以て補充し、假名の發音記號を國際音標文字に改め、現代人に必要な新語、地名、人名、音樂、宗教、科學等の語彙を加へ、印刷を鮮明美麗にし、最新の英和辭典と新しさを競ひつゝ、原著の特色を保存した事は、豐田教授の苦心と識見との結果であらう。これにより本辭典は英語に興味を有するもののみならず、各方面の英書を讀む人々にとつても至便な英和辭典となつたと思ふ。

四六判 一七三〇頁 クロース裝 特價三・二〇（定價四・〇〇）送料三三

東京一ツ橋 神田 岩波書店 振替東京二六四〇

露光量違いの為重複撮影

序

我が日本圖書館協會は昭和六年七月以來文部省援助の下に社會教育上裨益するところある優良圖書の推薦を行つて來た。本協會はそれがために特に調査部を設け、調査委員十一名をあげて新刊圖書に就き調査に當らしめ、毎月一回定期に調査委員會を開いて愼重審議の上推薦したる良書を、「圖書館雜誌」に發表して、一般社會人の圖書選擇の利便に供して來たのである。かくて昭和七年五月推薦圖書百種を選んで「良書百選」と名づけ其第一輯を翌昭和八年三月其第二輯昭和九年三月其第三輯昭和十年三月其第四輯を刊行して全國公私立圖書館竝に各關係方面に頒布したが、更に今回は昭和十年四月より翌十一年三月に至る推薦圖書を收錄して、玆に其第五輯を刊行することとなつたのである。幸にこれが普く讀書人の圖書選擇上の指針となることを得ば本協會の洵に本懷とするところである。

なほ特に推薦文を執筆せられた各方面の權威者に對して深く謝意を表する次第である。

昭和十一年三月

社團法人日本圖書館協會理事長

松本喜一

特252
889

增補新版

齋藤秀三郎 著
九大教授 文學博士 豐田實 增補

SAITO'S
IDIOMOLOGICAL
ENGLISH-JAPANESE
DICTIONARY

英和中辭典

新輯增補漸く完成し面目を一新したる最新の辭典！

土居光知教授 推薦の言葉 「英和中辭典」は天才的な英語學者であつた齋藤秀三郎氏が心血をそゝいで書かれたもので、著者の個性が毎頁に感ぜられ、譯語の妙味と熟語の豐富さとに於て群を拔き、幾十萬の英語研究者によつて愛用される名辭典であつた。私も初めて英語教師をした頃から、此辭典の必要缺くべからざる事を知り、その譯語と、熟語の集め方に感心し、また大に恩惠を蒙つてゐた。昭和八年岩波氏が此辭典の發賣者となるや豐田教授に改訂を委囑し、今日その完成を見るに至つたのは喜ばしい次第である。改訂版を見るに、原著の長所を尊重して、少しも毀損する事なく、たゞ原著者が失念したと思はれる英語及譯語を精密な考慮を以て補充し、假名の發音記號を國際音標文字に改め、現代人に必要な新語、地名、人名、音樂、宗教、科學等の語彙を加へ、印刷を鮮明美麗にし、最新の英和辭典と新しさを競ひつゝ、原著の特色を保存した事は、豐田教授の苦心と識見との結果であらう。これにより本辭典は英語に興味を有するもののみならず、各方面の英書を讀む人々にとつても至便な英和辭典となつたと思ふ。

四六判 一七三〇頁 クロース裝 特價三・二〇（定價四・〇〇）送料三三

東京一ツ橋 神田 岩波書店 振替東京二六二四〇

目次

第一哲學・倫理・宗教

皇國日本　亘理章三郎　一
日本國體への反省　牧健二　二
神典　大倉精神文化研究所編　二
續日本精神史研究　和辻哲郎　三
日本精神　モラエス著　花野富藏譯　三
儒教大觀　ブリュッケ著　後藤末雄譯　四
西洋哲學史概說　桑木嚴翼　五
現代社會と人格生活　吉田靜致　六
神道の再認識　加藤玄智　六
祭祀の本領　星野輝興　七
佛教論　增谷文雄　八
禪學讀本　山田靈林　九
內的生命觀　吉田賢龍　九
道元　圭室諦成　一〇
使徒パウロの神秘主義　佐野勝也　一一
活ける宗教と人生　吉田清太郎　一三
風土　和辻哲郎　一三
生活文化の東西　鼓常良　一四
民族性と神話　松村武雄　一五
人類の意志に就て　武者小路實篤　一五
戀愛と結婚の書　菊池寛　一六

第二歷史・傳記・地誌・紀行

維新史叢說　尾佐竹猛　一七
明治初期文化史　清原貞雄　一八
西洋史新講　大類伸　一九
大楠公記　財團法人社會教育會編　一九
青年賴山陽　木崎好尙　二〇
福澤諭吉　石河幹明　二一
偉人權兵衞　村上貞一　二三
日本女性鑑　財團法人大日本聯合婦人會編　二三
山岳美觀　吉江喬松　二四
北の山　伊藤秀五郎　二五
京都散歩　北尾鐐之助　二六
沙漠の國　笠間杲雄　二七
北方への旅　アン・リンドバーグ著　深澤正策譯　二八

明治天皇と立憲政治　渡邊幾治郎　元
國際紛爭史考　板倉卓造　三〇
膨脹の日本　鶴見祐輔　三二
日本の力　渡邊鐵藏　三三
支那游記　室伏高信　三三

第三 法制・經濟・社會・教育

法律哲學原理　三谷隆正　三四
法律に於ける倫理と技術　牧野英一　三五
帝國憲法制定の精神　金子堅太郎　三五
法官餘談　三宅正太郎　三六
世界經濟の常識　小島精一　三七
農村問題解說　栗原藤七郎　三八
日本の過去現在及び未來　穗積重遠　三八
教育學講義　春山作樹　三九
世界の青少年運動　小尾範治　四〇
子供とはどんなものか　波多野完治　四〇
幼兒への理解　霜田靜志　四一
愛育讀本　倉橋惣三等　四二
子供と母の領分　鷹野つぎ　四三
まごころ　村上寛　四三

第四 自然科學

天文學通論　關口鯉吉　四四
天文や氣象の話　鈴木敬信　四四
曆と迷信　藤原咲平　四五
民族問題をめぐりて　鈴木敬信　四六
趣味の植物採集　古屋芳雄　四七
野鳥禮讃　牧野富太郎　四八
山の隣人　內田清之助　四九
　　長尾宏也　四九

第五 産業

日本工業政策　吉野信次　五〇
實用園藝　東京府立園藝學校編　五一
魚と水産業　田中茂穗　五一

第六 美術・諸藝

美と工藝　柳宗悅　五三
美術と工藝の話　柳宗悅　五五
音樂生活二十年　大田黑元雄　五五
耕筰樂話　山田耕筰　五五
演劇巡禮　三宅周太郎　五六

能と歌舞伎　小宮豐隆　五七
能の再生　野上豐一郎　五八
映畫讀本　來島雪夫　五九
ラヂオ演劇　佐々健治　六〇

第七 文學・隨筆

言葉と文　玉井幸助　六〇
文章心理學　波多野完治　六一
故迷江戸文學講話　尾崎久彌　六二
純正詩論　萩原朔太郎　六三
新講和歌史　齋藤清衛　六三
萬葉讀本　佐々木信綱　六四
俳句讀本　高濱虛子　六五
隨筆瀧澤馬琴　眞山青果　六六
漱石襍記　小宮豐隆　六七
母の死　勘助　六八
續爐邊夜話　乾信一郎譯　六九
英文學の感覺　土居光知　六九
ゲーテ論攷　木村謹治　七〇
トルストイ傳　原久一郎　七一
母と子　フイリツプ著　山內義雄譯　七二
雨の念佛　宮城道雄　七三
影を踏む　土岐善麿　七四
花鳥草紙　新村出　七五
きよろろ鶯　北原白秋　七五
山中說法　杉村楚人冠　七六
自畫像　戸川秋骨　七七
折柴隨筆　瀧井孝作　七八
攝陽隨筆　谷崎潤一郎　七九
騷音　宮城道雄　七九
續々湖畔吟　杉村楚人冠　八〇
縱と橫　西川義方　八〇
文學讀本 春夏の卷　鳥崎藤村　八一
文化と大學　帝國大學新聞社編　八二
文墨餘談　市島春城　八二
和琴抄　今井邦子　八三
春興倫敦子　福原麟太郎　八三
無極隨筆　成瀨無極　八四
思はざる收獲　內藤濯　八四
德島の盆踊　モラエス著　花野富藏譯　八五

圖書館協會推薦

一目小僧その他　柳田國男著
民俗學は、從來田舍の傳說、迷信、お伽話として輕く見過してゐたものから生れて來たのである。この口碑は實に未だ歷史をもたなかつた先祖を知る殆ど唯一の手がかりであつた。本書は之等諸國に傳はる數も興味ある色々の傳說を綜合分析して、說明し、解說し、斷定を下された名著であるが又單に隨筆的讀物としてもこれ程面白いものはあるまい。特別製布裝幀　定價三圓　送料十四錢

漱石襍記　小宮豐隆著
漱石の處女作『木屑錄』の解說から『吾輩は猫である』以下『明暗』にいたるまでに對する著者獨特の精密な批判と考察の殺きメスの跡が、ほとんど息をつかせる間もなく、適確に記錄されてゐる。尙も漱石を語る程の人は、本書を讀んで始めてその資格を許されると云つても過言ではなからう。特別製布裝幀・天金畫入　定價二圓　送料十二錢

黃金蟲　小宮豐隆著
氏は實に「特殊」を見出す「勸」の人であると共に、其を丹念に「書圖」へ繫ぎ合す科學者的頭腦である。本書收むる所は、興味津々たる西歐の印象や、意味豐かな時々の感想の外に、殆ど氏獨特ともいふべき日本の文化、藝術、言語に對する儘れた諸々の考察である。我々はこの書の中に近來の名著なる氏の「芭蕉研究」が有する精彩と透徹とを見出すに止まらず、更に彼に見られぬ寬ぎと親しみとに接し得ることを、讀者と共に喜びたい。定價二圓　送料十二錢

新俳文　高濱虛子著
本書の文章を見ると、この詩人の心境が餘と共に益々澄みわたり、その得た技巧が愈々天衣無縫の妙に入つたことを思はしめる。芭蕉の文章は元祿の名俳文であるが、虛子の寫生文に至つては、實に昭和の新しき名俳文として長く後世に殘し、廣く文章の模範とす可きである。石井柏亭裝幀　定價二圓　送料十錢

書道と畫道　津田靑楓著
長谷川如是閑氏の私信より―『書卽畫、畫卽書』といふ日本人でなければ、日本畫家でなければ、とても徹底的に理解し得ない藝術觀を順る枯淡な筆致で說いてゐる此の書自體が一つの『線の藝術』になつてゐるではありませんか。四六判二三〇頁・三色版一・網版五葉　定價二圓　送料八錢

思想遠近　谷川徹三著
豐富多面な古典的教養を背景にして常に現代の生きた問題に關心し、現代の問題に經え子その觸手を延ばしながら時流に足をさらはれないで、その中に普遍的に意義あるものを掴み出さうとするのがいつでも谷川氏の行方である。ここには「ゲーテに於けるスピノザ主義」のやうな學問的研究もあれば「現代の文學」のやうな今日の文學の包括的な展望もあり、さうかと思ふと美術の批評があり、人物のスケッチがあり、書物の紹介があり、純然たる隨筆があり、さながらの萬華鏡である。定價二圓三十錢　送料十四錢

椽の實　吉村冬彥著　定價二圓三十錢　送料十四錢

美術概論　兒島喜久雄著　定價二圓　送料十二錢

言語美學　カルル・フォスレル著　小林英夫譯　定價三圓二十錢　送料十二錢

未開社會の思惟　レヰ・ブルユル著　山田吉彥譯　定價四圓八十錢　送料二二錢

小山書店
東京市小石川區諏訪町五九
振替東京三九八七二番
電話小石川七五七五番

良書百選　第五輯

第一　哲學・倫理・宗教

皇國日本

亘理章三郎著

本書は道德教育叢書の一として、わが國體の明徵に資せんがために著はされたものである。著者の言葉に別著「國民道德論概要」の「國家日本」と題する章に依り、更に詳に講述することとしたとあるが、國體に關する著者多年の研究の成果の要領を示したものと見ることができよう。

著者は我が國が皇室の擴大して國家にまで自然に成長發展したものであること、卽ち我が民族我が國家が皇室を本源とする一元の民族、一元の國家であることの意義及びその肇造以來の歷史的發展に於ける一元化の過程を詳細に規定し、之に基いて、國家の進展が革命によらず、皇室を絕對の中心とする維新的創造によること、皇國、神國、祖國といふ思想が我が國に於て完全なる統一を得てゐること、我が國家が眞に君民一體、祖孫一體の道德國家であることなどを、歷史を顧みつゝ種々の方面から論じ、西洋、支那との比較をも交へて我が國性を明かにしてゐる。

我が國體への自覺は今日强く要望せられてゐるが、やゝもすれば偏狹な思想が行はれ、我が國體の眞意を明確に把握することは必ずしも容易でない。研究的基礎に立ちしかも通俗的なる國體論として薦める。

（昭和一〇、六、二〇　神田駿河臺三ノ一　目黑書店　四六判二三六頁　一・六〇）

日本國體への反省

牧　健　二　著

今、國體の明徴といふことが我國において強調されてゐる。しかし我國體とは一體何であるかこれを簡單に定義することは必ずしも容易なことではないであらうし、また輕々しくすべきことでもない。そして、實はかく一言にして言ひ難きところにこそ我國體の特質があるのであり、またそれが日本國民の生活に對して偉大な力であり得る理由も見出されるのである事を思はなくてはならない。蓋し我國體なるものは日本國民の國家生活を全面的に特徴づけてゐるものであつて決して例へば法律的とか國民道德的とかいふやうな限られた生活面に於てのみ見出されるものではなく、またそれは全體として神代ながらに決定された固定のものではなくて、その根底には日本固有の動かぬものを有ち續けながら、なほ或は支那の思想をとり入れ（大化の改新の場合の如く）或は歐洲の思想の影響を受け（明治維新の場合の如く）それをよく日本的のものに消化することによつて全體として不斷に發展し進化してゐるのである。それ故に眞に我國體を知る爲には日本國民の國家生活を全面的に考へるとともにその建國以來の歷史を見ることを忘れてはならない。

本書は法制史家たる牧博士が青年のために我國體を說かれたもので國體を歷史的に回顧し、國民の國家生活を檢討して全體的に我國體を捉へ、且その理想的意義を明にしてゐる。刻下の青年讀物として一讀を薦める。

（昭和一〇、三、二〇　東京神田一ッ橋　青年敎育普及會　四六判八二頁　・三〇）

神　典

大倉精神文化研究所編

本書は我國の古典、古事記、日本書記、古語拾遺、宣命、令義解、律、延喜式、新撰姓氏錄、風土記、萬葉集の全文或は抄錄を訓み下し文に書き改め一冊に收めたものである。

編纂の趣旨は、國民生活の指導原理を之等古典の中に求め、嚴正確實なる典據に依つて日本精神の本質に徹せんとするもので、この編纂の爲には三年の日子を要し、編纂の實際には田中義能（古事記）、植木直一郎（日本書記、古語拾遺、令義解、律、新撰姓氏錄、風土記）、河野省三（日本書記、萬葉集）、宮地直一（延喜式）の諸博士、並に宮內省掌典星野輝興氏（宣命、壽詞、祝詞）が當てられて嚴密な校合と適正なる訓註とを施され、延喜式、新撰姓氏錄、風土記の訓み下し文の如きは今回初めて公刊されたものと云ふことである。令義解、律、萬葉集等は國民精神の立場から抄錄せられて全文は揭げられてゐない。

以上の內容はインディア・ペーパーに新鑄活字を以て印刷せられ、革裝三方金と云ふ體裁は「神典」と云ふ名と共に國民座右の書にふさわしいものである。

（昭一一、二、一一　橫濱市神奈川區太尾町大倉山　大倉精神文化研究所　三五判二一五六頁　四・五〇）

續日本精神史研究

和　辻　哲　郎　著

本書は同著者に依る「日本精神史研究」の續篇である。前著刊行以來既に十年の年月を經たが、その間に書かれた日本精神に關する論文六篇をこゝに集錄したもので、「日本精神」「日本に於ける佛敎思想の移植」「日本の文藝と佛敎思想」「東洋美術の樣式」「現代日本と町人根性」「日本語と哲學の問題」から成つてゐる。

日本精神と云ふ言葉は目下の流行語の一つであり、甚だ明瞭なるものゝ如くにして最も不明瞭なるものである。著者の言ふ所の日本精神とは、大和魂とか、或ひは漠然たる氣魄、氣慨といふが如き形而上學的のものでもなく、又國體國民精神にのみ關するものとか、右翼的反動的保守的なる標語として解釋さるるが如きものでもなく、「主體としての日本民族」であつて、著者の日本精神史研究とは日本に於ける諸種の文化產物を通路としてそこに己れを表現せるそれぞれの時代の日本人の「生」を把捉することに外ならない。卽ち著者は本書に於て生活のあらゆる方面に實現せられた日本の文化を通じてそこに發露した日本精神を把握しようとするのである。

本書は統一的意圖のもとに書かれたものではなく、從つて歷史的に年代を追つて研究したものではないが、著者はこの六篇の論文に依り種々の方面から日本精神の有つ深さや豐かさを明にして、眞の日本精神に對する人々の注意を喚起する。日本精神に對する認識を高め、同時に文化史的に正しい理解と知識とを與へるものとして廣く薦めたい。

（昭和一〇、九、二五　神田區一橋　岩波書店　菊判四六一頁　二・八〇）

モラエス日本精神

花　野　富　藏　譯

われわれはラフカディオヘルンを想ふとき、同じく日本を愛

し、日本の土となつた文人ヴェンセスラオ・デ・モラエスの名を忘れてはならない。モラエスはポルトガルの人、言葉の關係で廣く知られなかつたが、日本を深く理解した點に於て、決してヘルンに劣るとは言へないであらう。モラエスの日本に來たのは明治三十年頃、その作品はヘルンの歿後を受けて次々と故國で出版された。晩年は妻の鄕里德島に移り住んで、その地に殘る日本の傳統の氣風を通して、日本人の生活を充分に味到し、昭和四年淋しくその生涯を閉ぢたのである。

モラエスの著述は可なり多いが、未だ殆んど邦譯されたものを見ない。この「日本精神」は最後の作で、モラエスの日本觀を纏めたものと見ることができる。はじめに「わたしは日本の人たちが、事物を根本的に味ふとき、どのやうに見たり感じたりしてゐるかといふことを本質的に摑んでみたいと思ふ」とある。生活・文化・歷史の種々の相に觸れてゐるが、實によく日本人の生活に同感し、理解してゐることが感ぜられる。全體としては日本人の社會生活に於ける沒個人性、自然との融合感を强調してゐる。又「日本そのものがことごとく藝術である」ときへいふ著者は、やはり傳統の優美な文化へ强く惹かれてゐるが「支那文明との交流に見られたあした例から推しても、西洋文明に優しさとか、雅かさとか、巧みさとか、正確さとかの點に優れた長所を加味した一種の文明を日本に發生させるにきまつてゐる」と日本の將來への期待を表白してゐる。

簡潔で、譯文も巧みであり、「あとがき」としてモラエスの生涯の可なり詳しい紹介がある。

（昭和一〇、六、二五　麴町區三番一　第一書房　四六判三一六頁　一・五〇）

儒教大觀

ブリュッケ著
後藤末雄譯

明治の初葉藩閥政府の橫暴と跋扈とに憤慨した志士がフランスの自由民權說に促がされて諸方に蹶起し、民選議院設立の運動を生ずるに至り、遂に此の運動は明治聖代の議會政治を成功せしめたことは我國人の記憶に新な所である。フランスの政治思想が何故にかくも速かに我が政界の新人に受容れられたか。本書はこの問題に對して頗る興味深い暗示を提供するであらう。

譯者後藤末雄氏は「支那思想のフランス西漸」によつて學位を得た人である。氏によれば佛蘭西に於ける儒教の研究は十七世紀末より十八世紀の初頭に亘る支那駐在の佛國耶蘇會士の仲介によるものである。時恰も佛蘭西は「朕は國家なり」と豪語した專制君主ルイ十四世の治世の末葉に近く天下は物情騷然として、革命の機運が大いに動きつゝあるの時であつた。時の宰相ベルタンは國民思想の轉換に腐心し、一日新帝ルイ十五世に謁して、フランス國民に支那思想を接種するの必要を奏進し、國王又是を嘉納されたといふ。一方政府論難の衝に當つてゐた啓蒙哲學者は儒教思想特にその德治主義に共鳴し壓制政治攻擊の武器に利用したといふ。かゝる時代に於て儒教の體系化を試みたのがブリュッケの儒教大觀である。佛蘭西革命の進展に對する儒教の役割はこれによつて多少推察されるであらう。一轉して我が幕末より明治の初葉を見るに久しく幕府の御用學問であつた儒教は洋學の勃興によつて一時息したかの觀がないではなかつた。然しながら彼にあつては儒教思想の輸入によつて革命を遂行したに對して、我にあつては彼の自由民權說を輸入して千有餘年國民精神を培養し來つた儒教精神の眞髓を覺醒せしめ遂に王政維新の大業を結實せしめたのである。

かく見來れば儒教の影響も眞に偉なりと言はざるを得ない。この偉大なる東洋精神の精華をば佛蘭西の史家ブリュッケの理解を通して再檢討することは時節柄徒爾ではあるまい。

尙本書の價値については譯者によつて「日本とフランスとに及ぼした儒教の影響」の題下に詳論せられて居る。本論文の暗示するところ又尠くはない。

（昭和一〇、五、一〇　麴町區三番町一　第一書房　菊判一六四頁　一・五〇）

西洋哲學史概說

桑木嚴翼著

著者の我が國哲學界に於ける地位に就いては贅言を要しないであらう。この著者によつて手頃に纏められた西洋哲學史の發刊を見たことを喜びとしたい。緖言に「此書は多年の講義中に於て到達せる結果を簡約に記述したもの」とある。

序說に於て「西洋哲學史の概念」「哲學史の問題」「哲學の意義」を論じて哲學史の學的意義を明にして、以下大體普通の哲學史の形式に從ひ、古代中世・近世の全體に亘つて概說してある。

著者は「哲學史は大體に於て先學的要素に富むだものから學的要素を純粹に現すに至る過程を示すものである」となしてゐるが、著者の立場は大體批評哲學的と見ることが出來るであらう。而してその包括的な見方と多年の研究に基き、その取扱ひ方は比較的偏頗なく公正であり、新しい研究にも觸

れ無駄なく要を盡してゐると考へられる。叙述も生硬なる點がなく、哲學の通史として上乘のものである。哲學を學ばうとするものの入門書として薦めたい。

（昭和一〇、一〇、二五　淀橋區戸塚町一ノ五八　早稲田大學出版部　四六判三九六頁　二・〇〇）

現代社會と人格生活

吉田靜致著

著者が數年前青島の邦人教育者の爲になした講演の筆記を改訂增補して「道德教育叢書」中の一篇として發行したものである。先づ「人格の特性」に於て現在的生活と超現在的生活とから生ずる人格の二重性、人格の有限卽無限的生活を論じ、著者の所謂特殊卽普遍主義に基いて人格の特性、道德の基礎を明かにし、次いで本書の主要部を成す「現代社會批判」に於て、社會乃至國家に於ける人格生活の眞諦を排他主義、自利主義、戰爭、愛國心、進化論、力政策、自由平等、社會主義、國際主義、ファシズム等の諸問題を說きつつ、やゝ系統的に明かにしてゐる。平易な倫理學概論といふべきもので現代社會の批判に當つても、必ずしも我々の周圍に於ける今日の問題を、詳細に取扱つてゐるものではなく、この點からはやゝ物足らぬ所もあらうが、社會生活に處する根本的なる態度を敎へるものであり、特に愛國的熱情のともすれば偏しがちな現代の時勢に、人格生活の原理を與へるものとして一讀きるべきものであらう。

（昭和一〇、六、二〇　神田駿河臺三ノ一　目黑書店　四六判二三九頁　一六・〇）

神道の再認識

加藤玄智著

神道は普通神社神道と宗派神道とに分けられ、後者は全く宗敎として取り扱はれるに對し、前者は往々宗敎の範圍外に置かれる。然し神社神道と雖も、宗敎的情操を多分に含んで居ることは、實際を見るものの否定できないところであらう。他の宗敎との關係に於て、いかに困難な問題を生ずるからとはいへ、之を單に國民道德などの領域に屬せしむることは確かに無理である。

著者は最近まで東京帝大で神道を講じて居た人、本書に於て、その多年の研究に基いて所謂神社神道を宗敎であるとし、卽ち世界的宗敎に對する國民的宗敎であるとして、その宗敎的諸特性を明にしようとしてゐる。

先づ神道の語義を規定し、宗敎の意味とその諸相を擧げて神道の宗敎的特徵を明にしてゐる、著者によれば、神道の本質は我が神皇に至極せる。換言すれば我が神皇を至極の對象とせる日本人の國家的宗敎心に在つて存し、神道をこの無形の方面から見れば國體神道であり、この國體神道を象徵的に形の上に表白したもの卽ち神社といふ有形化された方面から見れば神社神道であつて、この兩者を併せて國家的神道と呼ぶのである。著者は更に神道の他國の國家的宗敎に對する特異性を述べ、かゝる宗敎としての神道と憲法の信敎自由との問題を論じ、更に神道の自然宗敎的、迷信的殘滓の拂淨を唱へ、諸宗敎の歸一點を論じて、他の諸宗敎に對する關係を論じ、終りに敎育宗敎の提携問題に及んで居る。

著者の宗敎論そのものには多少物足りぬ點もあり、議論の餘地はあるかも知れぬが、神道の宗敎的意味を論じたものとして特色があり、神道への反省に資する所は少くないであらう。

（昭和一〇、一〇、二〇　目黑區中目黑二ノ五八二　章華社菊判三六二頁　三・三〇）

祭祀の本領

星野輝興著

神道は我が國民生活の古來からの指導原理であり、特に今日に於ては、日本精神反省の一般的風潮に伴つて各方面から種々に論ぜられてゐるが、その眞諦を正しく把握することは必ずしも容易でない。これを正しく把握するが爲には所謂神道の複雜多岐なる表現樣式とこれに關する論議を離れて、その成立の基礎であり、その指導的中心をなす所謂賢所神道の精神を顧ることは、かくべからざる要件といはねばならぬ。

本書は僅か四十頁に滿たない講演の筆記に過ぎないが、宮內省掌典としての著者が、宮中の祭祀に參列し、祭祀に際しての大御心を拜察して得た感銘に基き、眞の祭祀の精神を傳へようとしたものであつて、得難い消息を傳へるものである。雲上奧深き所のこと必ずしもすべてをつくすことはできないのであらうが、我々はこれによつて祭祀の本領、從つて神道の純粹な姿にある程度まで接することができる。一讀を薦めたい。

（昭和一〇、三、一五　日比谷公園　市政會館　日本文化協會出版部　四六判三九頁　・一五頁）

佛教論

増谷文雄著

此處一兩年に於ける我思想界の一角に宗教復興、佛教復興の聲が喧傳せられつゝある事は何人も是を認むるであらう。而して其の由つて來る所は所謂非常時日本に處する國民的信念の樹立にある事は明かである。然しながら果して宗教乃至佛教は正しく復興したか何うかと云ふことになると頗る疑はしい。眞の佛教復興とは佛教による正しき信仰が力强く實際生活の上に反映して來ねばならない。さうして正しい信仰には常に正しい佛教的知慧が伴はなければならない。

本書は眞の佛教復興を念願とする著者が近世に於ける宗教學的研究の結果を援用して、諸々の宗教の間にあつて佛教が如何なる地位を占め、且つ如何なる特色を有するかを闡明せんとするものである。

最初の「佛教研究方法論史」に於ては極めて簡單に佛滅後より現代に至る佛教研究方法の變遷及び歐米に於ける佛教研究の貢獻を叙べたもので次の「宗教としての佛教」「佛教信仰論」「佛教に於ける宗教的欲求の特異性」「崇拜對象論」「佛教生活論」の五篇は「原始佛教は宗教であるか」と云ふ設問に對する現時の宗教學的回答を手際よく取りまとめてある。これと同時に原始佛教に於けるこれ等の諸問題が其の後の發達佛教に於て如何なる變遷を見たかを論究して居ることは言ふまでもない。

然し何故に原始佛教の闡明に重點をおくかは附錄の「現代佛教論」に記して居る樣に、

「私たちは、近年になつてから幾度となく、原始佛教に歸れといふ主張を聞いたのであるが、この主張こそは、今日佛教のゆくべき道明日の佛教のあるべき姿を、賢明に指示してゐるものだと、私はいつも思つてゐる。……現代人に本當にふさはしい宗教は本來の佛教なのである。」

との主張に基くのである。

而して最後の「現代佛僧論」も原始佛教の研究に基き、福田行誡や渡邊海旭の佛僧論を稱讃し、現代佛僧の行くべき道を暗示して居る。

大要右の如く佛教の教義を論ずると云ふよりは宗教的特色を明らかにし、佛教が如何に現代人の宗教的要求に合致する宗教なるかを說いたものとして誠に得難い書である。本書の特色は此處にある。

（昭和一〇、一二、一五　麴町區內幸町一ノ五　理想社出版部　四六判二四一頁　一・五〇）

禪學讀本

山田靈林著

禪は說けるものであるか、禪を說くに一番よい說き方はどういふものであるか、それは知らない。しかし說くにはおそらく禪の堂奧に至つた高僧の書について、說く人の體驗をもつて語るしか方法はないであらう。本書の著者は、新井石禪師創刊の「禪の生活」を主幹して來た人であり、本書も著者の精進する道元禪師の教に從ひ、おのが生活體驗をあざなひつゝ、月々一課を執筆して十五課を成したといつてゐる。

物に觸れ、事に處して道元禪の妙機を語らうとしてゐるのであつて、その奧妙のところは固より窺ふべくもないが、著者がつとめて生活體驗に卽せんとしてゐることは認められるし、我々に多く訴へるところも知識人として禪に觸れてゐる箇所である。とかく斷片的なとび〳〵な感を與へることは、禪講話として共通のものゝやうであり、本書もその短を免れてゐるものではないやうであり、纏りのない感を與へる憾がないではないが、解りはよいやうにおもはれる。また禪講話に多い實例も卑俗に墮する事なく、間々不適當におもはれるものはあつても、大體において知識的であることもよいやうに思ふ。それにしては漫畫の挿繪はなくもがなと思ふ。

本書を讀めば道元禪の要點を會得することが出來よう。「只管打坐」の修行を說く道元の教は、高く端嚴な道德の世界をおもはせるものがあり、それ故に現代生活人の最も近づきうべき道のやうにおもはれる。卷末には「坐禪の實修法」を對話的に說明してゐる。

（昭和九、一一、一五　麴町區三番町一　第一書房　四六判三二五頁　一・五〇）

內的生命觀

吉田賢龍著

諫言耳に逆ふとは古來言ひふるされた語である。說教や御談議と知つてこれに耳を貸す人も少いし、教訓修養といふ嚴しい銘打つた書籍は斥けられるのが例である。

然るに本書は久しく廣島文理科大學長であつた筆者が其の深遠なる佛教的人生觀をば極めて興味深く且つ平易なる表現を以て大衆と共に味ふ態度を以つて語られたもので、所謂說教に偏らず、理論に偏せず、極めて示唆に富む新修養書である。

所謂內的生命觀とは功利化された吾々の外面的活動の背後

には全く功利を超越した自己目的の內的生命が陰に活動しつゝある事を力說高調されたものである。この內的生命の全的活動こそ萬德の根源であらねばならない。

教育上の信念も、釋尊の自覺も、慈母の愛も、明朗なる人生も、乃至至純なる日本精神も、この內的生命の發現によつて純化されることを古今東西の史實、事蹟によつて餘蘊なく說述されてゐる。

（昭和一〇、六、二五　五版　神田區駿河臺三丁目一　目黑書店　四六判二二四頁　一・六〇）

道　元（日本佛敎聖者傳第八）

主室諦成著

道元禪師の宗風は當時の南都北嶺の僧徒及び他の新興佛敎の唱導者のそれとは其の出世觀に於ても其の實踐道に於ても極めて對蹠的な關係に立つて居る。卽ち南都北嶺の徒の主目的は一般に佛法の眞理を學ぶことではなくして權門に阿附して富貴榮達を求むることであり、他の新興佛敎の唱導者は所謂末法澆季の思想を基礎とし、俗耳に入り易い念佛唱題等の易行道を旗幟としての不安なる平安末期の人心の救濟に乘り出したのであつた。

この間にあつて道元禪師は專ら「學道はすべからく吾我を離るべし」「名聞利養にかゝはるべからず」と力說强調すると共にこれが實踐の爲めには京洛の地を避けて越前の山深く隱棲せられたのである。榮達を目的として寺院に進出する貴族の子弟の多かつた際に、權勢並びなき左大臣久我通視を父とし、九條關白基房を祖父とする禪師がかゝる態度に出でられたことは、いはゞ時流に逆行するものであつた。

一方禪師は天下を風靡した末法思想を徹底的に批判し、且つ末法到來におびえつゝあつた遁世者に、眞理體得への努力を勸告したのである。眞理の體得は易行によつて得らるべきではなくして血みどろな求道の精神と其の實踐とによつてのみ可能であることを率直に述べられて居る。この故に禪師は布敎傳道の代りに眞の佛法の體驗、護持を念として所謂一箇半箇を說得するを目的とせられたのである。越前への隱棲は此の方面からも說明し得られる。禪師の名が國民大衆の頭腦に印せられることの少なかつたことも略理解せられたであらう。

更に一轉して禪師の現代的意義如何について一言することも徒勞ではあるまい。昨年以來宗敎復興、佛敎復興の聲は都鄙に喧傳せられ、又人心の不安に乘じて所謂淫祠邪敎は隨所に橫行しつゝあり、旣成敎團は依然として宗敎的誠意を缺く所謂名聞利養の徒によつて充されつゝあるの情を呈し世は正に禪師の在世時代を彷彿せしむるものがある。この時にあたり日本の生める眞個の宗敎家道元禪師の生涯と其の宗敎の一般を知ることは極めて緊要であると信ずる。

古來道元禪師を傳するもの十數種に及ぶが、其の多くは僧侶を對象として述べられたに對して、本書は道元禪師傳の完成をライフワークとする著者が一般知識大衆に禪師の眞面目を傳へることを目的として執筆されたものである。當時に於ける日本及び宋の敎團の實情を比較的詳細に述べ禪師の高風を隨時隨所に點描するあたり、史家としての著者の周到なる用意も十分に窺はれる。敢へて本書を江湖に推す所以である。

（昭和一〇、七、二〇　京橋區京橋三ノ四　日本評論社　四六判二七四頁　一・二〇）

使徒パウロの神祕主義

佐野勝也著

キリスト敎を世界的にしたものとして、パウロのキリスト敎史上の、從つてまた西洋文化史上の意義は極めて重要であつて、「キリスト敎の建設者はイエスかパウロか」が曾つて宗敎學界の問題になつたほどである。西洋文化の根本的認識にはキリスト敎の理解を缺くことができず、キリスト敎の文化史的理解はパウロを通してなされなければならぬと言へるであらう。

著者は本書に於て先づパウロ研究の資料となるその書翰に關する諸問題を解き、古典ギリシヤ文化と異る、當時のギリシヤ的文化に於ける個人主義・コスモポリタニズム、その構成要素たる東洋諸宗敎、この文化のユダヤ人に與へた影響等を概說し、以下パウロの生ひ立ちと敎養から始めて、パウロの信仰をその各方面に亘つて詳說してゐる。著者によれば使徒パウロの信仰の中心はキリストとキリストを信ずるものとの靈的結合にあるが故に神秘主義的であり、しかもこの結合が神との合一といふ人格否定的な結合でなく、兩者が各自の人格を保有しつゝ緊密なる精神的交涉を行ふ所の、いはば神との交りと考へられてゐる點にその神秘主義の特色があるのである。そしてパウロの神秘主義はその信仰の從つてまた全精神生活の出發點卽ち基礎を成すものに外ならない。著者はその神秘主義をギリシヤ的神秘主義と對照して明にし、更にパウロの信仰がギリシヤ的文化に於ける諸宗敎並にユダヤ敎と如何に關係し、それらの要素を如何に採り入れたかを明にしてゐる。我々は本書を通してイエスとパウロとの間にギリシヤ的文化が介在してゐるといふ事情が、如何にパウロの特

殊なる位置を規定したかを詳しく知ることができる。

本書は元來博士論文として提出されたものに訂正を加へたものゝ由で、叙述は可なり學問的で、極めて博く諸家の說を參照してゐるが、決して煩はしい感じはなく行文も解りよい。附錄の「原始キリスト教の宗教史的研究」は最近のこの方面の研究の主潮を紹介してゐて簡略ながら有益である。

（昭和一〇、九、一〇　麴町區三番町一　第一書房　菊判三三六頁　二・五〇）

活ける宗教と人生

吉田清太郎　著

「私は日本民族が、「財產」と「人」と「己」との上に生活の基礎を置く事は甚だ危險であると云ふ事を知つて、どうしてもその基礎を神と良心との二つに置かねばならぬ。と云ふ事を三十年間主張して今日まで參りました」。

とは、壯年の頃同志社に學びて甦の體驗をなし更に聖靈の內在を發見し、七十有餘の老齡を以て今尙基督教の傳道に餘念のない著者の信仰談の最後を飾る貴重なる一節である。

本書は三編よりなる。第一編人生と宗教は一昨年東京高等工藝學校に開催された人形講習會に於ける講演に加筆されたものであるが、極めて平易に日常生活を通じて神を見る法を說かれたものである。氏の所謂神とは天の一角に君臨する槪念的の神ではなくて、生々化育、萬物を統一し、一定の規律の下に活動しつゝある大自然、大生命をば神の無限の智惠と威力と慈悲の顯現、神の榮光なりと信じこれを徧在の神と名づけて居る。次に我等は我に內在する神（良心）を發見し、祈りと感謝と努力を以て生涯を一貫すべきであると說いて居る。

第二編「信仰の眼に映じたる古今の人々」は本書の主篇で七十餘年の生涯に於て觀察し、師事し、面接した政治家、實業家、基督者、佛教各宗高僧等の信仰生活を著者の深奧なる體驗によつて綴られて居る。

其の說く所極めて該博殊に基督者の身を以つて深く臨濟禪の奧儀を參究して居るために宗教家に有りがちな偏狹に陷らず、又夙に日本的基督教を强調して居る等興味ある修養書として洵に好適であると信ずるものである。

（昭和九、一二、二五　東京市麴町區富士見町二丁目八　雄山閣　四六判四八四頁　一・八〇）

和辻哲郎氏の「風土」

—人間學的考察—

谷川徹三

この書は私には實に親しい書である。この中の一章をなす「藝術の風土的性格」が岩波講座「世界思潮」に「ところによつて異る藝術の特殊性」として發表せられて以來、引きつづいて雜誌「思想」に「風土」が出、「沙漠」が出、「モンスーン」が出、最近に「牧場」が出るまで、私はあんまり度々感服しつづけて來たので今ではもうよその本のやうに思へなくなつてしまつた。紹介や批評をするのもむしろよそよそしいやうな氣持である。

私は何よりもこの書が然るべき歐羅巴の言葉に飜譯されることを願つてゐる。英語でもフランス語でもドイツ語でもよいが、やはり著者の教養やものゝ考へ方の型からすればドイツ語に譯されるのが最も適當であらう。とにかくしかし、この書が歐羅巴の言葉に譯されたら、日本人の書いたものが初めて歐羅巴の精神科學に一寄與をなすといふ日本の精神科學にとつても歐羅巴の精神科學にとつても劃期的な一事實が起るであらう。自然科學の領域ではすでに多くのかういふ寄與が日本人によつてなされてゐる。しかし精神科學の方面ではわれ／＼は受取るだけで與へるところがなかつた。考古學や美術史上の研究報告がないわけではない。しかし一つの卓拔な創見によつて貫かれた——日本人のものを見る眼と思想する力とを十分に示すに足るやうな、つまりかういふものは今までなかつたのである。

日本語といふ言葉の障りが勿論事情をさうさせてゐたのである。しかし日本語といふ障りがなくても、今日までの日本の學問的水準ではどれだけの寄與をなし得たか疑はしい。かつては橫文字を縱に直すだけで學者になれた時代があつた。その習慣が今も尙ほ遺つてゐる。自分の頭と眼とを働かせることに對して極端に臆病である。偶々自分の頭と眼とを働かせるものは恐るべき獨斷家になつたり、狂信者になつてしまふ。かういふ分裂は結局まだ歐羅巴的精神科學の育つ地盤が十分でなかつたからである。日本精神科學ともいふべきものゝ傳統的地盤はあつたが、その上に歐羅巴的精神科學をそのまゝ打ちたてることはできないし、さうかと言つてそれは澎湃として入りきたつた自然科學と手をつないでその古い地盤の上に自己を更に發展させ確立させることはできなかつたのである。

かういふ事情のもとにあつた日本の精神科學に於いては、

それゆゑ、日本の學界に於いて非常に大きな意義をもつものであつても、歐羅巴の學界に對する寄與としては甚だ貧しいものが少くない。これもまた日本的特殊性の一つであるが、學界の水準の一般的向上によつてかういふ日本的特殊性が漸次なくならうとしてゐる。しかし興味のあることは、その學界の水準の一般的向上そのものが歐羅巴人の單なる受け賣りを通用させなくなるところに――つまり日本人が日本人としての業績を示すところに、さきの日本的特殊性を克服して行つてゐるといふ事實である。

かゝる新しい局面展開の最も顯著な一示標として、この日本人の獨創に滿ちた書物が一時も早く歐羅巴の言葉に飜譯せられることを願ふ所以である。

（昭和一〇、九、二五　神田區一橋通　岩波書店　菊判四〇七頁　二・五〇）

生活文化の東西

鼓　常　良　著

著者は曾て本協會推薦の「日本藝術樣式の研究」に於て、藝術に現れたわが國文化の特性を西洋のそれと比較研究した人であるが、「生活文化の東西」はこの著者が、主に日常生活に現はれた所を通して、わが文化と西洋文化との相違を示し、あはせて西洋文化の基礎をなす生活感情、思想傾向の特色を明にしようとしたものである。序に「著者が往年滯歐中の覺書を醱酵素として、それを文獻的研究で補つたもの」とあり、多くの短篇を系統的に集め五項目に分けてゐる。

第一「文化の東西」に於て、日本の文化が同じ東洋と言つても、印度・支那の文化と異り、最も西洋文化に對立的なものである事を力說し、更に日本人に特有の自然に對する親愛感を明にし、第二「生活構成の思想」に於て、神話、宗教、武士道騎士道、ナチスの理想などを問題として、主に思想傾向の相違を概說的に指摘してゐる。

以上をいはゞ總論的一般論として、以下に著者の見聞、體驗した所に基き日本と西洋との實際生活上の相違を「實用生活」「感情生活」「生命享樂」「趣味生活」の四項目に分け、多方面に亘り彼此對照して述べ、寫眞、插繪も入れてある。これらの叙述に當つて著者は隨時隱當な批評感想を加へてゐるが敎へる所が多い。今日の時勢に當つて日本文化の健全なる發展を期するために西洋の精神的敎養、文化の諸相を一層明に見直すことは特に必要である。本書はその一資料として薦められるべきものと考へられる。

（昭和一〇、四、一五　目黑區二ノ五八二　章華社　四六判四六三頁　二・五〇）

民族性と神話

松　村　武　雄　著

本書は神話學研究者である著者が、埃及・希臘・羅馬・北歐・ケルト・日本の六民族に亘り、その民族性、民族精神の特殊性若くは個性が、その民族の心的產物の一つである神話の內容を如何に決定し、又如何にそこに反映されてゐるかを明にしたものである。

民族性を推斷するに當つては、博く諸家の說を涉獵して論じて居り、その斷定は極めて妥當と考へられる。

第一章にかなり詳しく取扱上の注意を述べ、以下章を分つて、上述の六民族について、民族性と神話との關係を明にして居る。本書の特色を成すところは、之等を相互に比較してそれぞれ特色を際立たせてゐることにあるが、必要によつては印度、波斯、露西亞その他の民族にも觸れ、この點かなり包括的である。

特に日本の場合では、その神話が特有の國家觀、皇室觀により極めて高度に纏め上げられてゐること、神話が直ちに歷史につながつてゐること、自然神話の稀少なること、宇宙終局觀のないこと、並びに高天原・黃泉國の觀想の特殊性、善惡二元の關係の特殊性などを通して、その然らしめた民族的特性を明にし、更に神話に反映された潔淨の愛好・現實肯定・明るさの愛好・單純簡樸なる特性等を擧げ、他と比較しつゝ筆を進めてゐる、

本書は必ずしも面白く通讀できる本ではないが、叙述は通俗的で極めて解り易く、神話などの說明もかなり親切である。民族の問題の論ぜられる今日民族性に對する公平明確な觀念を養ふ上に資する所が多いであらう。

（昭和九、一〇、三〇　神田區錦町三ノ一七　培風館　菊判四三九頁　三・八〇）

人類の意志に就て

武者小路實篤著

この世の中には驚ろく程澤山の人間が生きてゐる。そして中には隨分一生懸命に生きてゐる人々も決して少くない。だがほんとうの生き方をしてゐる人といふものは存外多くはないのだ。

ではほんとうの生き方とは何か、それは人類の意志に適つた生き方、人類の（全體としての）完全へ向つての成長といふ永遠の目的に適つた生き方でなくてはならない。人間は生

きる爲にいろ〳〵のもの――感覺や、心の動きや、快苦や――を與へられてゐる。それを石ころが地上にあるのと一般、事實だといつてしまへばそれまでのことだが、少し氣をつけて見るならばそこに眞に用意周到な人間を生きさせる爲の巧みが窺はれるであらう。これ程のことが無意味であらうとは思はれない。そしてすなほに純粹に生きんとするものならば、その事實の奥にこそ人間にこれらのものを與へたものが人間に何う生きて欲しがつてゐるかを感じないわけにはいかないのだ。

そのやうな意味での「人類の意志」と、それの望んでゐるほんとうの生き方の意味を、武者小路さんはその稀に見るすなほさと純粹さとを以て感得し、そしてそれをこの本の中で率直にいひ表してゐるのである。いはばそれは生きることの文學であつて所謂處世訓ではない。押しつけがましい教訓はこの本の本領ではないのだ。

だからこの本は別の生き方をしてゐる多くの人々にその生き方を改めさせる力を持つてはゐないかも知れない。しかしほんとうの生き方をしようとしてゐるある人々にとつてこの著者の言葉は大きな慰めでありまた力を與へて呉れるものである。出來るだけ多くの人がこの本を讀んで同感が持てればいゝと思ふ。

（昭和一〇、七、一五　神田區一橋通　岩波書店　四六判二〇八頁・七〇）

戀愛と結婚の書

菊池　寛　著

戀愛と結婚とは人生に取つて最も重要なる課題である。さうしてそれは半ば不可解な謎であるのかも知れない。古來この謎の解決のために如何に多くの尊き犠牲が拂はれたであらうか。然しながらこの謎は果して永久に不可解なのであらうか。

著者は「現代の青年男女は戀愛について何の豫備知識も與へられてゐない」し又「結婚に就いてもその心得や道德が少しも說かれてゐない」事を遺憾とし「現代日本の子女を戀愛の災禍や不幸から救ふためには戀愛についての心得や道德が、もつと公然と說かれてもよく」又「もう少し本質的に、結婚の精神生活に觸れた敎訓、性的生活に卽した敎訓が青年子女に與へられてもよい」と云ふ見解の下に極めて眞面目にこの難問題の解決に對する一私案を提供されて居る。

「戀愛篇」では戀愛の意義―戀愛觀―戀愛の心得―戀愛と結婚―戀愛と文藝―處女時代の貞操問題―誘惑に就いて―等主として受動的立場に立つ女子の心得を說き、「結婚篇前篇」では先づ我國現代の結婚制度の缺陷を指摘したる後―女性の四つの種類―結婚のために――現代結婚難論―良き配偶者の選擇法―結婚前の男女交際―について論じ、「後篇」に於ては結婚生活に於ける諸問題―家庭平和讀本―新婚夫婦の性生活―結婚生活と過去の秘密―三角關係に就いて―結婚生活の心得―結婚生活の眞諦―の諸項に分ちて極めて穩健妥當なる解說を試み、最後には如上の戀愛並に結婚觀によつて解決された「問答」十八篇をあげて居る。

戀愛問題がそれによつてこれ程に理想的に解決されるかどうかは疑問であり、結婚に於ては尙再婚の問題や、舅姑との關係問題等が殘されて居るが、單純な戀愛及び結婚に對する知識と注意とを與へる點では本書は類書中すぐれた特色を有すると信ずる。

（昭和一〇、一二、一〇　麴町區內幸町大阪ビル　モダン日本社　四六判二八一頁　一・五〇）

第二　歷史・傳記・地誌・紀行

維新史叢說

尾佐竹　猛　著

著者尾佐竹博士が明治維新史研究の第一人者であられることは、旣にかくれもなき事實であるし、その上本誌上でも、嘗て同じ著者の「明治文化叢說」を推薦するに際して、木村毅氏がその一流の輕妙な筆つきを以て紹介せられたこともあること故、今更これを繰返す必要は全くない。だから實をいへば苟しくも維新史に興味を有つ程の人に對しては、尾佐竹博士の維新史に關する本がまた出たぞといつて知らせるだけで、餘計なことはいはなくとも本書推薦の目的は充分に達せられる譯であるが、それはとも角、今、目のあたり本書を讀んで見ての面白さのあまり、蛇足と知りつゝその內容の一つ二つを感興のまゝに紹介して見ることにする。

幕末に於ける歐米各國の東洋政策、殊に英佛の政策が、我が維新の政變に重要な意味を有つてゐることは人のよく知るところであるが、それが何の程度まで實際の力を及ぼしてゐるかは誰でもの知り度く思ふことであらう。

あの江戶城明け渡しの談判で、西鄕と勝との劇的會見、それによつて大江戶が兵火を免れたことは、兩雄の腹藝として人口に膾炙してゐるところであるが、西鄕が江戶進軍を俄に

中止するゝに至つた裏面に英國公使パークスが動いてをり、更にその背後には横須賀造船所問題を中心に佛蘭西側の牽制が強く働いてゐたことまでを知る人はそう多くはないであらう。そればかりでない。本書を讀むならば幕府と薩長との葛藤は、そのまゝ佛と英との角逐であつたといへる程英佛の駈引は深刻であつたことが分つて、日本人として眞に栗然たらざるを得ないところがある。佛が幕府に對し、軍艦三隻と軍資金六百萬兩を貸すからそれで薩長を叩き潰しては何うかといふやうな驚くべき提案をしてゐる事實があるし、英の薩長に對する亦これに準ずるものがある。この危機一髪の間に處して西郷が「日本政體變革の儀は何れとも吾々盡力致すべき筋にて」といつて英の助力をキツパリ斷り、慶喜また「祖宗の業を失ふこと申譯無きに似たるも、余は死すとも天子に反抗せず」とばかり斷乎として佛の援助を拒絶してゐるところなど、我が國體の然らしむることゝはいへ誠に溜飲の下るを覺える快聞である。

（昭和一〇、一〇、四　下谷車坂區一五　學而書院　四六判　三三三頁　二・〇〇）

明治初期文化史

清原貞雄著

冒頭に著者は次の樣に云つてゐる。

「歴史學は其研究せんとする時代の全貌を鳥瞰するを究極の目的とする。細部に亘つて色々考證し詮索する事は歴史學の重要なる仕事ではあるが、それは其の究極の目的に達するための手段であつて、それ自身が目的ではない。最後に於て其の時代の全體の相を摑む事が出來ない限り、如何に徹に入り、細を穿つた考證が遂げられてもそれは歴史學の目的を達したものと云ふ事は出來ないのである。」

近來明治初年の研究は種々の方法に依つて企てられ、關係述作の世に出てゐるものも決して少いわけではないが、この著者冒頭の言の樣に、明治初期を一つの時代として、全日本文化史の脈絡中に之が觀察を試みられたるものは類が少い。この種の方法に依る考察には、明治初期が既に歴史的時代に入つて居ることを前提としなければならないが、之に關して著者は「明治初年が現在と比較して、國力の發展、あらゆる文化の發達、教育の進歩、それら何れの點から見ても數十年以前とは隔世の感がある」と云ふ意味のことを云つて「明治時代、少くとも其の半は決して現代では無く、完全に歴史時代に入つたと見る事が出來る」と斷定してゐる。

本書は右の如き著者の方法に依つて、王政復古から明治二十二年二月十一日の憲法發布迄を一つの歴史的時代として、その全體の相を摑むことに努力せられたものである。内容は可也詳細に亘つてゐるが、記述は平易であるし、殊に事柄が現代と相去ること遠からぬ時代であるので讀んで解り難い所は少しもない。

（昭和一〇、五、二九　神田神保町一ノ五五　賢文館　菊判　三八九頁、三・二〇）

西洋史新講

大類伸著

元來西洋史はその性質上數ケ國と一緒に取扱ふ爲、一國史に比し内容も記述も複雜になることは避け難い。殊にそれが事件の記述を主とした場合に於て特に然りであるが、本書は個々の史實の解説を主としてゐない所謂文化史的の扱ひ方で、時代々々の綜合觀察が主となつてゐるので、菊判八三三頁の大冊であるにも拘らず、少しも讀み難い感じがしないのは、一つには著者の平明な文章にも依ることゝ思ふ。

内容は古代史、中世史、近世史、最近世史に分つて記述されて居るが、勿論近世に至る程記述が詳細である。又可也具體的の事實に卽して記述が進められてゐる場合もあるが、之は次の事實、次の時世に對する相關的立場を保つ爲の記述であつて、事實の記錄の單なる羅列ではない。爰に著者の目指した「政治史や精神史を綜合的に考察した文化史的叙述」の苦心のさまが窺へる。又本文を離れて註釋的に亘る部分、或は特殊な事柄に關する解説、歴史上の逸話の如きものは特に活字を小にして本文と區別し、一見夫と知らしめてゐる。又個有名詞に關しては脚註の形式を以て原綴を示してゐる。收錄年代の範圍は太古より始めて、最近世はワシントン、ロンドン等に於ける軍縮會議、戰債問題、ロンドン世界經濟會議等、歐羅巴を中心とする世界經濟會議等、歐羅巴を中心とする世界の動きに關する現代の事情まで收められてゐる。

（昭和九、一一、七　神田區神保町一ノ三　冨山房　菊判八三三頁　索引二四頁　四・五〇）

大楠公記

社會教育會編

序文に前山周信氏の執筆にかゝるとある。前山氏は少壯の南朝史研究者。本書は史實に卽して楠正成の事蹟及びその國史に於ける意義を通俗的に明にしようとしたものである。

二篇に分ち、前篇實蹟篇で主として楠正成の事蹟を取扱つてゐる。先づ楠氏の活動の前提となつた當時の歴史的情勢を明かにするため、永久の變以來の公家幕府の事情を概説し、討幕の計畫が屢々失敗して笠置遷幸となり、正成の活躍を見るに至つた事情から、鎌倉幕府の滅亡、建武中興を經て、足利氏の謀反により、遂に正成の戰死に至る迄を述べ、その間幕府の大軍を千早の孤城に引受けて屈せず、諸國勤王軍の蜂起を促し、幕府の崩壞を餘儀なくせしめた正成の智謀、尊氏を西に敗走せしめた機略・湊川に於ける決死の勇戰、それらを貫く正成の誠忠を興味深く知らしめる。行文は平明、叙述も巧みで、しかも傳説は傳説として取扱ふといふ周到な用意も見られる。

後篇は遺烈篇として、楠公の人物、楠公の一族のこと、楠公の諸傳書の批判、楠公の近世尊皇思想、明治維新に及ぼせる影響を述べてゐる。口繪も多く、地圖もあり、附録として當時の略年表、參考書の簡單な解題が添へてある。

歴史的研究の基礎に立ち、しかも通俗的なる楠公傳として廣く一般に奬めたい。

（昭和一〇、五、一〇　麹町區裏霞關四　社會教育會　四六判三七〇頁　一・〇〇）

青年賴山陽

木崎好尙著

賴家の三珠樹と唱はれた春水を父に、春風、杏坪を叔父に又媒颺夫人を母に持つて生れた山陽は、云はゞ生れ落ちるときから學者たるべく約束されたようなものである。そして外祖父飯岡義齋は大阪では朱子學派の町儒として同時に町醫として知られた人であり、母媒颺の妹梅月は尾藤二洲に嫁してゐる。それのみか當時淺野藩を代表する儒家としての父春水は、江戸に京大阪に、その交りは廣く、當代の碩學文人はすべて春水の友であり、その何れもが少年久太郎（山陽）の文才を知つて之を愛でた。その中には菅茶山も居た　柴野栗山もゐた。浦上玉堂父子、古川古松軒、伊澤蘭軒、大槻磐里、同平泉何れもそうであつた。

十八の年、父よりの贐「遜志齋集」一卷と母の短冊を笈に收めて江戸に遊學、翌十九歳の折に歸藩した。これ迄の山陽は平和な學者の家庭に寧ろ平凡に育つたのであつた。が、江戸より歸つての青年山陽は、遂に勃々たる雄心を抑へ切れず二十一歳の秋廣島の生家を脱奔して京に上つたが、間もなく廣島に連れ歸られて幽屏年久しきに及んだ。この間、快鬱の

念を晴らす爲にしきりと文筆に親しみ、日本外史の初稿を始め幾多の稿を成した。三十一歳の暮、請はれて父の友菅茶山の村塾廉塾の教授として備後神邊に赴いた。然し間もなく神邊も去つて京に上り、遂にこゝに永住するに至つたのである。

本書は山陽父祖の代より筆を起し、滿三十歳の暮、備後神邊の菅茶山の村塾に赴く迄の青年期を扱つたもので、著者は山陽研究家として當今隨一である。隨つて本書は如何にも資料の豐富さを思はせる記述の仕方で、文章は平易簡潔にして讀み易い。引用された山陽その他の詩文書簡は漢文のものはすべて讀み下し文に書き改められ、意味不明の個所は必要に應じて著者の補註が加へられてある。記述は資料を中心にして著者の主觀に依る所は少い。山陽を傳するには誠に人を得たものと謂つべきである。

（昭和一一、二、一　目黒區中目黒二ノ五八二　章華社　四六判二六三頁　一・五〇）

石河幹明氏著
福澤諭吉

富田正文

近頃「福澤ルネサンス」といふ言葉をしば〳〵耳にする。明治文化の研究家の間に於ては、文化史的研究の立場より福澤先生の業績に著眼して斷片的にではあるが、先生の各種の著作文獻等を研究紹介することが、早くから行はれてゐたが、最近になつて、先生誕生百年祭を中心として、其前後に於て福澤研究熱が各方面の學者の間に頓に熾烈となつて來たのは著しい風潮で所謂福澤ルネサンスの觀を呈するに至つたのである。

これらの研究が續出するに至つたのは近來日本精神の由來を顧みる風潮の盛になつたことや其他種々の原因を擧げ得るであらうが、何といつても、資料典據の完備が最大の原因といはねばならぬ。卽ち大正十二年以來、石河幹明氏が前後八年に亘つて編纂に從事された「福澤諭吉傳」四卷三千數百頁竝に其副産物として出版された正續「福澤全集」十七卷一萬二千數百頁の巨然たる大集成が、それである。

石河氏は、明治十四年福澤先生の庇護の下に慶應義塾に入學し、卒業すると共に時事新報社に入り、明治三十四年先生の逝去に至るまで、前後二十年の久しきに亘り先生に直接接してゐたのであるから、單に其親疎の點からのみ見ても先生の門下中、其平生を知ること最も詳かなる一人であるが、石河氏の時事新報社に於ける仕事は社説記者として先生の指導の下に毎日の社會事象の批判論評の筆を執つてゐたので、文明

指導者として最も圓熟せる時代の福澤先生の精神的に最も深く且つ高い一面に絶えず接觸してゐたのである。小泉信三氏は、ボスウェル、エッケルマンを引例して、其被傳者との親疎の點より見ても、此の彼に優ること遙かに比較を絶してゐることを述べてゐるが、尙ほ被傳者の精神の秘奥に觸れること斯くの如く深い關係にある例は更に一層稀れなるものであらうと思はれる。

しかも、石河氏の傳記述者としての態度は、一般の傳記作者の陷り易い感傷的誇張の弊に墮せず、飽くまでも嚴密な史實記錄の主義を守り、先生の筆になる文章、記錄、書簡の類を夥しく引用して、先生自身をして先生の生涯を語らしめるといふ態度をとつてゐることも、傳記記述の上に一の好模範を示したものといひ得るであらう。

從つて先年刊行された「福澤諭吉傳」全四卷は、學界に嵐の如き絶讃を以て迎へられたのであるが、しかしながら、同書は餘りに浩瀚なるの故に、一般的に普及せしめる點からは、必ずしも不便がないとは言へないのである。著者も固より此點に氣付いてゐたので、「續福澤全集」の編纂を終るや更に筆硯を新にして、一般讀書子のために讀み易い手頃な福澤先生傳を著はさうとして著述に取掛り、遂に今回四六判五百頁の「福澤諭吉」を刊行することになつたのである。

今回の小傳記――嚢の四卷の傳記に比して便宜上小傳記と呼ぶが、これだけでも優に坊間に行はれる一般の傳記に比して決して小冊子とは言へない程、內容充實したものである――は、記述の序列は大體、四卷の大傳記と同樣であるが、單に嚢の大著の繁を省略したといふだけのものではなく、全篇新たなる起稿に係るので、前著に於て博引旁證、各種の文獻をして數十頁に亘り事實を說明せしめてゐるところを、小傳記に於ては石河氏自身の筆を以て僅々數頁の中に其大要を活寫し、或は數行の章句を以て簡潔に斷定を下し、全體として極めてコンクリートなこくのあるものとなり、前著に比し石河氏の主觀的な味が甚だ濃厚に出てゐる。

單に福澤先生の生涯を全面的に見ようとするには、寧ろ此小傳記の方が遙かに讀み易く且つ面白いであらう。且つ資料の方面に於ても、殊に先生の肖像寫眞は、前回の大著の刊行以後に發見せられたものを悉く網羅して、多くの關係寫眞と共に、隨所に插入してあるので、記事を補つて自から讀過の興味を增さしめてゐる。私は第一に此小傳記を讀み、更に進んで研究を志す人々には四卷の大著を繙讀することを薦めたいと思ふ。

石河氏が七十餘歲の高齡を以て、傳記編纂中に患れる眼疾により視力の不自由なるを力め、老來氣力ます〳〵旺盛で、

數年に亘る大業を卒へて更に斯くの如き著述を公にせられたのは、學者文人の生涯の當に斯くあるべきを身を以て示されたものといふべきである。

（昭和一〇、三、二五　神田一ッ橋通三　岩波書店　四六判五〇〇頁　一・五〇）

偉人權兵衞

―山本權兵衞伯逸話集―

村上貞一著

偉大なる軍政家として又剛腹なる政治家として三朝に歷仕した伯爵山本權兵衞は遂に昭和八年を以て逝いた。

「日露戰爭に殘した山本伯の大功績は第一に過去十年、周匝綿密水も洩らさぬ戰爭の準備である。第二は常備艦隊司令長官日高大將と東鄕中將との更迭である。」（一九頁）と述べられて居るやうに伯は當時海軍大臣として縱橫の手腕を振ひ皇國を富嶽の安きに置いたのである。

第一次山本內閣は天下の耳目を聳動した大正三年のシーメンス事件によつて倒壞し、伯に對する世評は香ばしくなかつたが、大正震災直後に於ける第二次山本內閣の出現は國民に一大安心を與へるに十分であつた。然るに又しても虎の門事件の突發によつて挂冠の已むなきに至り、その經倫を行ふことの出來なかつたことは惜しむべきであつた。

然しながら伯が明治、大正、昭和の三代を通じての最も偉大なる政治家の一人として國民の景仰をその一身に集めてゐる點については何人も異存はない筈である。

本書は大正六年より最後まで十有七年間の側近者たる著者が伯の眞面目を傳ふるに足る事項を中心として「信念の人」「膽略の人」「細心の人」「情の半面」「先輩後輩」「交友五話」「對外論」「處世道」「家庭の人として」附錄「權兵衞伯と著者」に分ち記述されたもので、叙述は極めて平明輕快であるから青年の好讀物と信ずる。

（昭和一〇、一二、一　京橋區銀座西一丁目三　實業之日本社　四六判四〇〇　一・五〇）

日本女性鑑

大日本聯合婦人會編

昭和九年東京に開かれた文部省主催の「我等の日本、皇國史大展覽會」に於て、日本女性の鑑として、それぞれその場面を展覽に供せられた史上の女性二十五人につき、その傳記・事蹟を詳述したものである。

選ばれた女性は時代順に擧げれば、弟橘媛・大葉子・上毛野形名妻・光明皇后・法均尼・清少納言・紫式部・巴御前・尼將軍政子・阿佛尼・松下禪尼・楠正行母・瓜生保母・山內一豐妻・細川忠興妻・木村重成妻・春日局・加賀千代女・乳人淺岡・蓮月尼・野村望東尼・和宮內親王・奥村五百子女史・水兵の母・乃木靜子夫人である。

光明皇后の御慈悲心、幕末多難な時勢に際して護國の女神となられた和宮內親王の御事は措いて、烈婦、貞婦、賢母、才媛等何れも、その偉れた資質をその境遇に應じて遺憾なく發揮し、日本女性の眞隨を示したものである。別に新研究があるわけではないが、讀者はこゝに擧げられた代表的女性の事蹟を通して、そこに一貫する日本女性を感得出來るであらう。

精神的・物質的に不安定な社會事情に應じて、種々複雜な婦人問題を生じつゝある今日、眞に日本婦人として生きる道を見出すために、本書は尠からざる參考となるであらう。叙述も平明で、讀みよいものである。

（昭和一〇、六、六　麴町區裏霞ケ關四番地　財團法人大日本聯合婦人會　四六判各約四八〇頁　各一・二〇）

山岳美觀

吉江喬松著
武井眞澄畫

著者は我國登山界では大先輩である。卷頭に收められた「木曾御嶽の兩面」と題する山行の記、これは御嶽を木曾側から飛彈に越して高山に出て、更に平湯、安房峠を程て白骨に至ると云ふコースであるが、これ明治三十九年の夏で、數ふれば實に三十年の昔のことである。この時には山嶽畫家の武井眞澄氏、歌人太田水穗氏、教育家岡村千馬太氏等が同行して居られる。その他本書には著者外遊の折訪れられた瑞西の自然美や、アルプス連峯の輝かしさを叙せられたもの、山岳美を論ぜられたもの、或は我國最近の登山文藝について語られたものなど、すべてで八篇の山に關する文章が收められてある。著者は早稻田大學教授として佛蘭西文學を講じて居られることは云ふ迄もないことであるが、本書に收められた諸篇の如きも、山の文章にあり勝ちな所謂どぎつさが少しもなく、穩やかで文學的である。年代は最初の一篇だけは大變古いが他は何れも比較的最近の文章である。

又本書には十數葉の山の繪が挿入されてあるが、之は山岳畫家武井眞澄氏の筆になるもので氏は齡耳順を過ぎた今日、未だに山河を跋涉するに壯者に讓らないと云ふことである。中央氣象臺の藤原咲平博士は本書に、特に眞澄氏筆の山岳の繪に序して「殆んど多くの他の畫家の山や雲に對して常にひそかに異議をもつにかゝわらず、眞澄畫く所に對して未だ嘗て些の矛盾をも不調和をも感じない。」と云つてその正確さについて折紙を付けて居られる。又本書の著者吉江氏は眞澄氏を語つて彼の國のセガンティニーに比し、セガンティニー描くところが歐羅巴アルプスの必然の表現であるならば、我が眞澄氏描くところは「日本アルプスの持つ雪霧の變幻や、森林の不思議や、項上の展望やすべてが武井氏の情緒と溶け合ひ、呼吸に通ひ、山と人との渾一合體したる、そして日本人が古來から抱いてゐる天然への憧れが、柔かな言ひ難いなつかしい筆趣となつて浮び上つてゐる」と云つてゐる。

以上本書は文と云ひ、繪と云ひ夏の讀物にまことに相應しいものとしてこゝに紹介する。

（昭和一〇、六、二七　神田區神保町三ノ二　協和書院　四六判一六〇頁　挿繪一三葉　一・五〇）

北の山

伊藤秀五郎著

著者は北海道大學の生物學者であるといふ。本書は北海道の山の紀行並に山に關する感想、小論、隨筆の類を集めてゐる。山登りの本は多いが、北海道の山紀行の本は珍らしい。著者は「自序」に「殆ど總てが北海道の山に關するもののみであるが、これは、私が日本の他の部分の山岳に興味を感じなかつたといふ譯からではなく、山に行く餘裕の最も多かつた學生時代を、豫科から大學、大學院と十年近くを北大に過したために、いきほひ北海道の山を歩く機會が多かつたからである。」といつてゐるが、著者が偶々その地に居住してゐたがために、殆んど世に知られない北海道の山々を世に紹介するこのよき紀行文集を得たわけである。

およそ山岳文學の上乘なるものは、いか樣のものであるかは知らない。しかし本書を讀むとその部類に屬するものではないかの感が深い。著者の筆はしつとりとおちついて、極めて寫實的に丹念である。これ或は著者が顯微鏡をのぞく生物學者たる風格の自らな反映であるかも知れない。しかしながらそれは科學的觀察の記述といふのではなく、著者のいふ

「私自身の山に於ける生活の記錄」といふ意味を湛えてゐるものである。著者は「靜觀的とは」といふ書簡體の小論のなかで「より豐かな心を以て自然を觀照しようとする態度」を「靜觀的な態度」とし、「僕は敢て靜觀的な態度で山登りをやつてゐるといはう。」といつてゐるが、その態度が全篇を貫いて現はれてゐるやうである。世上多く見るどぎつい、ぎら〳〵した登山文學とは類を異にするものであり、しかもいさきかも感傷に陷ることのない靜觀寫生の態度である。時恰も登山の好期にこれを弘く世に推奬する所以である。

（昭和一〇、五、五　神田區駿河臺町一ノ八　梓書房　菊大判二一一頁　二・五〇）

京都散歩

北尾鐐之助　著

曩に本協會が現代的紀行の雄篇として推薦した近畿景觀第四編紀伊、伊賀に次ぎ、京都散歩はその第五編として發刊された。

活動の都市としての近代大阪、阪神附近を描いた著者の麗筆にも容易に他に得難い趣はあつたが、昔ながらの靜寂を多分に保持してゐる大和、河內、近代文明から素通りされて居る紀伊伊賀の描寫の方が一層魅せられるものがあつた。

一千餘年の古都であつた京都、隨つて名所舊跡に富む京都を、さうした單なる名所記風でなしに、著者獨自の觀點から如何に展開するであらうかと云ふことは前四編の近畿景觀を見守つて來た筆者の興味のつながる處であつた。果せるかな卷頭の總說「京都散歩」の一節に、

「私は二年ばかり京都に住んでみたが、決して住みよいところであると思はなかつた。寧ろ大阪に來て解放されたやうな明朗さ、自由さを感じた。いさではときゞ〳〵朝行つて夕方に歸つて來る。別に京都がそれほどよいところとはおもはない、しかしさて何かの都合で、一日二日と泊つて見ると、不思議に京都のよさが生々と感じられて來るのである。」

と記されてある。一、二日で所謂京都名所を一巡しなければならぬ樣なあはただしい旅行では「京都のよさ」は味はへさうにもない。旅行の目的は、眺める素養を缺いて居るこの眼で背景を度外視した今の外見を瞥見すること丈ではなくて、過去と現在とを味はひ得る境地にまで到達することではなからうか。古都の一木一草に接せんとするものにとつては一層この感が深い。斯うした意味に於て京都を見んとするもの、京都を見たものは、本書によつて新しい觀點を指示されるに相違ない。

（昭和九、一一、五　大阪市西區靭上通一丁目　創元社　四六判三五四頁　二・〇〇）

笠間杲雄氏著
沙漠の國

文學博士　內藤智秀

在來我が國では西南アジヤ地方を謎の國として考へてゐた傾向がある。バグダッドはアラビヤン・ナイトによつて知られ、ダマスカスはサラセン模樣によつて紹介され、テヘラーンは迷路によつて敎へられ、アンゴラは魔力を持つ猫を以て聯想され、何れも皆中世的な不思議さを語るのである。然るに今吾々は文部省推薦本として此の「沙漠の國」を手にする事が出來た。そしてアジヤとか東洋とか云ふ言葉を明白に且つ正確に意識する事の出來るのは心より喜ばしく感ずる。卽ち吾々は西アジアが本書によつて我が國では始めて大衆的な明るみに出された樣な氣がするのである。

勿論在來とても此の方面に關する著者が我が國でも絕無であつたわけでない。其の通俗的なものだけを云つても新光社の世界地理風俗大系とか新潮社の世界現狀大觀、改造社の地理講座と云ふ樣な立派な書籍もあつたけれども、それ等は西アジヤの紹介だけを主要目的としたものではなかつた。從つて大冊であつて、其の一部分に此の方面の記事を見るのみであつた。

此の書籍本論の約三分の二はペルシヤの描寫に費されてゐるが、此のペルシヤは隋唐の時代から支那に立派な文化を輸入し、それが我が國に傳來して、多數の研究資料を吾人に提供してゐる。例へば正倉院の御物の中にはそれが尠くない。而も其の何れもが研究者に取つては實に何物を以ても換へられない貴重なものである。更に又明治十二年以來我國は其の條約改正問題に關聯し、又我が征韓論時代以來の大陸的政策によつて此の國に外交的工作を施した事は一再に留まらなかつた。之等の事を考へると、本書によつて闡明された西アジヤの現狀紹介が極めて意義のある事を意識させられる。

西アジヤ事情に限つたわけではないが、吾々は書籍にも書いてない事、又人の話にも語られない多數の事柄の存在を知る。然るに若しそれが明白に書き現はされた書籍のあつた場合、吾々は之に對して頭が下る。卽ち最大の敬意を拂ふのである。書籍の價値も斯樣な所に存するものであると考へるが、此の書は將に其の部に屬するものであると考へる。殊に外交非番錄には此の種の獨自的な味が極めて多い。卽ち横文字を縱文字に書き改めた種類のものでは斷じてないので

ある。

然しそれだけ草分けのパイオナーには相當の惱みがある。組織の點に於て本書は隨筆類に屬するものであらうが、歴史とか地理とか文學とか外交又は政治經濟等各專門の立場から見れば讀者は物足りない感じがするであらう。殊に書籍內容の縮圖である書名それ自身が、隨分問題になり得る事であらう。卽ち之等全體を沙漠の國々と云ふのは餘程考へた結果ではあらうが、窮した末の藝術的表現であらねばならぬ。又市場價値から見た標題であるとも云へるであらう。

要するに本書の文章の流暢で內容の豐富な事は何人も認める所であらう。西アジアの薄雲を取り拂つてくれる此の好著書を吾等の同胞に推擧して筆を擱く事とする。

（昭和一〇、六、二〇　神田區一橋通　岩波書店　四六判三六九頁　一・八〇）

北方への旅

アン・リンドバーク　著
深澤正策　著

昭和六年夏、北太平洋を橫斷する新航空路を開拓すべくリンドバーク夫妻はワシントンを出發、カナダ、アラスカ、千島を經て霞浦に飛來し、遂にその目的を貫徹した。全行程に約一箇月を費してゐる。更にそれより南京まで飛び、折からの揚子江氾濫に救濟委員會に參加し、三回に亘る調査飛行をなし、遂に漢口では愛機が江中で顚覆し、夫妻は救命浮標をつけて濁流に投ずるの危險をすら冒した。この大飛行が米阿空の連絡上に如何に大きな礎石を置いたものであるかは言ふまでもないが、更に年一回の船便しか有しないカナダ、アラスカの奧地に對する有效なる交通路を示した所にも重大な意義がある。本書は無電技師としてこの壯擧に參加したアン夫人自から貴重な體驗を筆にした空の旅行記である。いかにも流暢にして澁滯のない筆致であり、且つ女性らしい細やかな觀察豐かな感受性を隨所に示してゐる。カナダ、アラスカの荒涼たる風物の描寫、わが國の藝術に對する敏感な理解、揚子江大氾濫の敍述など女性にめづらしい達意の文章である。深澤氏の譯文もまた原書を傳へるに十分の注意と用意を經てゐることが覗はれる。

（昭和一〇、一二、九　芝區新橋七ノ一二　改造社　四六判三九四頁　一・五〇）

渡邊幾治郎著
明治天皇と立憲政治

法學博士　尾佐竹猛

天皇機關說が八釜しい問題となり、これを攻擊する人々は異口同音に、法學者は西洋の糟粕ばかり受賣をして、我國の歴史を知らぬから斯る怪しからん議論をすると批難するが、敢て憲法學者といはず、一般の法學者は、議論の當否を論ずる前に、歴史的研究に付ては多少の弱點を有するは、蔽ふべからざるの事實である。

特に憲法に付ては、我國の歴史といふよりも憲法制定の歴史そのものさへ知るの手掛りがなかつたのである。從つて唯だ『憲法義解』の說明と、歐米の法理論とに由り議論を組立つ事の外はなかつたので、これは憲法學者の短處といふよりも、その史料を知るを得なかつた學界一般の責任といつても然るべきである。

然るに、昨年からは、幸ひに幾多の好書に惠まるゝの機運が到來した。その第一は、伊藤博文編秘書類纂『憲法志料』の出版であり、その二は鈴木安藏氏著『憲法の歴史的研究』『日本憲政成立史』『日本憲法學の生誕と其發展』であり、更らに最近に淺井清氏の『明治立憲思想史に於ける英國議會制度の影響』が出で、憲法史學界は百華一時に妍を競ふの壯觀を呈した。

此の間に在つて、更らに別箇の立場から、嶄然群を拔いて居るのは、渡邊幾治郎氏の著『明治天皇と立憲政治』である。右に出た幾多の憲法史學者の著書は、あらゆる根本史料を搜索して精緻該博なる研究ではあるが、最も基本的に必要なる、明治天皇の立憲政治に對する大御心に就いては、何等知るところがなかつたのである。

これは申す迄もなく、九重雲深き處、到底民間學者の窺知し奉ることの出來得べからざることであるから、我人ともにあきらめて居つたのであるが、渡邊君は、明治天皇御紀編纂に從事すること二十年、傍ら大隈家の文書を整理して曩に『文書より觀たる大隈重信侯』の名著あり、今は春畝公追頌會にありて、伊藤博文の傳記編纂に從事して居り、又明治文化研究會の有力なる中堅として活躍して居る。正に絕好の適格者として、玆に『明治天皇と立憲政治』の著が出で來つたのである。

本書の內容は、第一、立憲政治と明治維新。第二、天皇御親政の完成。第三、憲法制定以前に於ける明治天皇と立憲政治。第四、憲法發布以後に於ける明治天皇と立憲政治。第五

明治天皇と政黨。との五篇に分れ、これに緒論と結論とがある。この編別を見た丈けでも、多言を要せないのである。しかも、その叙述は、單なる觀念論や、概念論ではなく、一々正確なる根本史料に據つて論斷してあり、寧ろ筆端は遠慮して書き盡さゞる點あるにあらずやと思はるゝ節もある程に、嚴正なる史學者としての立場を忘れられざらんと努めて居るものゝ如くである。

以上の各篇の中に、更らに幾多に區分されてあるが、その中でも、立憲政治に對する御教養。立憲政治に關する一貫せる叡慮。明治天皇の立憲的御態度。憲法中止の議に御耳をかしたまはず。の章の如きは本書にあらずんば知るを得ざるの事實である。更らに、日清戰爭の廣島臨時議會を傍聽したる國民新聞記者德富蘇峰氏の

人或は謂ふ、軍國の大事、復た議會を要するなしと、何ぞ其れ然らむ。嗟呼何ぞ其れ然らむ。……誰れか今日に於て帝國議會を閑却す可しと謂ふ乎。喃々近眼者よ、國家の大計大略は公等の知了する程、淺薄なるものにあらじ、……日本國民が立憲政治を享有するに足る資格を證明する一の試練也……

との所論を掲げある事も、興味ある史料である。

余輩は、法律家、政治家は固より一般國民に向つて此の書の再讀三讀を勸むるものである。

（昭和一〇、一、二七　下谷區下車坂一五　四六判二六二頁　學而書院　二・五〇）

板倉卓造著

國際紛爭史考

法學博士　中村進午

開國百年に滿たず大國として世界列國より對等視せられて以來僅に三十年に過ぎざる日本一般人士には國際慣例國際法國際紛爭に關する知識の行き渡らざること實に其一大缺欠である。其原因には種々雜多の事があるが其最も大なる原因は之を知るの材料に乏しきことゝ、多少それ等の材料があるにもせよ之を書き表はした書籍、雜誌、論文等が專門に渡り過ぐる爲に難解なる事との二個に歸するので無からうか。然るに本書「國際紛爭史考」は此の二個の缺欠を補ふに最も適當する所の好著である。序言に在る「寢轉んで讀めるやうな本」であると云ふことは勿論であるが、小說や映畫の種本の如きものでは無く學理を述べ實例を擧げ解說を下し專門的知識なき何人にも解り易く書き連ねたる所、甚しく感服に値する、書中「倫敦タイムス通信船の秘密」并に「バルチック艦隊の英國漁船擊沈」の二篇は日露戰爭中日本に關する重大問題でもあつたのであり日本人たる者の永遠に記憶すべき點である。其他の諸篇「ロシヤ義勇艦隊商船の軍艦變裝」「ドレスデンの行方」「看護婦ミス・キャヴェル銃殺事件」「英商船の獨逸潛水艇衝擊事件」「戰爭犯罪人問題のライプチヒ裁判」「孫逸仙監禁事件」「倫敦支那公使館の事實上の主人公」「政爭に利用された英國公使」「外公官の治外法權」「獨帝のアグレマン取消事件」「國際會議の席順と外交語」「山師の放言事件」「土耳其が拂つた侮辱の代價」「弱國に臨むときの國際聯盟」の各篇何れも通俗的に解し易く何人にも理解し得る樣に書き連ねてある經の中に之を縱にした緯が存在して居り卽ち學理を以て決する樣に說明して居る所、如何にも氣持良く通讀し得るのである。

外交の衝に當る者が如何なる小事にも細心の注意を爲さねばならぬか、其注意を極めて僅かに忘りたる爲に驚くべき程巨大なる結果を惹起したるか、戰爭の場合に軍人の苦心努力が如何に重大なるものであるか、又あつた實例、敵を欺瞞する力の必要、キャヴェル孃が死刑の宣告を受けたる後に白耳義駐在米國公使館法律顧問レヴァルに語りたる言葉の中の「神と永遠とを信じて立てる自分は愛國心だけではいけないと云ふことを知つたと自分は告白する。自分は何人をも憎まず又何人をも辛しと思つてはならない」の如き、「エムデン」「ドレスデン」兩艦の最後の如き、弱國の哀しさ、孫逸仙倫敦支那公使館監禁脫出の苦心等皆精神修養、人間心得草、國家觀念養成の具に供せらるべく、此書本來の目的たる國際法上の知識を普及する以外の副產物を生じたる效果亦極めて顯著なるを信ず。

要するに此書は今將に世界に雄飛せんとしつゝある日本國民に其心得べき敎訓を與ふる所の一つの大なるものとして貴ぶべき良書である。

（昭和一〇、四、二一　麴町區丸ビル　中央公論社　四六判五二〇頁　二・〇〇）

膨脹の日本

鶴見祐輔著

明治年間に於ける我國の膨脹躍進が德川二百有餘年の鎖國に基づく自己沈潛の賜であつたことは多くの人々の認むる處である。而してその膨脹の極點は日露戰爭であつたが、これを一轉機として我國は國內的問題に沒頭する集中時代にかへり、社會改造はその重要なる民族的關心事となつた。加ふるに國內に急速に起りつゝあつた人口增加は一日盜安を許さない民族死活の問題であつた。

然るに歐洲戰後日本移民禁止、日本商品の海外進出阻止、外國領土不可侵等の墻壁は高く日本民族發展の前途に築かるるに及び國運の前途を憂ひ、民族の消長を想念する識者の深憂は洵に言語に絶するものがあつた。

この時にあたり滿洲事變、米國の大恐慌、歐洲の政治並に經濟的混亂は期せずして起り、今や我民族は決河の勢を以つて膨脹前進の一途を驀進しつゝあるのである。

然しながら有爲の民族の膨脹前進は單なる本能的衝動であつてはならない。脚下に横はる大いなる危險の數々を凝視し反省することを忘れてはならないのである。

この躍進途上の日本國民面前に一大獅子吼を試みたものが本書である。

著者は先づ日本民族の尊き使命を說き、この使命の達成には希臘羅馬の興亡、近世の覇者英國の消長を最大の教訓として國民的理想の確立を縷述し、最後にこの使命を遂行すべき英雄の出現を待望して居る。現代の要求する英雄は最後に要約されて居る。

言々盡く愛國の大文字、句々盡く民族發展の羅針盤、我々は隨處にフィヒテの「獨逸國民に告ぐ」の風格を發見する。これ敢へて江湖に推す所以である。

（昭和一〇、五、一八　小石川區音羽町三ノ一九　大日本雄辯講談社　四六判三二六頁　・五〇）

日本の力

渡邊銕藏著

「日本の力」は「科學日本の力」「工業日本の力」「農業日本の力」「貿易日本の力」「交通日本の力」「軍備日本の力」に分解されてゐる。はじめに國土・資源・人口・國富・財政等を解說して「總說」とし、をはりに「日本の力と世界列强の力」をおいて日本の力を明瞭にせんとしてゐる。かくの如く本書は一章數十頁づゝを割當てゝ、各方面の國力を概說し、檢討したいはゞ一種の國勢圖會解說とも見られるべきものである。序文によれば、本書は新進學徒が長きに亙つて多大の勞力を費し、資料の蒐集、研究、整理の結果出來上つたものよしであるから、事實の正確は充分信賴してよいものとおもふ。

年鑑又は國勢圖會の類は各人必携のものともおもはれるけれど、乾燥無味の感を免れず、これを以て一般人の興味に訴へ、知識の增進を圖ることなどは期待すべくもないのである。本書は簡單ながら、發達並に現狀について一般的の解說を與へてゐるのであるから、極めて普通一般向であらうし、國勢の全般について概要の知識を與へるには時節柄好適のものであらう。

（昭和一〇、二、一八　目黑區中目黑二ノ五八二　章華社　四六判五〇二頁　一・五〇）

支那游記

室伏高信著

本書は著者が北支那から南京上海に亘つて數ヶ月の旅をして持ち歸つた支那政局の見聞記であり、かつ著者の意見書である。

著者は支那の各地において要人と語り、率直に自己の所信を陳開してゐる。著者の所信は極めて公明正大なものであつて、日支兩國は過去の一切の行懸りをすてゝ現實の正當な認識の上に立ち、誠意をもつて日支親善の實をあげて行かなければならない。それが東洋並に世界平和のための最短距離であり、日本國策の終始するところであるといふのである。著者のいはゆる自由人としての面目躍如たるものであつて何ものも匿すところなく自由奔放に論談してゐるやうである。「この書物は日本と支那との二大國民の親善の書であることを私は宣言する。」と著者はいつてゐる。

支那周游において著者の見た支那の著しい新動向は日本と同じく復古主義的・農本主義的運動であつた。本書の卷末には「中國本位文化建設宣言」なるものを附してゐるが、著者はそのやうな民族運動の新形態に新に起ちあがる力を認めてゐるのである。

著者は一般に政論をもつて名立たる人と見られてゐるのであるが、天成の俊敏なヂヤーナリストといふべく、その縱横暢達の行文は何かしら快適を感ぜしめ、一種青春の情感をそゝるものがあり、おもはず讀了せしめる妙趣がある。著者の如く濶達自由に胸襟を開くことが出來ればおそらくは個人的關係においては立ちどころに親善を來しうるのであらうが、國際關係の困難はいま一歩その奥にあるであらう。とまれ本書は一讀を推奬して憚らないものである。

（昭和一〇、九、一八　京橋區京橋三ノ四　日本評論社　四六判二九三頁　一・五〇）

法律哲學原理

三谷隆正著

法律家は腐つた木材を喰つて生きてゐる蛆蟲だなどとののしられながら、法律學が何等その思想的意義についての自覺をも有つことなく、ひたすらに與へられたるがまゝの實定法の技術的解釋と運用とを事としてゐるかぎり、それは理想主義的な青年達の心を捉へることは望まれないであらう。現に從來法律學は所謂概念法學の名に於て少くとも眞面目な青年學徒の情熱的な關心に價するものではあり得なかつた。

しかるに近時法律學界に於ける法律哲學的傾向復興の機運に伴ひ、法律學の世界的人生的意義が深く反省せられることとなるに及んで、これが根柢に世界觀乃至人生觀が要請せられ、かくて確乎たる信念の上に立つ法律學者は人生に對する指導的使命を自覺しつゝ、充分の自負と理想とを以て世の思想的な青年並びに有識者に向つて呼びかけんとしてゐるのである。

本書もまたプロテスタント的人生觀からの呼びかけの一つであつて、全卷を通じて社會生活乃至人生との深き聯關を意識しつゝ叙述が進められてをり、倫理學的色彩の濃いもので、それだけ他の法律哲學書に比して理想主義的香氣の高いものである。

法律哲學に關する著書は、さきに本誌にも紹介した田中耕太郎博士の好著がある他、尙相當の數に及んでゐるが、それらの內には外國に於ける學說の祖述に過ぎないと思はれるものも少くなく、獨自の見解を以て書かれたものは必ずしも多くはない。從つてそれらのものには熱意乏しく青年達の心を動かす力に缺けてゐる。

本書は著者も自認する如く、その主潮に於てカント及シュタムラーの思想に負ふところがあるとはいへ、全體として著者自身の「身親しき學的要求に忠實ならんことを期して」書かれたもので獨創と熱意に滿ちてゐる。

（昭和一〇、一、一〇　神田區一ッ橋通　岩波書店　菊判二八九頁　二・二〇）

法律に於ける倫理と技術

牧野英一著

牧野博士は思想家型の法律家である。博士の多年主張せられる自由法論といふのは法律を思想問題として考察する處に成立つ法律論だともいへるのである。法律は生活の技術たる一面を有つのではあるが、それは生活は畢竟倫理によつて完うされるものだといふ事と相結合される事によつて意味をなすものと考へられる。

「倫理自身常に自己を賢明に技術化することによつて自己の精神を發揮せねばならぬばかりでなく技術が一定の倫理的目標からして更に發達を續け倫理が一定の技術的方法に因つてその發展を進めるにつれ、その技術と倫理とが共に古きものを批判し改造し、これを展開しこれを轉化せしめることになるところに一種の觀察が全ふされねばならぬのではなからうか。」

と、ここに博士の自由法論の立場が成立つ譯である。そしてかくの如き立場は法律に關する考察を專門家から解放し、それを文化の問題たらしめ、思想の問題たらしめるものといはなくはなるまい。

本書は博士が最近に於ける法律思想の動向を概觀し、上述の如き立場からこれに批判を加へつゝ自由法論の展開を試みたものである。

（昭和九、五、三〇　神田區神保町二ノ一七　有斐閣　菊判三八四頁　三・三〇）

帝國憲法制定の精神
歐米各國學者政治家の評論

金子堅太郎述

帝國憲法は我が建國の體に基き、廣く海外各國の成法を斟酌することを精神として制定せられたものであることは、明治天皇が明治九年九月時の元老院議長有栖川宮熾仁親王に下し給ふた憲法起草の勅語によつても明かに拜察せられるところであり、それはまた今日我が憲法を解釋するに當つても寸時も忘れることを許されない原理たるものである。もとより苟くも日本臣民たるの自覺を有つものにして、我國體を忘れひたすら西洋の學說に心醉する如きものがあらうとは思はれぬが、近時憲法學說をめぐつて特に國體の明徵が問題とせられねばならぬ如き事態の發生したことは、われら日本國民として眞に憂慮に堪へぬことである。

この時に際し昭和十年七月中旬、文部省は主として大學高

等專門學校の法制修身擔當の教職員の爲に憲法講習會を開き、帝國憲法起草者の一人でしかも今日唯一の生存者であられる金子堅太郎伯爵より親しく憲法制定の由來を聞く二度と得難き好機が設けられた。

金子伯爵は當時八十三歳の高齢に達してをられ、しかも前年の大患の後であるにも拘らず酷暑中二時間の長きにわたつて、帝國憲法の起草者が如何に日本の歴史を重視し國體に深く留意したかを說き去り說き來つて聊かも疲勞の色を見せられなかつたことは、偏へに伯爵の憂國の至誠の現れとこの講筵に列したものの齊しく感激したところであつた。

本書はその講演の速記に伯爵の訂正補筆を得て上梓したものであつて、文部省は本講演の内容が出來るだけ多くの人に讀まれ以て國體の明徴に役立たん事を望んで同省自から一萬五千部を配布した他、尙日本文化協會、青年教育普及會、東京日日大阪毎日新聞社其他數箇所の出版業者に印刷發賣を許して之が普及をはかつてゐる。

（昭和一〇、八　何れも五十頁内外、定價は十錢より三十錢まで位）

法官餘談

三宅正太郎　著

題して法官餘談といふ。大審院判事三宅正太郎氏の筆である。かう聞かされたのでは何だかこはい本のやうに思はれさうだが、その發行所が新小說社といふ一寸法律書には不似合な名なのに首を傾けながら、試みに實物を手にする人は先づその裝釘の凝り方に氣付かぬ譯には行くまい。小村雪岱畫伯の意匠になる高雅なもの、威あつて猛からずといふ司法官の理想を偶したものであらうか。さて卷を開けばそこには法學博士何某氏のしかつめらしい序文の代りに、文人里見弴さんと久保田萬太郎さんの氣輕で氣の利いた序文が連らねられてゐる。ともあれ本書は法律書としては近頃型破りの一本といふべきである。一體三宅さんといふ人は判官としては型破りの人であられるらしい。名古屋控訴院判事時代に判決文を口語體で書き地名を凡て片假名で書かれたことは法律家の間では有名な話である。無論これは三宅さんとしては深い根據に基いてのことではあるが、それにしても本來保守的な傾きの強い裁判所としては當時可なり思ひ切つた型破りであつたに違ひない。本書は時論、隨筆、附錄の三部より成る。時論のところ司法制度の改革、訴訟手續の革新など如何にも三宅さんらしい革新意見で大いに傾聽に價すべく法律關係者を益すること尠くない。但しこゝは此の本の威ある部分で一般讀者には少々こはいものである。隨筆は三宅さんが判決文をやさしく書く爲の文章練習の副產物なのだが、主として自分の取扱つた事件の筋を物語り風に書いたもの、實話的興味深く筆は下手な職業的作者を遠く凌ぎ、讀み物として一般讀者を惹付けること疑ひない。蓋し本書は内容に於ても小村畫伯の裝釘の如く威あつて猛からぬもの、結局それは三宅さんの人柄のあらはれなのであらう。

（昭和九、一二、二五　神田區錦町一ノ一四　新小說社　四六判三二七頁　二・〇〇）

世界經濟の常識

小島精一　著

本書は「前世紀以來の世界經濟の展開をその基本線に沿ふて發展的に考察し、それによつて現下の世界恐慌と經濟國家主義の本質とを歴史的な背景の下に檢討しやうとした」ものである。第一篇「現代世界經濟の基本的な分析」、第二篇「世界大戰後の世界經濟」、第三篇「最近世界經濟の特質」の三篇となつてゐるが、その第一篇が「序」にいはゆる「世界經濟の基本的な知識を極く判り易い形で、いはゆる教科書風な氣持で叙說したものである」といふのに最もよく當てはまる。國際經濟の原則的な事柄を、世界大戰前の經濟事實に基き、具體的に說述してくれたものであるが、慾をいへば初學者にはいま一層懇切な詳說が欲しかつたやうにおもふ。第二篇以下は世界經濟の苦難史の展開であつて、第二篇は復興期より合理化の時代までを大體取扱つてをり、第三篇は一九二九年の恐慌以後統制經濟の擡頭より最近に至るまでを取扱つてゐる。著者の見地は統制經濟の過程を合理化の過程の變質發展と見る見地であつて、經濟國家主義としての特性を顯著ならしめてゐるのである。

叙述は主として歐米並に日本の經濟事實につき、世界的に、發展的になされてゐるものであるから、各國の事情が纏まつて明かにされるわけには行かない。また國によつて精粗のあることも免れない。しかしながらありあまる材料をこのやうに簡明に整頓して叙述することは容易なわざではあるまい。しかもその叙述・文體ジャーナリスティックに溌剌としてゐるから興味もあり讀んで具體的に知識を得ることが出來ると共に、經濟國家主義的傾向の必然的發展性をよく理解することが出來るとおもふ。

（昭和一〇、二、四　京橋區第一相互館　千倉書房　四六判　二五二頁　一・〇〇）

農村問題解說

栗原藤七郎　著

本書は「農村問題と現代の經濟、社會、政治、文化等との關係を明瞭にし、農村問題の文明史的意義を國民の出來るだけ多くに充分に認識せしむる」ために、「農村問題を綜合的に一括して論述した書」である。題目を見ても「農村問題の意義」「農村問題の起因」「農村問題の重要性」「社會思想と農村問題」「農村問題對策の梗概」といふやうに、全般をつくしてゐる。たゞ最後の農村問題の對策を說くところは、序文でもいつてゐるやうに、紙數の都合上ほんの要項を示すに止まる程度になつてゐるのは惜しいが、入門の手引になる。「起因」「重要性」「社會思想」の各章に力をいれ、殊に「起因」の部分は各方面より觀察して餘蘊なきに近い。「重要性」の一章は本書の一特色と見られるものであつて、社會學的に、文化史觀的に、整つた說明を與へてゐる。「社會思想と農村問題」との章では著者の思想的立場を示してをり、序文でいつてゐる「著者は、大體に於て、進步的立場に立つつもりである。しかし左右兩翼の急進的改革案には贊成し難いものがある。社會は謙讓と相互扶助に依つてのみ進步すると、吾々は體驗的に信するからである。」といふ態度を明かに見てとることが出來る。本書が農村教育を重要視してゐることも一特色である。

總じて本書は篤實な著述であつて、入門書としては頗る適切なものである。

（昭和一〇、七、二五　神田區錦町一ノ四　明文堂　四六判　二八二頁　一・〇〇）

日本の過去現在及び未來

穗積重遠　著

穗積先生はいふまでもなく現役の法律學者として學問上に教育上に將また立法上に現にはなばなしい活躍を續けてをられるのであつて、かりそめにも先生を老人扱ひにするつもりは毛頭ないが、しかも先生の法學に於て先生の該博な知識が先生の圓滿な人格と渾然融和して、既に圓熟の域に達してゐると見ることは必ずしも非禮ではあるまい。

一體法律家は常に理窟に適つたことをいはなくてはならぬことももとよりであるが、それ故に法律家が常に理窟張つてをらねばならぬ理由は少しもない。しかし理窟張らないでゐてしかも理窟に適つたことをいふのは必ずしも樂なことではない。理窟がよく人格的にこなされてゐるとき、その理窟は初めて理窟張つた感じを脫却することが出來るのであらう。

穗積先生の說かれるところが常に肯綮に當つてゐて、われわれを充分に傾聽せしめるに足るものでありながら、しかも少しも理窟張つた感じを伴はないのは決してそこに理論の缺乏があるからではなくて、偏へに先生の豐富な學識と圓滿な人格との完全な融合に基くのに他ならないのである。

かくの如きは單なる頭ばかりの學者のよく眞似得べきところではないのであつて、われわれが先生の話を聞き書を讀むとき常に尊敬と共に深い親しみを感ずる所以である。

本書は先生が昨夏朝鮮教育會主催の平壤夏期大學でなされた講演の速記であつて、日本の過去及び現在に於ける文化の全面的な鳥瞰とその將來の見通しであり、先生の所謂「全日本意識」の展開である。好個の公民科讀本として推薦する。

（昭和一〇、五、二八　神田區神保町三ノ三　協和書院　四六判一九八頁　一・〇〇）

教育學講義

春山作樹　著

昭和八年十二月末帝國教育會冬期講習會に於ける前後十二時間に亘る講演筆記である。

第一章社會の同化作用「社會の到る所に行はれて居る社會の同化作用が有意的に、計畫的に行はれる限り之を教育といふ」といひ、教育の意味を說いて、社會精神の代行者としての教育者の資格に論及してゐる。

第二章一般陶冶と職業陶冶　社會の同化作用文化內容の傳承に基く相互理解を高めることを目標とする一般陶冶と、各人の社會的職分を目標として行はれる職業陶冶とが、個人の完成上不可分離のものであるとなし。

第三章文化の建設と歷史　一民族社會に於ける文化生活建設の體樣を考察し、價値あるものを社會の文化內容の中に取り入れるに際し、この價値を批判し、選擇するものは社會の歷史であるとし、この點から日本教育學研究の必要を力說してゐる。

第四章順應と生長　社會に順應させることと子供の內に有するものを生長せしむることとは結局一致することを明に

し、第五章に教育の組織化とその型を論じ、第六章に知識と實行とを對立せしめず有機體全體が何時も適當な行動をするやうに反應の仕方を改造して、人格を完成せしめるのが教育であることを說いてゐる。

第七章では兒童教育と青年教育の別を明にし、第八章に家庭教育、第九章に學校教育、第十章に社會教育を說明してゐる。

附錄に「國民教育論」「新教育の建設」の二篇がある。

本書は學校教育を主とする教育論でなく、家庭・學校・社會教育に亘る基礎的原理を極めて平明に論じたものである。

（昭和九、九、二五　神田區錦町　東洋圖書株式會資會社　菊判三〇三頁　二・八〇）

世界の青少年運動

小尾範治著

昨年の夏ハンガリー國ブダペストの郊外に於て第四回世界少年團大會が開催された。當時著者は同聯盟の依囑により派遣團を率ゐて大會に參加した。著者は各國の青少年が如何なる訓練情況にあるかをつぶさに視、尙大會の前後に亘り青少年運動に新生面を拓開したイタリー並びにドイツを視察し、フランス、イギリス及びアメリカを巡歷して、歸朝後著者が隨時發表せるものを今こゝにまとめたのが本書である。多趣味なる著者は故國を離れて大會に參加する迄の旅情と感想を俳句などに歌ひながら叙述してゐる。少年團世界大會參加記、ナチス化途上のドイツ、世界青少年運動の見聞記等、青少年運動關係者の一讀して然る可きものであらう。

（昭和一〇、一、二二　神田區一橋教育會館　青年教育普及會　四六判二二二頁　一・三〇）

子供とはどんなものか

波多野完治著

著者は新進氣鋭の兒童心理學者である。わが國における兒童心理研究の發達については序論「新しい兒童の見方」において實に簡潔明快に叙說してゐる。著者は最近の發達段階たる社會心理學の立場に立ち、本書は「子供とはどんなものか」「子供と子供らしい行爲」「出來る子と出來ない子」の三篇において、著者の研究の成果を一般的理解に適するやうな形にして發表したものである。

兒童心理に關する書は近來頻繁に出版せられるが、本書のやうに簡明な叙述のうちに際立つた新鮮味を藏するものは見當らないやうである。もとより幾分研究の若さと不充分さを感じさせるものであらうが、普通一般の親たちが讀んでも理解し得るといふ程度のもので、これほどに學的水準を保つてゐる著作は少いやうにおもふ。

本書を讀んで世の教師父兄は何かしら新な意味をもつて子供の性行を理解し、教育上種々の暗示をうけることが出來るであらうとおもふ。

（昭和一〇、四、二〇　神田區駿河臺三ノ六　刀江書院　四六判二二四頁　一・〇〇）

幼兒への理解

霜田靜志著

多くの子供は既に小學校に入學する迄にそれぞれの性質が決定し、快活な、人に對して親切な性質も、ひがんだ意地惡な性質も、或は涙脆く意氣地のない性質も、悉く誕生以來入學に至るまでの間の環境と其取扱ひによつて養はれるとみる著者は、子供の幼兒期に於ける取扱ひの重要なことを認めて、母親になるべく分り易いやうに幼兒の躾け方を說いてゐる。著者は兒童教育者としての多年の體驗に基いて、最近の幼兒研究の立場から、多くの實例を示して、幼兒に對する正しき理解を進め、更に努力してその指導に當つてゐる。

篇中最もすぐれたる個所は「母の希ひ、母の憫み」「問題の子供の取扱ひ」「良き生活訓練」等に含まれる。幼兒の性質或ひは性癖に對して母親の注意を喚起してゐる點にあると思ふ。母の愛が强ければ强い程それは盲目的であつてはならない、どこまでも母は幼兒の發育に理解をもつてよい取扱ひをしなければならぬと、諄々と說いてゐるところにある。

そこで著者は幼兒の「發育各期に於ける心理的取扱ひ」として、嬰兒期の幼兒前期（生後滿一年から滿三年まで）と幼兒後期（滿三年から學齡まで）の三期に分つてその各期間に於ける心身の發育、育兒の方法の可否、幼兒生活の指導を實例に卽して懇切に述べてゐる。次に幼稚園の使命とその保育の方法について述べ、幼稚園教育の協力によつて始めてその目的の達成せられることを力說してゐる。

尙最後に「母の問に答へて」と題して「幼兒に與へる玩具はどんなものがよいか」「童謠は嘘だといふ子供にどう答へたらよいか」「我儘で亂暴な子供はどうすればよいか」「幼兒の蓋癖はどうすればよいか」等、種々の幼兒の教育相談に對する著者の丁寧な回答を示してゐる。幼兒の教導に對する著者の言葉には聽くべきものが多い。

（昭和一〇、六、一五　神田區駿河臺三ノ六　刀江書院　四六判三六二頁　一・三〇）

愛育讀本

倉橋惣三
齋藤潔 著
青木誠四郎

本書は恩賜財團愛育會の編纂にかゝるもので家庭教育教科書といつた體裁のものである。目次は序說「愛育のこゝろ」より「出生」「新生兒の身體と心」「乳兒の身體發育」「乳兒の榮養」「玩具の選び方と與へ方」「幼兒の身體發育」「幼兒の心の動き」「幼兒の榮養」「良い習慣」「健康なる幼兒」「乳幼兒の病氣とその豫防」「伸びゆく智慧」の十二章であり、三著者がそれ〴〵專門の領域に屬する部分を分擔して書いたものと思はれる。卽ち出生より學齡に至るまでの乳幼兒の養育について、主として教育的な部分は倉橋氏が、醫學榮養に關するところは齋藤氏が、心理に關するところは青木氏が分擔し、綿密な協同の下に執筆せられたものゝやうに思はれる。文章においても會話體の同一調を保つてゐる。

一通り要を盡してなか〳〵よく出來てゐると思ふ。隨所に寫眞或は圖解を入れ、また要所に表示を揭げ、必要に應じて脚註を施すなど、一九〇頁の冊子風の體裁のものに盛られてゐる內容は相當に豐富であり、家庭において養育に關し知りたいとおもふことは一通り懇切に述べられてゐる。活字も教科書風に大きく、讀みよいし、解りよいし、家庭教育上まことに便益な、一本を各家庭に備へさせたく思はれるやうな本である。

（昭和一〇、一〇、一〇　神田區神保町一ノ一　三省堂　菊判一九二頁　〇・五〇）

感想集

子供と母の領分

鷹野つぎ 著

すく〳〵と生ひ立つ子供を中心としての家庭の和樂ほど世に幸福なものはあるまい。そしてこの家庭の和樂を創造して行くところの母性の限りなき勞苦ほど世にも尊くも涙ぐましいものはあるまい。然しながらこの幸福と勞苦とを泌々と味ふには現代生活ではあまりに逼迫して居るかに見える。頻々として報ぜられる家庭の悲劇、生活苦の叫びは何を物語るであらうか。

かうした時代に於て、ありふれた家庭の日常生活を深く反省し、子女の幸福、家庭の和樂を專らその念願とするつゝましやかな主婦の手記があるとするならば荒涼たる現代の家庭にとつてはある意味に於けるオアシスでなければならない。

本書は聰明にして敏感且つ文才に富める著者が十餘年に亘り母としての樣々の體驗を書き綴つた母性愛の結晶であり、滾々として盡くるところを知らない愛の泉でもある。筆者は本書を通讀することによつて現代の要求する慈母觀音を此の女性に於て見出し得た樣に思ふ。

內容はその類似によつて子供は希む—指導への考察—子供の世界—新しき母性—無限の感謝—愛別記の六篇に分けられて居るが、十餘年に亘つて諸々の新聞又は雜誌に發表されたものの中から、子供と母に關するものを集錄したものであるから全體として一貫したものを本書に求むることは出來ない。然しながら篇々悉く慈母の心情の流露であることは否定することは出來ない。

文章はその天禀であるかも知れぬが、二十一歲にして母となり、殆んど一人手で六人の子女を掬育して來たといふ著者の並々ならぬ苦心と努力とになる本書に對するとき、我々は襟を正さざるを得ない。

本書は育兒の書でもある。しかしそれは決してありふれた育兒書ではなくて深刻なる體驗より迸り出づる追想記である。敎訓的ではないが其處に無限の敎訓を藏してゐる。本書はまた病める兒を持ち、愛兒を失へる父母にとつては慰安の書でもある。我々はかゝる母に護られ、かゝる子に慕はるゝ母の幸福を思ふ。愛兒を失ふことは人生の最大の苦痛であるに相違ない。しかしこの體驗によつて親子の愛は愈々强固にせられる。其他幼兒の教育に關する母らしい心遣ひ、母性の尊さを物語る周到なる話題等盡く子を思ふ親心に觸れ得るものである。

內容右の如く眞に得がたき家庭の書として一般に推奬し得ると思ふ。

（昭和一〇、一一、二　神田區駿河臺二ノ一〇　四六判三二〇頁　一・八〇）

熱と愛との結晶　まごころ

村上寛 著

先に母性愛に關する涙の實話を錄した「成功の裏面に働く母ごころ」一篇をあらはして讀書界に多大のセンセーションを捲き起した大朝社巡回講師村上寛氏は今回その姉妹篇「熱と愛との結晶まごころ」を公刊された。

收むる處親の愛五話、子の思慕二話、兄弟愛、友の愛、鄉土愛、社會愛各一話、純情によつて子を發奮せしめたる母の

愛、親を慕ふ可憐な少年の話、わんぱくの兄を改心せしめた弟の友愛、共同一致の愛鄉心によつて小學校の改築を完うした話、五十五年世の嘲罵と戰つて架橋を實現した社會愛、何れも氏の靈筆によつて惻々として讀者の胸に迫り來るものがある。

理智に訴へて愛を語ることも一の方法には相違ないが、情を以て人に迫ることはより以上に人を感動せしむるものである。さうした意味に於て本書は愛に飢えて居る現代人にとつて一つのオアシスとなるであらう。

（昭和一〇、五、四　大阪市東區淡路町三丁目九　文友堂　四六判三一二頁　一・〇〇）

第四自然科學

天文學通論

關口鯉吉
鈴木敬信　著

天文學は他の科學ほど人間の物質的生活に深い交渉を持つてはゐないが、經緯度の測定、大規模の測量、航海等には天體觀測は絶對に必要である。又、社會生活を整へるに必要な「時」の測定、曆の編成、潮汐の豫測等はすべて天文學の領域である。この他天文學上の發見により數學、物理學、力學等の發達を促したことや、天文學によつて開かれた空間及び時間に於ける廣大なる宇宙の實現が哲學上の問題を提供したこと等を考ふる時、天文學の精神文化に對する貢獻は極めて大なりと言はざるを得ない。

加ふるに近時天文研究熱は著しく勃興し、天文學に關する基礎智識修得の必要が痛感せらるゝに至つた。本書の出現は洵に天文同好者に取つては一大福音と稱してよからう。

內容は一般天文學に於て取扱はれるものと大差なく、天文學の發達—天球—天體の座標—座標の補正—時—曆—惑星運動論—天體の距離及び大きさ—地球—月—太陽—內惑星—外惑星—彗星と流星—恒星—恒星の運動—變光星—二重星—星雲と星團—恒星の一生—宇宙の構造の二十有一章より成つて居る。

その叙述は序言にも述べられて居る樣に「實地に天を眺め星の運行を觀察してゐる人の立場より這入つて、次第に研究の歩を進め、遂に宇宙の奥に達する樣心懸け」られてあり、程度としては中學上級、小中學校の教師の教授の參考用を目指し、最近の學說をも取り入れて極めて懇切に說明されて居る。

通俗に墮せず、專門に偏せず天文學の一般を手際よく取扱はれた著者の勞を多とし、敢へて同好の士に奬めんとするものである。

（昭和一〇、二、二八　東京市神田區錦町三丁目　地人書館　菊大判三八六頁　三・八〇）

藤原咲平博士著

天文や氣象の話

中央氣象臺長
理學博士　岡田武松

日本程天災の多い國はない。時々起こる大地震は別としても、何年をきかには凶冷に襲はれるし、年に五六度は颱風もやつて來る。その外に多少災害を釀す程度の暴風雨や雷雨降雹なぞを數へれば年々夥多しい回數になる。天災だからと云つて諦めて仕舞へば夫れまでだが、是等の天災は全然防禦は出來なくとも、努力の仕樣に依つては災害丈けは大に輕減が出來る。況んや人命丈けならば、何とかして墮さないで濟もうと思ふ。夫には是等の天災に對する智識の普及が何よりも先決問題になる。藤原博士は一方では東京帝大の教授として氣象その他の災害科學の根本的研究をせられてゐるし、一方では中央氣象臺の技師として豫報の現業に從事してゐられるから、此種の智識の普及に乘り出される學者としては第一人者である。此書物は同博士が諸種の會合に於て、大衆向きに講演したる速記錄と諸種の雜誌に執筆された大衆向きの報文とを選擇し、適當に順序を附けて、編輯した上に、多少之を添刪して書物としたものである。四六判三百頁の手頃の冊子だが、內容は盛澤山である。之を擧げると、一、大氣の成層二、天氣豫報に就て　三、室戸颱風と其の教訓　四、颱風瑣談　五、曆の知識　六、天文と氣象の話　七、家庭生活と氣象　八、日本の氣候に就いて　九、水と濕氣に就て　十、山の氣象とその急變による遭難　十一、遭難記事に就いて十二、ベルゲンの濕原、の十二章から成り立つてゐる。卽ち書名が天文と氣象の話とあつても實は氣象の話が主となつてゐて、天文は十二篇中二篇しかない。是は著者の專門が氣象學だから當然首肯さるべき事柄である。

偖大氣の成層の章に於ては、大氣の釣合と成層の大要を說明し、類似の論法によつて人事方面の事象を解釋せられ、近

世の思想問題にも觸れてゐる。是なぞは只の理學者じや到底云へないことだ。次に「天氣豫報に就て」の章では日々ラヂオや新聞で報道される天氣豫報の發布されるまでの方法を判り易く說いてある。その次には「室戸颱風と其の敎訓」では一般に颱風の特性を說明し、暴風警報に注意すれば少くとも生命の保護丈けは出來ると云ふことを實例を擧げて說かれてゐる。「暦の知識」と「家庭生活と氣象」の二章は常識として誰でも知つてゐなくてはならないことを判り易く說明された。「山の氣象」や「山の遭難」は、山に生れ山に育ち、山に親んでゐて、然かも氣象事業の當事者である著者でなくては書けないものだ。この二章を讀まれて、その敎訓を實行されゝば、山で遭難する樣なことは先づ無くなると思ふ。章中山で霧にまかれて、咫尺を辨じなくなつた場合の心得なぞは著者が靑年時代の體驗から書かれたものと思ふが、實に適切なもののみだ。最後の章の「ベルゲンの濕原」は、僅かに六頁の短文だが、是は地理學徒には見逸す可からざる大文字だ。著者が那威に留學中に實地踏査から得た濕原の記述である。書中に多濕の岩山に放牧してある如き羊種を本邦に輸入して山地に飼育して見たらば羊毛自給の一端にはなりはせまいかと云ふ樣な類の濟世の言が處々に見出されるのは、著者が決して單なる理學者ではなく、熱烈なる愛國の志士であることを裏書きする。要するに本書は種々の意味から上て大衆向きの好著述であると思ふ。

（昭和一〇、七、二〇　神田區一ッ橋二ノ三　岩波書店　四六判三〇八頁　一・二〇）

暦と迷信

鈴木敬信著

われわれの日常生活の中から凡て不合理なものを除き去つて了ふべきだといふやうなことは出來ることでもないし、またよしそれが理想としていはれるにしても甚だあぢきないものの考へ方であると思ふ。

人生にうるほひを與へまた妙味を添へるものの內には何かしら不合理なところのあるものが多いのではなからうか、われわれは理想をいふときにも人生の不合理なものの存在を或程度まで許していゝと思ふ。例へば神を敬ふときにでも理性の上で神の存在が證明されてからでなくては頭が下がらないやうな合理主義よりも矢張「何事のおはしますかは知らねども」といふやうな不合理なところにほんとの神のありがたさがあるやうに思はれるのである。

しかしそれにしても今日科學全盛の時代に、もろもろの不合理の領域が不斷に狹められて行くことはもとより尊重され祝福されなくてはならない。かくて無智の產物である迷信の如き人生に有害なものは最早や今日の文化と共に存在を許さるべきではない筈である。ところが實際は天地五行說とか九星或は六曜の如き愚にもつかない迷信の數々が今尙白日の下に巾を利かせて我國民の生活に多大の損失を與へてゐるのは眞に嘆かはしいことといはなくてはならない。

これ等の迷信は少しく吟味するならば如何に荒唐無稽のものであるかが容易に了解されるのであつてそれ等を信ずる事が何んなに馬鹿らしいことであるかを悟る事の出來るものである。

本書は東京科學博物館の天文氣象部主任たる鈴木氏が今日行はれてゐる多くの迷信中暦と關係あるものを選びその正體を暴いてその由來の低級にして今日全く存在の理由を有ち得ざる所以を科學的に糺明したものである。卷末に揭げられた萬年暦は月齡の算出、潮汐の時刻、日食月食の日時等を知るに便利である。

（昭和一〇、五、一五　芝區南佐久間町二ノ三　恒星閣　四六判二二一頁　一・五〇）

民族問題をめぐりて

古屋芳雄著

民族問題が今日國際的にも最も重要な問題であることはいふまでもないが、これに對する一般の理解または對策は必ずしも正しいものではないやうに思はれる。

そもそも民族問題の由來するところが政治的、思想的、經濟的等その原因は複雜多岐であらうが、その根幹に生物學的機構の橫はることを看過しては、この問題を眞に理解し適切な對策を構ずることは出來ないのである。

例へば世界大戰後西洋文明諸國に見られる出生力の激減といふ事實が何を意味するかを考へて見るならばその間の消息は自ら明白となるであらう。またこの著者に從へば、最近喧しい日本精神についても、結局日本民族の生物的素質と、これに依存する精神的素質の固有性といふところまで研究のメスを入れるのでなくては、これが理解もまたその涵養も期待することはむづかしいのである。

本書は民族優生學の權威古屋博士が世の靑年識者にこの問題の正しき理解を促し度いとの熱意をもつて世に送られたもので、極めて平明な言葉で興味深く說かれてゐるうちに多く

の重要な民族生物學上の諸問題の意義を理解させる。中でも「社會現象としての男女出生比」、「斷種法と民族生物學的背景」「農村の去勢」の三篇は著者獨自の研究の結果に基くもので殊に興味深くまた價値の高いものである。尙本誌ではさきに同じ著者の「優生學原理と人類遺傳學」を紹介したのであるが、本書中の「進化遺傳學とその先達」「民族素質としての精神力」「才能の遺傳」の諸篇は舊著の內容と異ならない。本書にはこの他に「世界の民族よ何所へ行く」「民族と表現」「古代希臘人を考へる」「女性美と希臘民族の理想」「身邊雜記」等の讀みものが收められてゐる。

（昭和一〇、九、二五　京都市河原町二條下ル　人文書院　四六判二六六頁　二・〇〇）

趣味の植物採集

牧野富太郎著

近頃停車場や乘物の中で、胴籃を肩からつつた植物採集家をちよい〳〵見かけるやうであるが、勿論專門の人々が大部分であらうが、中にはアマチユア採集家も相當見受けるやうである。本書は專ら之等アマチユア採集家の爲に、平易に植物採集並びにその整理の方法を示したものである。

最初に序論的に植物採集の意義について簡單な說明がなされてゐる。卽ち植物を學術的に觀察する上に、採集と云ふことが如何に必要であるか、またアマチユアの單なる植物趣味から云つても如何に面白いものであるかなどに就いて。

次に採集の方法であるが、こゝで色々使用道具の選擇說明迄懇切につくされてあるが、特に採集胴籃について著者自身の考案になる、牧野式胴籃を推稱して居られるが、別に宣傳と云ふ程の意味もないやうである。これ迄が大體序論めいた所であつて、以下順次、四季折々の採集さるべき植物の種類、採集好適地の案內、標品の製作法について、恰も講演の樣な平明さを以て語られてゐる。尙卷末に、植物標品の歷史的考證にわたる數篇が收められ、之等の中には「植物學雜誌」などに旣に發表されたものなどもある。

以上の如く本書はあく迄「趣味の植物採集」であつて、アマチユア採集家の入門手引として企てられたものとして好きものである。

（昭和一〇、六、一二　神田區神保町一ノ一　三省堂　四六判二〇六頁　一・五〇）

野鳥禮讚

內田清之助著

數年來新聞や雜誌に發表されたもの、或はラヂオ放送の原稿など十八篇を蒐めて上梓されたもので一般隨筆として特にすぐれたものとは思はれないが、唯內容が著者專門の鳥類のみに關する隨筆であることが特色である。「私ども鳥類の保護に從ふ者」と自ら稱して居られるこの著者が、鳥の習性を、又生態を長年の觀察に基いて事もなげに隨筆風に書き流してある。畫家が四角四面に緊張して描いた鳥の畫を評して「この繪では頭が小鷽で、脚が中鷽」といつた工合に、云ふ所にも鳥學者らしい細かい觀察と專門家らしい自信の程がほの見えて、事實の正確さが自づと讀む者の心をとらへてゐる。又五百年前から現代までに地球上で絕滅した鳥の種類が百四十種もあり、凡そ二年半に一種類づゝの鳥が絕滅した勘定になると聞かされては、「鳥類の保護に從ふ者」ならずとも、いさゝか敎へられるところがある樣に思はれる。

別段記述に一貫した系統があるわけではなく、鳥に關する知識を與ふるものとしては甚だ損な本であるが、趣味的な讀み物として讀書子の机上に占むべき本書の位置は必ずあることと思ふ。體裁も荒木十畝畫伯描く所の見返しを用ひた上品なもので、挿入された十數葉の寫眞もまことに美事である。

（昭和一〇、九、五　神田區小川町一ノ一〇　巢林書房　四六判二四九頁　一・八〇）

山の隣人

長尾宏也著

信州霧ケ峰に、スキーヤーやハイカーの爲にヒユツテを經營しながら、鳥や狐と隣人の交りを結んで暮してゐる著者がものした山鄕風物誌である。山の住人――と云つても人間だけではない。そのあたりに住まふ獵人柚人の生活やしきたりについて述べた個所の面白さもありながら、著者が最も親しみを持つ山の隣人――葡萄澤の狐、猿公、栗鼠、猪、熊、その他鷹、山鳥、雉、樫鳥、雁、さては靑大將、山かゞし、縞蛇と云ふ樣な有難からぬ隣人に至るまでの、四季とり〴〵の生活を觀察して記したものである。昭和九年六月に「山鄕風物誌」と題する同じ著者の本が出版されてゐるが、本書は謂はゞ前著の續篇とも云ふべきものであるが、前著が各地の獵師や農夫の實見談をそのまゝ筆にのぼせたものが主であつたのに對して、本書は著者自身の實見觀察記が主である。又大部

分が霧ケ峰を中心としてゐるが、北アルプスの山郷、或は遠く蝦夷の島に迄及んでゐるものもある。記述は詩人らしい感覺の細やかさを示してはゐるが、時々感傷に墮し過ぎるきらひなきにしもあらずと思はれる。然し素朴な感じのする誠に美しい讀み物、體裁も前著山郷風物誌に比して美しく、氣のきいた挿繪カットが豐富である。

（昭和一〇、一〇、二〇　四谷區坂町七八　竹村書房　新四六判二四八頁　二・二〇）

第五　産　業

日本工業政策

吉野信次著

本書は現代日本工業全集の第三卷となつてをり、著者は現商工次官といふ專門家の專門的な著述といふべきものである。書目を見ると本全集は現代日本工業に關する專門的な知識の通俗普及化を目的としたものゝやうである。

本書は日本工業政策の全般を說いて日本産業の發達振りを知らしめるといふものである。世界大戰後急激に發展を來した日本産業界に、いかなる政策がいかにして現れ、いかなる經過をとり、いかに作用して來たかを當局者としての詳密さをもつて說述してゐるのである。國際勞働政策より基礎工業政策、中小工業對策より工業金融政策、産業統制政策といふやうに、全般の政策問題に及んでゐる。

我國が今日異常の産業發展を來してゐるといふことは誰しも知つてゐることであるが、その實際を審かにすることは容易でない。さらにそれに對して國家がいかなる對策を施してその發達を助長して來たかを知るものは稀なのである。本書のやうな專門家の詳細な著述は、たゞに從業者や特殊研究家に對して好箇の參考となるばかりでなく一般國民にとつても國民經濟への關心を高める上に稗益あるものとおもふのである。

（昭和一〇、二、一九　京橋區京橋三ノ四　日本評論社　四六判三四六頁　二・〇〇）

實用園藝

東京府立園藝學校編纂

「園藝に關係した書物も少くないが或は學術專門的のものであつたり、或は餘りに無稽で、是等園藝業者や同好の士に向く樣なものは殆ど之を見ない。玆に於て不肖本校職員と相詢り各專攻科目を分擔し餘暇を偷んで本書の編纂を志し、越味と實益とを旨として園藝の一般に小家畜の類をも加へ、凡そ其の生産除害利用等の方法を遍く且つ平易に記述したのが本書である。」（「序」）

內容は栽培汎論・疏菜・果樹・花卉・菊・花卉裝飾・庭園・盆栽・盆景・養畜・農産加工・病蟲害の十二編に分れ、一般に園藝の概念に含まれるものゝほか、花環・花束・挿花等の室內裝飾技藝に屬するものより、漬物・味噌・納豆等の日用品生産に至るまで網羅されてゐるのである。全卷六五八頁の大著であり、紙質よく多くの寫眞を挿入し、記述は百科辭典風に簡潔明瞭であり、しかも何となく柔かみがあり、親しみを感じさせるやうに出來てゐる。勿論專門園藝家の參考にもなるであらうが、より多く都會近郊居住者の趣味嗜好に調法な本のやうにもおもはれる。試みに花卉のところをあけて見ると、名稱に花言葉などを添へ、性狀種類栽培法などを說明してゐる。

この種の書物としては安心して奬めてよい一本であるとおもふ。

（昭和一〇、一、二〇　神田區錦町一ノ四　明文堂　菊版六五八頁　四・五〇）

魚と水産業

田中茂穗著

四面環海の我が國しかも世界三大漁場の一をひかへてゐる我國は水産物丈は無盡藏であるかの樣に考へられる。所が事實はこれと反對で、密漁や酷漁のために沿岸漁業は著しく不振で漁村の荒廢は農山村と同樣以上の狀態にあり、魚族の激減に伴ひ遠洋漁業も亦不況を告げ爲政者は其の對策に腐心して居る。その對策の第一が水産養殖移植であるが、一度有利な養殖が宣傳せられると各地一齊に行はれるため忽ち生産過剩に陷り却つて當業者を窮迫に導く場合が少くなく、ニジマス、カワマスの增殖事業も已に需要の飽和點に達せんとしてゐるとの事である。

又移殖について言へば臺灣泥鰌が關東の河川に放流されたために鮒の繁殖を阻止され、寒帶性のワカサギが熱帶に近い臺灣の日月潭に移殖されるといふ有樣で水産學者に多くの疑

問と深憂とをいだかせて居る。

著者は此等の實情に鑑み本書の隨所に當局者、職漁者と專門の學者との協同研究の必要を力說されて居る。水產業界の不振は單に當業者の窮迫を結果するばかりではなく國民の保健と密接な關係を有するものであるから我々は水產界百年の長計が一日も早く樹立せられんことを希望してやまないものである。

以上は主として爲政者と職漁者とについて記述したのであるが、消費者たる一般人も水產物殊に魚類等に對する觀念を修正する必要があらう。土用の丑の日の鰻が榮養に効果があるといふことは平賀源內の宣傳だといはれて居るが事實效果ありや否やは疑問視されて居る。これに反して鰯は下等な魚と考へられて居るがその營養價は何れの魚にも劣るものではないさうである。總じて魚肉は其の營養價について言へば鯛も鮪も鱈も鰊も鮎も鮭も略同樣であるにかゝはらず慣習と嗜好とによつて優劣があるやうに考へられるとの事である。從つて消費者としてはこれ等の事情に精通し、料理法を改善して安價な魚を求める事に着眼すべきである。

本書は右の如き趣旨により我國水產業の健實なる發展のために爲政者を鞭撻し、當業者を反省せしめ、消費者を敎導されて居る。

（昭和一〇、一、一五　麴町區九段四丁目八　叢文閣　菊判二六六頁　二・二〇）

第六　美術・諸藝

美と工藝

柳宗悅著

本書は最初「下手物とは何か」といふ題で出版されたのであるが、この再版に當つて、慣れない讀者に疎遠な感じを與へるのを避けるため「美と工藝」と改められたのである。「なぜ『下手物』が私の心を强く引くか」と「『下手物』から何を私が學び得たか」の各篇に分つて、「下手物」の意味とその美の發見、「下手物」の創作とその社會的位置を究明することによつて、民衆と工藝との關係、言ひ換へれば生活と美との交涉に深い考慮を拂つてゐる。

已に民藝の理論家として定評ある著者が、最も具體的なる民衆の所產としての「下手物」を通して、藝術の眞諦を說き、民藝の重大な意義をそのABCから細心に縷說したものである。著者は「下手物」に文化の諸問題の縮圖を見、それを世界的にまで擴げて行くことによつて、それは工藝乃至美の問題に終るのみでなく、如何に生くべきかの問題、引いては道德や宗敎の諸問題にまで連關を及ぼしてゐる。著者が之を尋討する事は、自然や人間の祕義を解く鍵を與へてくれると思はれるといふ所以である。

人間の日常生活に美を卽せしめる道は民藝の外にない。かゝる意味の卒直なる藝術の眞諦を會得せんとするの士に本書の一讀を奬めたい。

（昭和九、一二、二〇　牛込區揚場町八　建設社　四六判一三〇頁　二・〇〇）

美術と工藝の話

柳宗悅著

本書は工藝美術に對して極めて造詣深い著者が昨春東京中央放送局より放送された講演に加筆されたもので、內容は「美術と工藝」「前期の作物」「純正美術」「工藝美術」「實用工藝」「未來の進路」の六講と附錄「民藝の趣旨」よりなつて居る。

「美術と工藝」に於いては元來一體であつた兩者が現在に於ては全く異る二つの分野と考へらるゝに至つたことを述べ「前期の作物」は單に美を目的として作ることなく何れも生活上の必要品として作られ而もこれを作らしめた力は個人の力ではなくして時代全體の支持を得たものであり、尙當時の作物には現代のそれの如き出來不出來の差が少なかつたことをその特色として數へられて居る。

次には如何にして美術が工藝より獨立するに至つたかを詳述し、結局之を近世に於ける個性尊重の事實に歸してゐる。然しながら現代の個人的美術は今や病的な個性に斃れんとする傾向を有するが故に再び重要なる轉機に逢着して居ると結ばれてゐる。

次に純正美術の發生によつて低く評價された工藝が實用工藝たることに滿足せずして「美術的工藝」を製作せんとする傾向を生じたが作物を美の爲めに作らうとする個人的工藝も、貴族生活に相應はしくする爲めの貴族的工藝も共に社會性に乏しく、近時の傾向としては生活に卽して美を求むると云ふ工藝道が現はるゝに至つたことを述べてゐる。

これと同時に「實用工藝」に於ける手工藝と機械工藝との

三様式は各持長と限度とを有するものであるから互に排斥すべきものではなくて如何に補ひあつて將來に進出すべきかは人々に課せられた重大且つ興味深い問題であると說いてある。

上述の如く「美術」「工藝美術」「實用工藝」は「工藝」より分化したものであるけれども今や製作の技術、技術者、目的等に於て著しき對立を示すに至つて居る。この對立を如何に融合すべきかは「未來の進路」の講に於て極めて懇切に物語り、附錄「民藝の趣旨」は健全なる民衆的工藝の方向を指示したものである。

之を要するに本書は美術と工藝との關係並にその將來について極めて明確、平明に論述し、ともすれば看却されがちな工藝の意義の闡明に力め民衆に親しみ易いものとされて居るから所謂、藝術教育の一助として一般に推奬し得ると思ふ。

（昭和一〇、三、一二　東京市目黑區中目黑二ノ五八二　章華社　小菊判一七三頁　二・〇〇）

大田黑元雄著「音樂生活二十年」に就て

二見孝平

大丈夫當に萬卷の書を讀み、萬里の路を往く可しと昔の支那人は言つた。大田黑氏は齡漸く不惑を越えた斗りではあるが、音樂に關聯した氏の述作の一面は實に斯う云ふ氏の經歷の結果である。而して今度上梓せられた標記の圖書は實に三十餘卷に上る氏の述作の側面的鳥瞰圖であると云へる。

此の著作に收められた氏の隨筆は、今日から觀て、我々の仰慕措く能はざる歐洲文化の爛熟期の英京に光彩陸離と顯出した音樂會や歌劇の華粲な追憶から、其の折、又、爾後十數年間各處に見聞した名手巨匠、將又、古今の作曲家に對する印象と感想を初め、其間、氏が勤恪に行脚した歐山米水各所の音樂都市の情景から、歌劇に關した論攻、最近年間東京朝日紙へ發表した東都樂界の演奏批評等を網羅して居る。

歐米斯道の大家の言を俟つ迄も無く、音樂批評程文字に爲る事が難しいものは無い、其の至難の程度は到底他の藝術の批評に比儔を見る事が出來ぬ、近來複雜を極むるに至つた樂曲に就て特にこの感が深い。然し、氏は歐洲大戰前から既にもう其の明快暢達な藻辭を倫敦から雜誌「音樂」へ寄せられて居た。が、夫は、決して、今日の東都の樂壇批評家諸氏の活動のやうな意味のものではなかつた。夫は、單身負笈異鄕に遊んだ明敏な一青襟が、客裏憊々の間、それ迄味得しなかつた泰西音藝術の醍醐味を滿喫した感興が凝つてそこに文字と爲つたのである。であるから、氏の批評に、彼のハインリツヒ・シエンカーがベートーヴエンの第九交響樂に就いて記したやうな論辭を求めるのは蓋し徒勞である。

氏は其の經驗から又群籍の涉獵から教育的理論や樂曲の解剖的解說を類錄しやうとするやうな事はしなかつた（又、今も、しない）のである。作曲家グレトリの愛した Qui nisi sintv eri, ratio quoque falsa fit omnis（感が本當でないと云ふなら、理屈は皆間違なのだ）と云ふ古詩人の一句は、正に大田黑氏の批評のキイノートであると思ふ。

氏の好みは、どちらかと云へば、佛英批評家の淸素な趣味に酷似して居る。是は、我々が氏の著譯書の目錄を一瞥した丈けでも概ね推測出來る事である。（註）

氏の過去二十四年間に殘した業績は、西歐の傳說に擬はれぬ東方の一學徒の獨創的な、穩當の見方を批評として打出した事で、この點が、氏の批評の妥當性の鎖鑰を爲して居る。標記の隨筆集が香氣高い、興趣津々とした著書である事は今更嗾嗾する要を見ない。

唯、我々が氏に恨とする一點は、氏が大正の初から、（當時我國に於て）稀罕の音樂作品を矢繼早に紹介した爲、技巧の伴はぬ樂界が之に激揚せられ、焦燥の結果、一時面白からぬ景觀が樂壇の諸所に展示せられた事である。（然しこう云ふ責任が大田黑氏へ轉嫁すべきものでない事は勿論である。）

今日不文を省みず氏の「音樂生活二十年」を評するに當り、自分は今尙多くの春秋に富む氏が將來更に其の音樂上の生活を內面的に濃化 verdichten せしめ、今後幾十年の生活を昭灼たる勳業と爲されむ事を冀望するものである。

（註）氏の譯された獨人アルツール・シューリッヒのモーツァルト傳も、往年巴里で刊行された、ウィッェワ、サン・フォア合著のモーツァルト傳の好い影響を受けた著作で、獨逸の或る古顚なモーツァルト傳の作者の忌諱に觸れたものである。

（昭和一〇、四、一一　麴町區三番町一　第一書房　四六判三八一頁　一・五〇）

耕筰樂話

山田耕筰著

著者が三十年に近い樂歷の間の感想や、回顧や、時にふれ

ての小論やを拾ひ集めたのがこの書である。

「未完成のインテルメッツイ」といふ本書の約三分の一を占めてゐる卷頭の長篇は、著者の自敍傳の素描であつて、恰も輕快な行進曲を聽くがごとく快適なものであり、著者の面目を躍如たらしめてゐるものである。「音樂の法悅境」以下「シャリーピンの『ドン・キホーテ』までの二十數篇は音樂に關するとき〴〵の感想や小論であつて、或は自己の體驗を語り、或は歐洲の巨匠を語り或は現代西洋音樂を批評するなど極めて自由な放談を試みてゐるのである。著者のごときその道の達人が打寛いで語る言葉には普通一般の評論文には見られない慈味があり、豐富な體驗を自らに感得せしめる趣がある。それら諸篇のうちには「改造日本音樂の提唱」とか「論爭をやめて實行しよう」とか「邦樂の將來」とかその他日本音樂に關する意見を多く見るのであるが、讀者は著者が意外に日本音樂に對して熱意をもち、その將來の建設に努力してゐることを知り、改造日本音樂が西洋音樂形式による日本音樂の創造にあるといふ意見に接するのである。著者の意見は體驗の豐富と潤澤とをもつて人を推服せしめるに足る極めて中正穩健なものゝやうである。

「アメリカの女」以下「ソヴィエト風景」までの四篇は著者の音樂行脚における印象記であつて、著者のコスモポリタン的な風格をおもはせるそれ〴〵興味あるものである。本書は音樂に關する絶好の讀物といへよう。

（昭和一〇、五、一六　神田區小川町二ノ二　清和書店　四六判三八六頁　一・五〇）

演劇巡禮

三宅周太郎著

新聞劇評を天職と心得、又自らを戒むるに「演劇の檢事に非ずして判事の心」を以てし、嘗ては、この天職の故には現世の利慾を離れて斯業に忠實ならんと天下に誓言した（同著「憎まれてのびる劇壇」『昭和四年』より）殉教者的熱情をして、畢竟自分にとつて演劇は「心の聖地」であると述懐せしむるに至つた（同著序文）最近までの著者の近業を纒めた同著は、演劇に對する著者のさういふ敬虔さの故に、殆ど鑑賞の聖書といつてもいゝ香氣と襟を正さしむる端正さに滿ちてゐる。演劇の美神は妖しき魅力を放つ。放恣なる淘醉の徒は多いが、著者の如き端嚴なる奉仕者は殆ど絶無だ。而もこの巡禮記錄は行文流麗、どの頁を開いても肩も凝らず爽かに興趣深く讀ませる。同書は第一俳優評論及び芝居の見方、第二歌舞伎劇評話、第三演劇隨筆、第四新聞劇評拔萃、第五亡き人を思ふの五部より成つて居るが、著者の最も得意とし研究を積んで居る歌舞伎俳優の藝風や型について語る際最も精彩を放つやうに思はれるが、他の人に語らせたならば衒學的とさへ感じさせようその點についての饒舌もひたむきな態度の故に救はれてゐるが、現代の一般の演劇愛好者には寧ろ煩冗に過ぎる憾がありはしまいか。著者は卷初に芝居の見方を敎へ、同書もガイドブックたらしめん事を期してゐるが、藝風又は型に關して懷舊的比較研究の多い特徴から云へば、初心の鑑賞家の手引としてよりも、寧ろ今は亡き幾多の故名優の俤を偲び得る年輩の人又は玄人に近い人々にこそ迎へられはしないだらうか。卽ち技巧の末梢的批評に精緻にして、演劇そのものの總括的批評、指嚮等に比較的力弱き輕い不滿はあるとしても、動もすれば卑陋なる世界に孤昂として仰がるゝ蓮であり、尊敬すべき業績たるを失はぬ。

（昭和一〇、五、二五　麹町區丸ノ内ビルディング　中央公論社　四六判五九〇頁　二・〇〇）

能と歌舞伎

小宮豐隆著

「この四五年の間に、能と歌舞伎とに關して私の書いたものを、ひと纒めにしたのが、この書である。」といふ。題目は「世阿彌の藝術」「能樂の本質」「歌舞伎」「十字架の頸飾」「元祿歌舞伎の藝術的水準」「歌舞伎樣式の確立」となつてゐるが、藝術としての能および歌舞伎に關する基本的な問題について、著者得意の探究洞察を下したものである。本書の骨子は能の本質を探ね、その繼承者としての歌舞伎の本質を明かにすることによつて成立つてゐる。「能樂の本質」はその成立を探ねることによつてその本質を明かにするといふ方法をとつてゐるが、その先行藝術としては田樂、猿樂を主として取り出すのであつて、時代も觀阿彌、世阿彌の發生、成立の時代に限られ、それ以前に遡つてゐない。本書が「世阿彌の藝術」觀に始まつてゐるやうに、世阿彌の諸書は能の本質を究明するに最も重要な資料となつてゐるのである。著者の見る象徴的要素と寫實的要素との融合としての能の本質をばつぎに紹介した野上豐一郎氏の「能の再生」に見る「能の寫實主義的精神」の强調と對比して見ることも興味あることであらう。「歌舞伎」も能と同樣成立を見ることにおいて本質を探つてゐる。それが「踊」と「歌」とを基礎とする事において全く能の後繼者たるものであるとする著者の見方は極めて興味あるものにおもはれる。「元祿歌舞伎の藝術的水準」は役者評判記其他により元祿期名優のことばを便りに、とき

〳〵は世阿彌のことばと對照する事などによつて探究してゐるものである。本書諸題目の中「十字架の頸飾」は特種なものであらう。お國かぶきの繪に見られる十字架の頸飾の由來について諸說を檢討し、著者の見解を示したものである。

著者の考證は必ずしも該博とはいへないが、用意は周到であり、推理の緻密、洞察の鋭さも見え、讀者に一種爽かな快感を與へるものがある。本書の中には、その道の專門家の間には相當異論のある著者獨特の所說見解もあるのであらうが、一面すぐれた創意もあり、幾多重要な示唆もあるであらう。わが國特有の文化的所產たる能と歌舞伎の研究の分野に貴重な一文獻を加へるものであらう。

「附錄」三篇はラヂオ放送と演劇時評の文であり、日本演劇の將來に暗示を與へるおもしろいものである。

（昭和一〇、一、二〇　神田區一ッ橋　岩波書店　菊判三三一頁　二・五〇）

能の再生

野上豐一郎著

能の現代化でもなく、能の單なる保存でもなく、能をあくまでも生き生きとしたものとして將來にまで殘すといふ問題を取扱つたものといへよう。著者の考へでは能を再生せしめるには創始當時の旺盛な寫實的精神に歸するのほかないとするのであつて、著者の研究もその發生當初の能の表現樣式並にその根本精神を明かにすることに主力を注がれるものゝやうである。

「能の寫實主義と樣式化」「扮裝の樣式化と自由精神」「能の幽靈」「能と敬老思想」「能と日本主義思想」などは、我々一般人が讀んでも面白く、能の日本精神を理解せしめるに有益なものゝやうである。その他は「合唱歌の非戲曲的性質」「能の局面區分法」「能と狂言の接合」『謠曲「車屋本」考』等々專門的な論文が多い。

本書は全く專門研究的著作であり、我々一般人は能の日本文化における意義とか地位とかいふやうな問題に觸れた「能と敬老思想」「能と日本主義思想」といふやうな論文を餘計に要求するのであるが、そのためにも本書は貴重な一編となるものであらう。

（昭和一〇、一、二〇　神田區一ッ橋二ノ三　岩波書店　菊判三三八頁　二・八〇）

映畫讀本

來島雪夫著

都會といはず田舍といはず映畫は今や全盛の域に達してゐるにも拘らず、日本では今迄映畫全般に就いて概論風に書かれたものが尠なかつた。本書は此缺を補ふて、映畫全般について知りたいと思ふ者に基礎的並びに一般的知識を供給するものである。

抑々映畫はその誕生から企業家の手によつて藝術としてよりも商品として育てられ、多數者の手を借りなければ出來上らないものであるだけに、その全般にわたつて行屆いた解說を與へることは至難の業である。本書の著者は「映畫評論」同人中でも篤學の士で、現に東京科學博物館教育部に勤務されてゐる人で、此の方面の理論に明るく、加ふるに本書は半歲に亘つて非常な努力を傾けられたものであるから、讀者は安心して讀むことが出來る。

本書は先づ「映畫の誕生」として映畫成立の由來より筆を起し、英米獨佛日蘇の「映畫事業」の狀況を概觀し、映畫技術としてその「製作の方法」「製作費」の問題を詳述、「映畫化とプロデューサー」では歐米のプロデューサーを引合ひに出して日本のプロデューサー論に及んで居り、「映畫化と各專門技術家」ではシナリオ、撮影臺本作法、シナリオライター、監督術と映畫監督、キャメラとキャメラマン等に亘りその技術上の指導原理と實際運用を明らかにし、音響、照明、セットについても詳說してゐる。次に「映畫の配給と興行」として映畫興行界の表裏を興味深く述べてゐる。

「映畫のジャンル」として映畫種別に關して、ウィル・ヘイスの說を引用して詳說するところあつてから、當時流行の音樂映畫論に及んでゐる。「映畫藝術論」としては映畫の本質性能に觸れた理論の展開として、一、機械主義の理論、二、文學主義の理論、三、心理主義の理論、四、文化主義の理論について簡單に紹介されてゐる。

要するに本書を讀む者は、映畫事業、映畫技術、映畫藝術の三部に亘つて、その基礎知識の概略が得られる譯で、著者の云ふ如き「映畫研究手引草」として上乘のものである。映畫に關する全般的知識を得たいと望む者の渴を慰すに足る良書として、敢て推薦する所以である。

（昭和一〇、八、一〇　淀橋區下落合三ノ一九〇九　書林夠天洞　四六判二六五頁　一・八〇）

ラヂオ演劇
―鑑賞と作方―

佐々健治著

ラヂオ演劇とはラヂオ・ドラマ、ラヂオ風景、舞臺劇、脚本朗讀、映畫劇の五種を含めたもので、本書はその各々に亘つて初歩の解説から鑑賞の方法、脚本の作り方、放送の略史等を述べたものである。

初めに放送室、マイクロフオン等の放送の機械的方面の説明があるが、誰でも知つてをきたいことである。次に豐富に寫眞を挿入して擬音の解説がある。外でも紹介されたこともあるがこれ程に詳細なのは初めてで本書中で最も興味を惹くのはこの部分ではないか。次に文化施設としてのラヂオの機能に觸れてゐるが、ラヂオが、教育、教養、報道、娯樂の各方面に大童の活動を續けてゐて色々批評の餘地はあらうが、兎に角吾人の生活から引離して考へられないものであることは誰も首肯するであらう。終りに本書の主眼たる聽覺のみを通して働きかけてゐるラヂオ演劇の本質を説き、その獨自性、普通の演劇との差異をあげ、參考として既に上演されたものの各種類に亘つて解説をなし、以上を綜合して、その鑑賞と作方との參考に資せようとしてゐる。著者はAK局員であり、既に長年に亘つてこの方面の研究者である。ラヂオ演劇に興味を持つ讀者の一讀すべき良書である。

（昭和九、一二、一五　神田區神保町一ノ一　同文館　四六判二九〇頁　一・五〇）

第七文學・隨筆

言葉と文

玉井幸助著

本書は十一回にわたるラヂオ實用語講座の放送を印刷にしたものである。主として國語と文字との發達變遷について大要の説明を與へたものである。「文章の變遷」が三回にわたり、文字については、「假名と漢字」「漢字の生ひたち」「漢字の形」「漢字の音」「漢字の訓」の五回にわたつてゐる。漢字の説明は主に後藤朝太郎氏著「文字の研究」によつてゐるやうである。

本書中最も興味あるところは「文章の變遷」を説く箇所である。これを「文字以前の狀態」「文字傳來から奈良朝まで」「假名文發生以後明治時代まで」の三回にわけて述べ、文字なき時代の文章を口語文の大本とし、奈良朝時代の文章を漢字假名交りの文の基礎とするなど、注目すべき見解を示してゐる。終始國語愛を高唱し、國語及び文學について一般的知識を與へるに努めてゐるから、頗る便宜有益な著述であるとおもふ。附錄として「臨時國語調査會決定常用漢字表」「大阪毎日新聞社常用漢字表」「國語調査會編送假名法」その他を表示してゐる。

（昭和一〇、五、一〇　澁谷區千駄谷四ノ七二〇　育英書院　菊判二四八頁　二・〇〇）

文章心理學

波多野完治著

表現心理學の一研究として新しい心理學原理に立脚して文章表現の研究を試みたものが本書である。現代に於て文章研究が盛んになつて來たのは言語的叙述の新しい領域を開くことが新時代の要求であるからで、この時代的推移をみつゝ心理學的にこの新らしい言語構成、文章構造を解析研究しようとしたのである。

はじめに文章心理學とは何かといふその心理學原理問題を取扱ひ、「緊張體系の表現としてのスタイル」として言語傳達の社會學的方面を述べ、全體場面の緊張體系として心理學的方面に觸れる。次に言語的表現手段の分類を試みて、言語の特徴を通して文章表現の心理的意義を考察し、その表現手段の偏倚によつてその文章の筆者の性格を見ることが出來るとして、谷崎潤一郎、志賀直哉兩作家の文章を比較檢討してゐる。

更にウィルヘルム・シュナイダーの文章論を評價しつゝ「文章の樣式學」としての多くの作家の文章の實例によつて文體の種々相を考察し、今日の新らしい文章が歴史的現在型によつてゐることを洞察して、舊修辭學の解體したる所以を明らかにしてゐる。

現代の文章は純個人的な心理現象を社會的に説明しようとするために、多くの困難をはらんで來るのであるが、この困難を克服するために作家はいろいろの表現手段に走るやうになつた。その苦心に成る文章表現を見詰めてそれが昔の文章と如何に相違するか、その批判を押し進め科學的に新らしい文章學を立て、今日の文章道に多くの教示を與へてゐる。本

書の貢獻も亦かかる點にあるといはなければならない。

（昭和一〇、一〇、二〇　神田神保町一ノ一　三省堂　菊版　三六九頁　三・〇〇）

放送　江戸文學講話

尾崎久彌　著

高雅な國民的情操を陶冶し、傳統的國民精神の涵養に資することが正統的國文學研究の一目的であるとするならば江戸の軟文學の如きはこれを同日に談ずることは愼しむべきものであるかも知れぬ。然しながら同じく國民の間に發生し、然も久しく文化の圏外におかれた庶民階級にとつては江戸の軟文學は彼等の生活を豐富にするものとして多大なる渇望を以てむかへられたことは何人も否定し得ないであらう。

これ等の軟文學はよし講壇上の研究題目として取り上げられることは正統的國文學に比して遙かに其の下にあるとはいへ、或は市井走卒の會話に、或はラヂオ、演劇、映畫、讀物に巧に取り入れられて今も尙國民精神の一部を支配しつゝあることを思へば、その發生、發達、變遷、を知ることは徒勞ではあるまい。

本書はこの方面の研究の一權威たる著者が十有餘年の間に放送された講演を系統だてたものである。冒頭に於て江戸時代の小說の變遷を概況し、次いで洒落本、讀本、滑稽本に及んでゐる。又興味ある題目を選んでこれが江戸の各種文學及び演劇に如何に取扱はれたかを語つた部分も尠くはない。

小說以外のものとして淨瑠璃、小唄、小咄、地口、尻取、謎民謠、都々逸等の發生發達にも及んでゐる。國民生活と完全に結合して居る庶民文學の全般を知らんとするものにとつては本書は極めて懇切な伴侶となるであらう。但し卷頭に附された各期小說の表紙、本文の圖版はあまりに小にすぎ惜むくらは明瞭を缺いて居る。

（昭和一〇、四、五　神田區神保町三ノ六　三笠書房　四六判四九二頁　二・二〇）

純正詩論

萩原朔太郎　著

本書は詩人萩原朔太郎氏の最近の詩論集である。世に體當りの詩論といふことをいふものがあるが、氏の詩論はまさにそれで、眞正面から勢はげしく讀者の胸にぶつつかつて來る詩論である。それほどに氏の詩論は單純であり、卒直かつ熱烈である。烈々火を燃すやうな、まさに詩の熱愛者のことばである。その火はあくまでも浪漫主義の炎であつて眞赤な鐵丸のやうな現實主義の熱火ではない。否むしろ氏は現實主義に對して骨髓からの憎惡を抱いてゐるものゝやうに見える。氏にとつては現實主義の精神は詩と全く相容れないものゝやうに見える。氏の詩的精神は西洋のキリスト敎的精神であり、それは純粹に浪漫的な精神である。氏は東洋精神を極度に憎惡するやうに見える　否、東洋精神の日本近代文學流に低調な現實主義化を憎惡するのである。まさしくこれは近代日本文學の致命的危所の一つをつくものであらう。しかしながらこれは近代日本の根本精神を刺しつらぬくものではあるまい。氏のいふやうに詩的精神なるものは根本的に日本の風土と合はないといふものであらうか。そも〳〵そのやうな詩的精神を民族としての日本人がもち得るであらうか。また近代日本人が西洋的精神の影響を身にしみて持たぬのであらうか。且また詩的精神なるものは果して西洋的浪漫精神に限るであらうか。問題は幾多の頭腦によつて投げられるであらうが、そのすべてを振拂つて本書には消し難い眞實性があり、讀者の胸を打つて來るものがあるのである。氏は日本を熱愛してゐるのである。愛するが故に憎むといふ俗流化したことばが、切實な意味においてまさしく氏の詩愛をいひあてるものなのであらう。

本書における主要な論文をあげてみれば、「西洋の詩と東洋の詩」「饒舌の詩と沈默の詩」「詩とは何ぞや」「純正詩への指南」「僕の詩論の方式と原理について」「詩と不安の文學」「イデアなき日本の文壇」「詩の未來」等々である。

詩及び文學を愛する人々並に近代日本の進みゆく道に就て思ひをよせる人々に一讀を望む。

（昭和一〇、四、七　麴町區三番町　第一書房　四六判二〇七頁　一・二〇）

新講和歌史

齋藤清衞　著

本書は「日本文學の核心をなす和歌文學の流れてきた歷史を知らんとするものの小さい手びきの書であり、啓蒙の書である。」本書を發表するに當つて著者としての「多少の自負」は、「前後一千年に亘る歌調そのものの變遷の大綱を多少ながらもこの一小著の中に、組織立てて、摘出して見たといふ一事である。」と。

本書の組立ては序說・上世時代（萬葉調中心時代）・中古時代（古今調中心時代）・中世時代（新古今調中心時代）・近古時代（歌壇低迷時代）・近世時代（各歌調並立時代）・現代と

いふやうになつてゐる。序説において和歌の語義より和歌形式の成立分化の次第を説き、こゝには著しく著者の創見が閃いてゐるのである。それが簡約であるだけ餘計に初學者には難解とおもはれる。時代別は一般文化史にも相應してゐるわけであるが、近古時代を歌壇低迷時代とし、近世時代を各歌調並立時代とせることは一段と時代歌調を明確にした時代區劃といつてよい。各時代の冒頭で「時世相と歌壇」の一項を設けて時代の上に歌調を浮び立たせてゐることは本書の一特色であるが、これは今日の文化史觀にも相通ずるものであり、重大な特色である。「叙述上の量に制限が與へられてゐる限り、細末の文獻的解題や、人物の傳記に筆を費さしめる餘裕の無かつたことを憾みとする。」といつてゐるが、歌風の講説においては簡略にすぎて必ずしも入門の初學者には適切となつてゐない。しかしながら叙説簡潔明確であつて、和歌史について多少の觀念を有するものには頗る好適な著者であり、特色鮮かな良書であることには疑ひがない。たゞ「新講文藝史叢書」の一卷として特に豫定上明治以降を切斷してあることは、讀者にとつても最も憾とするところである。

（昭和一〇、一〇、一五　渋谷區千駄谷四丁目　育英書院　四六判三五〇頁　一・八〇）

萬葉讀本

佐佐木信綱著

昭和七年十一月に著者は「萬葉集概説」と題する一書を著はし、既に本協會並に文部省の推薦するところとなつてゐる。今回の「萬葉讀本」はこの前著に比して内容に於て殆ど同一であるが、體裁に於て稍々異り、今回の「萬葉讀本」は書名の通り菊判十二ポ組といふ如何にも讀本風のものである。記述は前著も可也平易なものであつたが今回のも前著と同じ樣に、或は前著以上に平易なもので、この點著者が萬葉學の當代最大權威たるのと相まつて、萬葉入門書として缺くる所がない。今回の「萬葉讀本」には挿繪が加へられてあることは、前者に比しての特徴と云へよう。が、前著に於て附錄としての卷末に附せられた「萬葉集作者部類」（作家の五十音順に從ひ歌數と國歌大觀、白文萬葉集、教訓萬葉集に於ける歌の所在番號を示したもの）が本書には除かれてあるのは稍々惜しい氣がする。目次の設け方など前著と略々同一であるが念の爲重ねて左に記して筆を擱くこととする。

一、序論　二、解題　三、叙情詩人柿本人麿　四、叙情詩人山部赤人及び高市黒人　五、社會詩人山上憶良　六、叙景詩人高橋虫麿　七、大伴家の人々　八、女流歌人の一群　九、天平文化の反映　一〇、萬葉人の精神生活　一一、萬葉人の衣食住　一二、萬葉人の旅行と海外交通　一三、山岳の歌　一四、海洋の歌　一五、都會人の歌と地方人の歌　一六、萬葉人の滑稽諧謔　一七、傳説の歌　一八、萬葉集にあらはれた動植物　一九、各卷の性質　二〇、萬葉集の傳來と古鈔本　二一、萬葉學史概説　二二、後世に與へた影響

（昭和一〇、一一、三　京橋區京橋三ノ四　日本評論社　菊判二八一頁　一・五〇）

高濱虚子著　俳句讀本

山口青邨

近頃、何々讀本と銘うつた本が澤山出る。之は本屋の賣らんかなの商業政策の一つであることは疑もないことであるが、然しそれがインチキでない限り、かうした便利な本が世に出るといふことは結構なことである。

一體讀本といふ以上、讀本としての要素を備へてゐなければならない。簡潔であること、解り易いこと、偏らないこと、正鵠であること、滋味があること――と言つたやうな要素がなければならない。それだけにその編纂はむづかしい。たゞ賣らんかなの無責任なものではいけないのである。何も豫備知識のない人が讀むのであるから嘘を書けば讀者は嘘を覺える。偏つた趣味を強調すれば讀者は偏つた趣味に墮してしまふ。そこで結局は書く人の經歴なり、人格なりが大切だといふことになるのである。我が俳句讀本はさういふ點で最も適當な著者を得たといふことが出來る。高濱虚子は私の恩師である。然し先生であるが爲にかういふ言辭を爲さうとするのではない。衆目の視るところ、虚子の俳句の話ならば安心して傾聽するであらう。

そして著者その人を得れば已に目的の半ばは達せられたと言つてもよい。

虚子先生は明治に於ける俳句の大革新を遂げた子規の遺鉢を繼ぎ、更に之を躍進せしめたのであつて、その俳句學――敢て學といふ――は最も正統である、最も深い。この書に於て先生四十年間の不斷の蘊蓄が、最も小さく凝縮され、レフアインされ、整理されて披瀝された。

この一卷は「俳句論」「花鳥諷詠詩」「俳句史」「俳句作法」「俳句解釋」の五章から成立つてゐる。今、俳句論の内容を見るに「俳句は文學である」「俳句は詩である」「俳句は抒情詩である」「俳句は叙景詩である」「俳句は花鳥諷詠詩であ

る」と言つたやうな序論から說き起して、俳句といふものの詩としての正しい形態を明かにしてゐる。この「俳句論」は次の章の「花島諷詠詩」と共に此の本に於ける最も本質的な大切な部分であつて、俳句の正道を平明に而も凛然と說いたものである。

俳句は傳統の文學であるが、而も常に淸新でなければならない。俳句には約束がある、道がある。然るに、往々にしてその約束を無視し、邪道に陷るものが、いつの時代に於ても存在する。十七字の詩であり、季題を諷詠する詩であることはどこまでも原則として認めなければならない、それが俳句といふ詩の形態なのである。今日の如く文藝は行きつまつて、自棄的にさへなり、漸くデカタンにならうとしてゐる時、之は俳句に於ける正しい道を說くものである。

「俳句史」に於ては俳句の起源から說き起して、芭蕉以前、芭蕉時代、支麥時代、蕪村時代、一茶時代、梅室蒼虬時代、子規時代、明治大正時代、昭和時代と一通りの記述がある。歷史といふものは整理されずにごた〳〵と書かれたのでは何の益にも立たない、それをかくの如く要約して、而も作例を一々擧げて解說し批評して、時代の傾向をはつきりと出したことは敬服の外はない。

「俳句作法」の章に於ては題詠、句會、吟行、寫生と言つたやうな切實な方法を述べてゐる、之れまた初學者には重要な指針となるであらう。

最後に「俳句解釋」がある。芭蕉以下現代作家に至るまでの句を一通り解釋してゐる。いかにも簡にして、要を得て居り、又淡々として味がある。一體句を正しく解釋するといふことは中々容易ならんことであるが、それが平素の研究と訓練と相俟つて、こゝに易々と成し遂げられてゐるのを見る。

かくして俳句の鑑賞法と作法の理論と實際は餘蘊なく說述されてゐる。俳句といふものに多年粉骨碎身してゐると自任してゐる吾等と雖も、之によつて啓發される處が頗る多い、その點決して初步の人のみの階梯讀本ではない、專門家も亦熟讀翫味して正しき俳句の爲めに反省すべきである。私はこれこそ世に薦める良書であると信ずる。

（昭和一〇、一〇、三〇　京橋區京橋三ノ四　日本評論社　菊判三三二頁　一・五〇）

隨筆瀧澤馬琴

眞山青果著

瀧澤馬琴が江戸時代の特色ある作家として日本文學史上にその數頁を飾るものであるといふ點については何人も異存はあるまい。

然し馬琴の人物については兎角の批評がある。五十嵐博士の如きは「思ふに馬琴は子として愛らしからず父として尊からず、夫として親しまれず……いかに偉くとも、馬琴のやうな人物を、親にも、子にも、兄にも、弟にも、主人にも、家來にも持ちたくないと思ふ。云々」と酷評されて居り、著者の如きも「全圓的に瀧澤解といふ人物を、わたしの心のうちに描き出し、組立てゝ見るのが何か不快な厭はしいものに對面しなければならぬやうな氣がして妙に躊躇されて居たのである」と告白してゐる程、親しみの持てない人物である。

かうした感想を懷いてゐた著者が次第に馬琴の全貌を探り、特にその獨考論や兎園小說の眞葛の姬を讀んで行く中に「馬琴といふ一箇不幸なる老翁」として映ずる樣になつたことを彼の日誌や書簡を縱橫に驅使して諄々と說いて居る。かくて馬琴攻擊者の好題目として選ばれる「蜀山と馬琴との關係」、「京傳馬琴の對立及びその關係」「山崎美成と馬琴との關係」女性觀等あらゆる方面に於て從來の論者とはかなりに異つた見解を披瀝して馬琴のために辯じてゐる。

固より著者は馬琴を以て圓滿なる人格者なりと强辯するのではなくて「小心にして臆病」「偏狹にして窮屈」な性格に多大の同情をささげ馬琴の定論に對して見直しを要求して居るものゝ樣である。

說の當否はしばらく別としてこの特異なる老作家馬琴の生活乃至性格をうかゞふことは消極的ではあるが人の子の暗い半面を觀察する恰好の資料のやうに思はれる。

著者青果氏は考證的戲曲作家として已に定評ある人、馬琴の研究に於ても已に十餘年の日子を費して居り、その筆致は巧緻を極めさながら一篇の戲曲を讀むの慨がある。敢えて江湖に推す所以である。

尙本書の內容は大正十三年十四年の中央公論に連載したものを再錄したものである。

（昭和一〇、一一、二九　神田區一ッ橋二丁目九　サイレン社　新四六判二八八頁　二・五〇）

漱石襍記

小宮豐隆著

漱石を語り、漱石を傳へることにおいて、小宮氏が最上の適任者であることは、萬人の認めるところであらう。著者は本書について「當初希望してゐた通りに、先生に就いて纏まつたものを書きもしないで、こんな切れ切れのものを一纏めにして公けにするといふ事は、當初の希望の手前、甚だきま

りの惡い事である。」と「序」でいつてゐるが、纏つた漱石論でないとはいへ本書は流石に著者ならではなし得ない特色をもつてゐる。

本書の前半は漱石の著作についての解說であり、後半は漱石についての雜編である。著作解說の中「吾輩は猫である」「こゝろ」「明暗」の三解說は主要なものであり、殊に「明暗」の構成について研究した一篇はおそらく何人も企及し得ない貴重な文章であらう。著作の解說においても、日本文學史上前後に絕するともいふべき獨得の漱石一門の雰圍氣に養はれた人間理解に密接した細かさ・濃かさ・溫かさを保ち、漱石その人を感ぜしめるまでの綿密さは、文學理解以上とおもはしめるほどであり、他の何人にも期待し得ないものであらう。從つて後半において屢々語られる「漱石先生」が最後の「日記の中から」に現はれてゐるやうな類稀な師弟の情愛につゝまれてゐる「漱石先生」であることは勿論である。

（昭和一〇、五、一〇　小石川區諏訪町五九小山書店　四六判三一六頁　二・〇〇）

母の死

中勘助著

中勘助氏は岩波書店の月刊「思想」以外には作品を發表してをらず、文壇とも深い交渉がないので、一般にはあまり知られてゐないが、一部の讀書子の間には良心に富んだ作家として認められてゐる。氏の取扱つてゐる世界は自然のもつ和やかな美しさ、童心のほゝましい動き、人間のもついちばん純粹な氣持の貴さで、これらのものへ捧げられた、やや陶醉的な讃歌である。氏の文章はその題材に相應しく練りあげられた纖細な氣品に富んだもので、無雜作に書き流された文章が受け入れられてゐる時代には寡いものである。作品の性質上、その視野の狹さがよく指適され、事實、自己陶醉の笑止さがつきまとふのであるが、かういふ特異な作家はかゝる分析的な批評の彼岸に坐るもので、一輪の花のやうにしづかにもり育てらるべき存在である。その童心の世界を見事に追體驗した處女作「銀の匙」は夏目漱石の推賞措かなかつたもので、それ以後、作品集も數冊に上つてゐる。本書はその近業「母の死」外數篇と既刊中からの拔萃數篇を組合せたもので氏の全貌を窺ひ知るに甚だ便利である。氏の作品は中等教科書によく編入され、又茗溪會でも數次、中等學生向の良書として擧げてゐる。これは氏にとり思ひがけぬ當惑でもあらうし、いま少しく人間のこまやかな心の動きに關心を持ち得る讀書人の理解にまでこゝに紹介する次第である。

（昭和一〇、四、五　神田區一橋通　岩波書店　四六判三四九頁　一・八〇）

續爐邊夜話

乾信一郎譯

昭和八年三月同じ譯者による「爐邊夜話」が春秋社から出版され、本協會によつて同年七月推薦された。本年三月同社の文庫版として「爐邊夜話」「續爐邊夜話」二編が同時に出版された。こゝにあげたのはその「續爐邊夜話」である。前編に收められたものと同樣續編中のものも、東京朝日新聞に連載され愛讀された諸篇であつて、ひとしく動物の自然生活に關する物語である。本編には十七の物語が收められてゐる。作者名はいろ〳〵であるが、チャールス・ロバーツのものが多い。そしてそのロバーツのものが特に巧みで、おもしろいやうである。

これらの物語は勿論仔細な自然觀察にもとづいてゐるところもあるではあらうが、作者の自由奔放な想像によつて作りあげられたものであらう中にはあまり人間化されたと見えるものもあるが、實に美しい迫眞性をもつまでに出來上つた作品もある。例へば獺と山猫との爭ひを題材とした「淵」などは、自然の靜寂をしいんするまでに傳へてゐるものである。その他構成の妙あるもの、自然と人間とのひそやかな交渉を描いて見せるもの、やさしい、ほゝえましい自然描寫といへるもの、その他一つ〳〵そのよさを語らなければならない樣な興味ある諸短篇であつて、文字通り卷を措く能はざらしめる面白い物語集である。讀者は下手な小說集などよりもすつと〳〵ひきつけられて讀みをへてしまはないわけには行かない。そして或は小說を讀むにも增して自然をおもひ、人間の生活をおもふ心を引き起されないとも限らないのである。

（昭和一〇、三、一五　日本橋區吳服橋二ノ五　松柏館書店　三六判二六九頁　一・〇〇）

英文學の感覺

土居光知著

「ここに選んだものは、私の英文學研究に於ける道草であり、主として思想になる以前のもの、卽ち英國文學者の感覺、趣味等に

關してゐる。英國人の感覺が我々のそれといかに異なるか、彼等がどういうやうに物を見、かつ感じるか、それに關する考察を缺いて、英文學の象徴主義や詩論を談じても仕方がないと思ふことが、私をして時々かゝる讀草を摘ませたのであつた」

本書の內容は大體、「著者が「はしがき」の中に述べてゐる如くであるが、その英文學に對する深い造詣から自然に生まれ出たもので、「シエイクスピアと花」以下十一篇、どれを讀んでも、深い學識が隅々まで行き渡つてをり、ゆつたりとした落付が讀者を魅きつける。英文學に關心を持つ讀者のみに限らず一般にお勸めしたい。

卷頭の「シエイクスピアと花」はその作品に現はれてゐる花を通して彼の花に對する嗜好をあげこれによつて彼の生ひ立ちや美意識の一側面に觸れようとしたもので、菫、薔薇、白百合などが擧げられてゐる。「ブレイクの象徴」は本書中の壓卷である。彼がその諸詩集を通じて、いかに生命に對する深い理解と愛を高揚し、生命を毒する戒律と知識を憎んだかを論じたもので、數多の譯詩と挿繪を挿入して力强い一篇である。「ブラウニングの藝術に關する詩」は彼の美術と音樂を主題とした詩を紹介したもので、從來知られてゐる彼の宗教的人生觀及び戀愛觀以外の彼の一面を傳へたものである。「ヂョイスのユリシイズ」はヂョイスの特異なる表現形式を論じたもので、まづその「若き藝術家の肖像」の表現態度を檢討し「ユリシイズ」に及び、この難解なる現代文學の迷宮が、彼の醫學、映畫、藝術に關する教養の渾然たる融合であつて、整然たる精密さを漲らしてゐることを指摘してゐる。

（昭和一〇、九、五　神田區一ッ橋　岩波書店　四六判四四三頁　二・五〇）

ゲーテ論攷

木村謹治著

ゲーテに關するわが國の文獻は數多いが木村謹治氏の學位論文「若きゲーテ」と本書とは、その中の最も優れたものに屬するであらう。本書は「若きゲーテ」の副產物とも云ふべきもので、ゲーテの內面的生活の成長と發展を跡づけその思想を色々の角度から究めたものである。著者の澄んだ頭腦はすべての夾雜物を排除して直ちにゲーテの心髓をしつかりと掌中に收めてゐる。しかも之を整理された描寫を以て表現したもので「論攷」と云ふ稍々近づき難い書名にも拘らず、極めて親しみ易い內容である。浩翰なゲーテの作品はその一冊を讀過するさへ容易でない。況やその思想を理解するのはなか〳〵に困難な業である。こゝにゲーテ研究の第一人者たる著者が本書によつてこの偉大なる作家の把握すべからざる思想の一々を取りあげて示すのである。ゲーテに關心を有する讀書子にとつてかゝる喜びは得難いものである。本書に對して深い感謝を捧げると同時に、かゝる大なる研究に獻身して來られたる著者の眞摯なる學究的良心と努力に無限の敬意を表せざるを得ない。

內容は「若きゲーテ素描」外十三篇で記念講演又は新聞雜誌に發表されたもので、個々に獨立してゐるが、同時に相俟つてゲーテ思想史を形づくるものである。

（昭和一〇、五、二五　麴町區飯田町一ノ一四　伊藤書林　菊判四四九頁　三・〇〇）

信賴に値する「トルストイ傳」

中村白葉

概して、讀書人には、外のどんな書物よりも傳記類に興味のある一時期がある。尤も、偉人の傳記は、それでなくてもいろんな意味で興味深く、教へられることの多いものであるが、就中トルストイの傳記の如きは、その生涯が生涯だけに考へやうに依つては相當の小說などよりも面白いと言へる。

それかあらぬか、トルストイの傳記は、わが國でも可なり古くから、多くの著者に依つて書かれてゐる。今ちよつと思ひ出して見たゞけでも、十指を屈するに足るものがある。原久一郎君の「トルストイ傳」は、その最も新らしいものゝ一つである。原君は、周知の如く、わが國に於ける露西亞文學研究のエキスパートである。殊にトルストイに對しては、あの浩瀚なビリュコーフのトルストイ傳を譯したりして、その造詣はかり知るべからざるものがある。それに一般的文學的素養も深く、文章のうまい人だから、先づトルストイ傳の著者として申し分ないと言へよう。

所で、今度の新著だが、實は僕はまだその全部を讀了してゐない、所々を拾ひ讀みしたに過ぎないので、そだけの印象で、同君のこれだけの功業に對して批評がましい口を利くことは甚だ憚かられるのであるが、今は暫くそれを許して貰ふとして、僕の思ふがまゝを語らして貰ふならば、この傳記の持つ第一の强味は、何と言つてもその資料の正確さ豐富さと、それを按配する著者の眞摯な態度とである。本書を編むに當つて、先づトルストイの傳記者中最大の一人であるビリュコーフの「略傳」をとつて粉本とされたと言ふことだが、これは最も當を得た、賢明な策と言つていゝだらう。

世の中は妙なもので、トルストイなどの如く餘りに有名な

存在になると、其有名さに眩惑されて、人は何となく自分もその人をよく知つてゐるやうな氣になり、折角いゝ傳記書が出ても、うつかり讀まないで過ごしてしまふやうなことが多いものである。所が、トルストイの生涯などは、委しく知れば知る程魂の肥料になるものである。この意味で、僕は、本書の少しでも廣く讀まれることを願ふ者の一人である。玆に述べたやうな理由で、常識的にトルストイを知る爲めに、本書は最も手頃である。本書を一讀することに依つて、讀者は偉人トルストイに就いての先づ誤りない知識を得ることが出來よう。類書中大いに推奬するに足るものゝ一つであることは論を俟たない。

たゞ、僕等その道に携はつてゐるものとして思ふのは、これまでにわが國にトルストイ傳も數々出たが、その何れもが多く外國の著書の飜譯（と言つても字義通りの逐語譯ではないが）であつて、日本人としての研究批判のあとに乏しい憾みがある。もうそろそろ、日本人と言ふ獨自の立ち場から見た、トルストイ傳などが出來てもよくはなからうかと思ふ。原君のこの著に對して、それを望むのは些か見當違ひであらうが、本書を手に取るに及んで、僕はもう以前から感じてゐる。この望蜀の感を、またしても新たにした次第である。尤も、これは、原君の本著に對する非難の意味で言つてゐるのでないことは勿論である。特にお斷りしておく。

（昭和一〇、一一、七　神田區神保町三ノ六　三笠書房　四六判四三〇頁　一・五〇）

母と子

フィリップ作
山内義雄譯

ルイ・フィリップの作品は殆んどその全部が飜譯されて、わが國に紹介されてゐる。この小說も既に井上勇氏の譯があり、山内義雄氏の本書も又改訂版である。新奇を追ふことに忙しいわが國の讀書界では最近、フィリップは餘り顧みられてゐないが、數年前にはフィリップ全集三冊が出版された位である。そして一度でも一編でもその作品を讀んだ者は必ず優しくて、一脈のユウモアを漂はせたその作風を心の底に刻みつけて忘れることが出來ないであらう。フィリップは純粹にフランス風の作家である。深刻とか情熱とかいふものでなしにしみ〴〵とした觀照の世界に穩かに入り込んでゐる。少しも技巧の跡をみせない手堅い手法を以て人生の核心をしつかりと握りしめてゐて、惻々として人の心を打たずにはをかない。彼は中部フランの小都會に木靴師の子として生れ、二十二歳、巴里に出て市役所の下級吏員となつた。三十四歳で歿するまで、晝は薄給を貰つて役所に勤めたが、夜こそは渾心を傾けて創作に熱中した時間である。彼の世界は彼が生れ、育ち、生活したその周圍であつた。貧しい階級の人々は彼のペンによつて少しも姿を歪めず、そつくりそのまゝ描き出された。その孰れもが讀者の微笑を誘はないではをかない。本書は彼の自叙傳ともいふべきもので、彼が一日も忘れなかつた故郷と彼が愛情の限りを注いだ優しい母親を描いたもので、貧しいが愛を以て貫かれた母子の世界が活寫されてゐる。附錄「母への手紙」は巴里から母親に送つたもので人の子フィリップの善良さが滲み出てゐるものである。

（昭和一〇、七、五　神田區小川町三ノ八　白水社　四六判三一五頁　一・〇〇）

純粹言語の說

—「雨の念佛」に就いて—

内田百間

宮城道雄氏著「雨の念佛」に就いては、既に新聞紙上に自分の所見を發表した後なので、今圖書館協會の需めに應じて、同じ樣な事を繰り返すのも氣が進まない。それで三月某日田端の天然自笑軒に宮城檢校と佐藤春夫氏と私と相會した折の座談の中から思ひ出した事を記して、責をふさぐ事にする。

宮城檢校と佐藤春夫氏とは、その日初めて會つたのである。佐藤氏は伊太利產の磁製の鈴を檢校に贈つて、初對面のみやげ物にした。座談は音樂の話から文章の事に及び、宮城檢校が增鏡や枕草子などの古典を點字で讀んだ記憶によつて、かう云ふところはどうかと云ふ風に質すので、私共の方で閉口した。「飛んだ塙保己一」だと云つて笑つた。

佐藤氏が、かう云ふ事を云つた。「雨の念佛」の文章は、話す儘の言葉を以て綴つてあるから全卷を通じて同音兩義の曖昧な用語が一つもない。ラヂオの放送者は人が耳で聞いてゐる事を考へないで、目で讀んで初めてはつきりする樣な辭句を不用意に用ゐるから、時々意味が曖昧になる。宮城さんの著書にはさう云ふ點が少しもない。その儘誦讀するのを聞いても、語意が二義に亘る樣なところのないのは、流石盲人の文章であると感じた。

佐藤氏の說を聞いて、私はその卓見に敬服した。冒頭にも述べた通り、「雨の念佛」に就いては、私自身の所見もあり、又諸方面から寄せられた讃辭もいろ〳〵讀んだけれど、今佐藤氏の說いた樣な意見を聞くのは初めてである。それで私は

佐藤氏に附和して自分の思ふところを述べた。佐藤氏の說は卽ち「雨の念佛」が純粹言語を以て綴られてゐると云ふ事に歸する。言葉は本來耳の所有物である筈のものが、文字と印刷術との爲に、いつの間にか目の所有とならうとしてゐる。そこへラヂオの發明があつて、又いくらか言葉が耳に返らうとしてゐる。

宮城檢校が耳だけによつて所有する言葉を以て綴つた文章は、卽ち今日、我々の有する言葉を、その本來の、最も純粹な姿で再現したものである。晴眼にして文をやる我々の學ぶ可きところが多々あるに違ひない。

それから又私はかう云ふ事を考へた。中學の時に象形文字と音標文字とに就いて敎はつたところによると、象形文字は未開の文字であつて音標文字の方が進步してゐる。漢字よりは羅馬字の方が文明國の文字である云々。しかし今「雨の念佛」の文章からその事に考へ及んで見ると、どうもその逆の樣な氣がし出した。言葉は本來耳のものであるにしても、又目がこれを讀む事を妨げる筋はない。言葉を文字の形に換へて、これを見て讀むと云ふ上から云へば、つまり目の言葉としては、音標文字よりも象形文字の方が便利であり、複雜な意味を託するに適して居り、結局進步した文字と云ふ事になりさうである。音標文字の意味は寧ろ中途半端で、同じく目で見る物として形が曖昧であり、それかと云つて音標文字をいくら耳に近づけても聲はしない。音符程度の約束上の符號に過ぎないのである。さう云ふ事を私は物々しく述べ立てた象形文字も音標文字もなんにも見えない宮城檢校は、はあ、はあと云つて、私の說に感心した樣である。

（昭和一〇、二、一八　神田區神保町三ノ六　三笠書房　四六判二六五頁　一・五〇）

影を踏む

土岐善麿著

著者は著名な歌人であるが、近來は歌に遠ざかり、好んで長唄、琴曲等の歌曲や隨筆の類をものしてゐるやうである。本書も最近に現はれた隨筆集であつて、これで著者の隨筆集も十指を屈するに至つたであらう。著者は人も知る才氣渙發のジヤーナリストであつて、その輕快淸新のスタイルは、なんといつても獨自のものであり、近代的都會人の一典型を示すものではあるが、近來は歌人として斷ちがたく繫がれてゐた日本的傳統の絲をひきよせ、次第に著しく情趣的心境的になりつゝあるをおもはしめるものがある。本書の題名の暗示する影・匂・氣分等は全篇に搖曳するものゝやうであり、わけても「小鳥を聽きつゝ」「抒情詩曲」「浴泉記」「道成寺詣」等に著しい。著者のジヤーナリストとしての面目や特色は「聲三題」「マイクの前」「議會を覗く」「正面半面」等のうちに窺はれるのであらうが、われ〳〵が讀んで親しみを感ずるのはむしろ前者の類にあることは、それがより心境的であるためか、それともわれ〳〵の中にある日本的傳統の血によるものか、おそらくはその兩方であらうが、われ〳〵の希望は「うたふ心吟ずる心」などに現はれてゐるやうな、歌人として時代の前に積極的に立つ姿勢を見せてもらひたいといふことではあるまいか。

世の隨筆愛好家に著者の好む一個新鮮な「くだもの」として奬める次第である。

（昭和一〇、一一、二八　神田區駿河臺二ノ一　四條書房　四六判三二五頁　一・五〇）

花鳥草紙

新村出著

數多い新村博士の隨筆集のうち、これは純然たる隨筆集の觀あるものである。標題のやうに草木花鳥に關するものが多い。「桑の歌」「思ひ出す樹木」「樹木の名と實」「七葉樹」「柿の葉」「雲雀隨筆」「天なる雲雀」「雀隱れ」「黑つぐみ日記」「小鳥の聲にひかれて」等々、ちよつと題目を拾つてみても、このやうな工合である。

草木花鳥の隨筆といつても、博覽强記の博士の事なれば、事每に專門の語源語史にふれ、それからそれへと古書をひらき故事にふれて語りきかせ、つきるところを知らないのである。あるときは思ひ出を旅によせ、感慨を歌にひいて興趣橫溢、讀者は著者の博識に驚歎し、おのづからに偲ばれるその長者の溫容にひきゐられて思はず讀み耽けらないわけには行かない。著者は本書中のどこかで自らを「漂白のデレッタント」といふやうなことばで評せられてゐたが、このことばは却つて悠容春の海のやうな著者の人柄を思ひしのばせて床しかつた。暑夏閑をぬすんで、このやうな境地に遊ぶ事も快事であらう。

（昭和一〇、五、一五　麴町區丸ノ內ビル　中央公論社　四六判三七七頁　一・八〇）

きよろろ鶯

北原白秋著

北原白秋氏の詩文に見る絢爛たる光彩と鮮麗なる情感とは

夙に人の知るところである。隨筆集「きよろろ鶯」は前の集「風景は動く」に次ぐもので、大正十五年から昭和十年に至る間、白秋が東京へ移り住んだ以後の生活の所產で、歌集「白南風」と大體同時代に成つた散文乃至散文詩風のとりどりのものが蒐められてゐる。

散文とは云へ、著者の詩人的審美感は刺繍のやうに美しく職り込まれてゐて、その風韻に於て詩さながらの氣息を色とし光とし香とし聲とするところの切々たる藝術的表現が與へられてゐる。著者の風格は隨所に杳としてほのめき妖としてあらはれ、促迫たる餘情をふくんでゐる。

然し從來の北原白秋は餘りに炯爛たる文章家の如くであつたが、老來ここにやうやく洗練された詩魂は幽寂の境をねらつてゐるやうにみえる。それは氏の詩歌に本然のものを現はしてゐるが、隨筆にも窺はれる。この書の中にも、氏はそのことを次のやうに感想してゐる。

「……　藝道は微妙なものであると思ふ。老境にはひればはひるほど本格になる。然し初めから傳統のままの單なる繼承者で通したものには眞の生彩はある筈はない。變るだけは變り、殼を脫ぐだけは脫ぎ、何もかも思ふさまにやつてみた末に、全くの不自由だと思はれさうな定型に眞のすばらしい自由があることを悟るであらう。これはただに舊來の定型に還ることではないのだ、幾度も幾度もの上を大きく螺旋形にまはつてゐるのだ、後へ後へ引き還したやうに見えながら、その實は先へ先へと進んでゐるのである」（谷中の秋）

この書は「遷宮奉拜記」以下納むるところ七十有餘篇、或ひは滿洲の野を通り哈爾賓に話を拾ひ、北海道の熊祭を語り、或ひは牧水の死を悼み、或ひは故鄕の柳河を偲び、或ひは武藏野の新居の風趣を記して、玄妙自在のものがある。「きよろろ鶯」「蝦蟇を釣る」以下には鳥蟲介魚を記してその觀察の尋常ならざる、奇拔といふ以上の妙味がある。また四季の移り變りをことさらに深く感じて「季節の臘」に蒐められた一月より十二月までの各月の詩的感情を叙しては、白秋ならでは爲し得ぬ才華の煥發、否寧ろその技巧の爛熟といふべきものが見えるのである。

（京橋區新富町三ノ七　書物展望社　菊判三八一頁　三・〇〇）

山中說法

楚人冠著

昭和八年の八月六日號から『週間朝日』に書きはじめ、八十餘回に及んだものを纏めて作りあげたものである。いづれも人事世間に關する短言であつて、いはゞ世上隨筆とも稱すべきものであり『湖畔吟』とは全然別趣のもの、警句集といつていゝものである。

讀者の見るところでは、これこそは氏に最もぴつたりした隨筆のやうに見える。見るもの聞くものにつけ、おもふところを縱橫自在に述べて、氏の輕妙にして鋭敏な才智をおもふがまゝに驅けめぐらせてゐる。ところ〴〵あげて見よう。

或る年或る溫泉で、風呂番に背中を流してもらひながら『一體こゝの湯は何に利くのだ』と尋ねたら、その風呂番言下に何のためらふ色もなく『なアに何にも利きアしません』ときッぱりいひ切る。物を尋ねて、これほど求むるところなく、私心を挾まぬ明快な答を得たことはない。その溫泉に行く毎に、私はあの風呂番を思ひ出す。（六十七頁）

一讀爽快を感じる文章である。

文字を橫書きにする時、左書きがいゝか、右書きがいゝか、よく問題になる。しかし橫書きにする以上は、左書きが當然で、これはほとんど問題にならない。事實筆を持つては右から書けるものでない。それよりも問題は縱書きか橫書きかに在る。私は支那の字も日本の字も縱に書くやうに出來たものと確信してゐる。

この斷然たる見識は敬服に値しよう。

讀者はどこを開いて讀んでもいゝ。至るところいひあてられるもの、おもひあたるもの、同感し、もしくは苦笑を禁じえないものを發見するであらう。

（昭和一〇、七、一五　京橋區京橋三ノ四　日本評論社　四六判三二〇頁　一・八〇）

自畫像

戸川秋骨著

著者は本書の「序」のはじめに「この二年ほどの間に書きすてたものが、また積り重つて一卷をなすに至つた。一年に何度か行はれる大掃除のやうなもので、この一卷も塵芥のやうなものである。塵芥であるが馬鹿にはならない。バタ屋はそれに依つて生を營んで居るのであるから。が今それをかうして集めて讀んで見ると、多くは自分の肖像を描いたものに過ぎない。そこで題するに自畫像としたのである。」と書いてゐる。この一節を讀んだだけでも著者の隨筆の風格をおもはせるものがあらう。

收めるところ試みに數へてみれば「私の顏」以下五十八篇に及んでゐる。讀者はどこを開いて讀み出してもよい。讀むうちに面白さにつられ、あれこれと讀みつゞけるであらう。どこを讀んでも著者特有のふくらみのある和かな雰圍氣に包まれ、そのなかに含まれてゐる輕妙な皮肉や諷刺を樂しむのである。淡々とありのまゝを書き流すうちに自らに出てゐる著

者の教養や人柄はいかにも日本人らしい親味にあふれたものである。著者の皮肉や諷刺も毒のあるものではなく、どことなく江戸前らしい淡白なものであり、それだけに人の心臓をつきさす力をもたないことも、その天成の致すところであらう。篇中「强きを助け弱きをくじく」「意氣」「外國語・飜譯思想」などは、なか〳〵に痛快なものであり、著者一流の啖呵と見られるものであらうが、なんとなく品のいゝ物やはらかさを失はないものである。

このやうな隨筆集は今日誰よりも大人に教養のため是非とも讀んでもらひたいとおもふ。

（昭和一〇、一〇、一〇　麴町區三番町一　第一書房　四六判三七六頁　一・五〇）

折柴隨筆

瀧井孝作著

ぼくは大正十二年に京都に行つて住み、大正十四年には奈良に移居、それから、昭和五年に八王寺に來て、今日に至つた。この年ごろ、雜誌や新聞に時々書いた、隨筆小品斷片、五六十篇、こゝに纏めて一册にした。

大方ぼくの生活範圍内の記述ばかりだが、しかし私心なく眞直に書いたものだ、ぼくは抽象的なこと思索などは、はなはだ不得手。その代り具體的なことスケッチは間違ひなしにできるやうだ。從つてこの隨筆集の特色は、みんな具象的にかいてある點だと思ふ。

この序文が最もよく本書の性質を說明してゐると思ふ。著者は寫眞主義の重厚な作風の作家として知られてゐる。

この隨筆は大體、京都、奈良、八王寺を中心としたもの、氏の故鄕である飛彈を描いたもの文學及俳諧を論じたもの及び氏が最近熱中してゐる釣に關するものに大別されてゐる。いづれも氏の小說と同じく素朴で力の滿ちたものである。飛彈の狢や狐つきの話などは特に氏の筆致に面白く書かれてゐる。

（昭和一〇、九、一五　牛込區柳町二四　野田書房　四六判三五一頁　二・五〇）

攝陽隨筆

谷崎潤一郎著

「陰翳禮讃」「東京をおもふ」の二長篇を主なるものとして本隨筆集は出來上つてゐる。ほかに「直木君の歷史小說について」「大阪の藝人」など興味ある讀みものもあるが、その他は大方私事に關することで、とりたてゝいふほどのことはない。その代り「陰翳禮讃」「東京をおもふ」の二篇はぜひとも現代人に一讀を奬めたいものである。

「陰翳禮讃」は日本の傳統文化論であり、「東京をおもふ」は現代文化論であると、むづかしく命名してもいゝかも知れない。前者は傳統文化といつても王朝文化の流れ、後者は西洋輸入文化の現代相を見たものである。著者の見方はいかにも作家らしい見方であり、おの〳〵の生活樣相を身につけて味ひ、その體驗を物について直接に語るといふやり方であつて、讀者は著者とともに物を見聞きするおもひを抱き、事每に感興を新にするのである。恰も住む家の隅々まで隈なく一々物を手にとつて見てまはるやうに、身にしみて日本文化の樣相にふれ、これを吟味してゆくことが出來る。著者は王朝文化を禮讃し、現代文化に眉をひそめてゐるのであるが、讀者がその態度に贊すると否とを別として、このやうな文化觀に親しみを感じ、種々反省すべきものを與へられること、そしてこのやうな文化觀は著者以外の人には容易に期待しえないものであることには、誰しも異存はないとおもふ。日本文化が國民的關心を喚びおこしてゐる今日の必讀すべきものとして推奬したい。

（昭和一〇、五、二一　麴町區丸ぴる　中央公論社　新菊判四一九頁　一・七〇）

騷音

宮城道雄著

さきに好評を博した「雨の念佛」に次いで出た隨筆集である。同巧異曲のものといへばそれまでゝあるが、通讀してみて本書には前著以上に音の感覺が浮出てゐるやうにおもはれる。本書も同樣に內山保氏の口述筆記にかゝるものであり、內田百間氏の眼を通して貫つたものであるといふ。卷頭「騷音」以下三十五篇がある。その中卷末の五篇は種々專門の音樂に關するものであり、これは舊稿に手を入れたものであるといふ。「專門の音樂についての意見等は、後日ゆるゆる發表したいと思つてゐた」といつてゐるが、この五篇は著者の音樂に關する思想を知るにいゝものであり、特に興味あるものである。著者は「自分たちの賴るべき音樂の基調」を邦樂におくといふ意見であるが、これは著者として極めて當然のことであらう。ほか三十篇、なかにはいと輕いものもあるが、それ〴〵に輕くあつさりしてゐて面白い。「途上」「盲人の勸」「男の箏と女の箏」など、盲人の聽感が際立つて出て

ゐて、なかなか面白い。全篇著者の平和な穏かな生活と人柄が出てゐて、氣持よく讀んで行くことが出來る。これも前著に加ふる世に稀な隨筆集として一讀を推薦する次第である。

（昭和一一、一、一九　神田區神保町三ノ六　三笠書房　四六判二九六頁　一・五〇）

續々湖畔吟

楚人冠著

かつて本協會で推薦した「湖畔吟」及び「續湖畔吟」につゞく終編である。本書も前二編と同樣三五判の優美な定であつて、挿入の湖畔田園の風情を映す寫眞もまことにふさはしく、一入興趣をそゝるものがある。いづれも短篇であつて、一流のすつきりした麗筆を示さぬはない。著者の湖畔吟はすでに定評のあるところであるから、いまさら本書の特色を語るにも及ばぬことであらうが、湖畔田園生活における身邊の觀察を素描してゐるなかにも氏のジャーナリストとしての天禀の鋭敏な機智がつねに閃き出てゐるのである。たとへば「落葉」を書いても落葉の觀照に浸つてゐるのではない。落葉を掃くことを語り、そのなかにおのづからな諷刺と輕妙な說法を藏するといふ風格のものである。「序」に

「大正十三年四月この湖畔に移つてより、年を閲すること足かけ十二年。初の頃は見るもの聞くもの一つとしてわが詩料たらざるなしときへ覺えしが、今や十二年の年月は甚しくわが湖畔神經を鈍化して、いくぢのなき申條ながら、昨今は何を見ても何を聞いても、一向詩情を動かさず吟ぜんにも吟じ得ざるに至れるが哀し。」

とあるが、おそらくは楚人冠氏は老來禪味を加へて來たのかも知れない。讀者は「秋の明るさ」のやうなもののなかに淡々として老熟せる心境を寫し出す氏を期待するであらう。

（昭和一〇、六、一九　京橋區京橋二丁目　日本評論社　三五判三六一頁　一・二〇）

縱と横

西川義方著

醫學者として又前侍醫として令名ある著者の隨筆百篇を收めてある。極めて多岐に亘り、醫學の先人の思ひ出を述べたもの、又日光浴、溫泉浴を奬めるなど醫療に關するものも多いが、ドイツの飲物ボーレの風雅を語り、歐洲に日本を原產地とする公孫樹を尋ね、更に多忙なうちに小暇を利して名蹟を訪れた滯歐雜記ともいふべきもの、その他身邊の感想なども少くない。著者は又短歌を能くし、各所に挿入された歌は豐かな詩情を示して居り、殊にその樹木を愛する心は、樹木について書いた多くの短文によく現れて居る。著者は歐洲旅行に於て、各地の記念にその地の樹葉を採蒐して居られる由であるが、樹木の種々の印象を述べてある外に、ドイツのアイヘ、デンマークの山毛欅などに對して、杉を日本の國民木とし、之によつて神國日本をシムボライズしようとする態度は、やがて著者の熱烈なる愛國の情を示すものでもある。

「獨逸大理石と獨逸槲とによつて、獨逸偉人を祀れる獨逸の科學は永久に滅びる事はあるまい」といふ著者は、皇國運動法の生理的價値を論じたり、西洋諸國に於ける日本文化の模倣を述べて、徒らに逆輸入に墮することの愚を警めるなど、國の誇りを强調して居る。その他「先帝を悼み奉る歌」「東郷元帥の病床に侍して」などもある。多くは極めて短いものであるが、著者の穩和にして熱を包む態度は、本書一卷に特種の味ひを與へてゐる。

（昭和九、一二、二〇　神田區神保町一ノ一　三省堂　四六判五二九頁　二・五〇）

文學讀本　春夏の卷

島崎藤村著

さきに本協會の推薦した「秋冬の卷」の姉妹編であつて、おなじ山崎氏の編纂にかゝるものである。三月より八月にいたる春夏の季節に寄せ月別に配列して、體裁全く前編と同樣である。

全體として見ると、本編には自然觀照の文章が多いやうである。前編には人及び人生に關する思索的な色合が濃いやうにおもはれる。これも季節による編纂の自らな現はれであらうか。また前編にはどことなく老成の藤村が映つてゐり、本篇には青年の藤村が寫つてゐる氣がするともいへようか。然しこゝに見る青春も華かな青春ではなく、なんとなく憂愁の青春であるらしい事も、作家藤村の本質の反映であらうか。とまれ前編と同樣香氣高い良い文集である。

（昭和一〇、三、一〇　麴町區三番町一　第一書房　四六判三五五頁　一・五〇）

文化と大學

——法學隨想——

帝國大學新聞社編

さきに公刊された科學隨想「研究と世間」及び文學隨想「書と散歩」は當時本誌にも紹介したし、爾來多くの讀者に愛讀されてゐるのであるが、今度は主として法學者のものされたものを集めて法學隨想「文化と大學」として世に提供された。收錄するところ三十一篇、試みに卷を開けば劈頭先づ牧野英一博士の一流の美文で「法律を解釋論として研究しようとするときわれわれは、法律を賢こきもの美しきものとして理解したいとおもふ。」といふ書き出しで述べられた文化主義の法律論があり、それに續いて穗積重遠博士の「法律家の祈り」と題する「願くは我等をして善き法律家たらしめ給へ。善き法律家たるによつて善き人たらしめ給へ。善き人たるによつてよき法律家たらしめ給へ。」の一句で結ばれた人間主義の法律論がある。其他田中耕太郎博士の「トルストイと我等」、美濃部達吉博士の「學生の思想生活」、杉山直治郎博士の「世界法の理論を讀む」、末弘嚴太郎博士の「水泳王國の建設と日本泳法」、勝本正晃博士の「釣と法律」、中川之善助教授の「東北・凶作・身賣」等何れを見てもこの人ならではの珠玉の文字ばかりである。

裝釘も無飾純白の紙裝で清楚なもの、酷熱の夏を理論づくめの法律書は暑苦しいと思ふ人々に、鎖夏の讀物として本書を薦めたい。

（昭和一〇、六、二八　本郷區東京帝國大學新聞社出版部　四六判二四八頁　一・二〇）

文墨餘談

市島春城著

昨年以來の出版界の著しい傾向は宗教復興の波に乘つた佛教書の刊行と隨筆物の流行であると言ひ得よう。就中隨筆物の中には日頃新聞雜誌に寄稿された雜論漫文を手當り次第に書きあつめたといふ類が多く隨筆の名に値しないものが尠くはないやうである。

隨筆の體には樣々あつて一概に言ふことも出來ないが、著者の經驗なり、趣味なりが豐富であり、作者の圓熟せる人格が行間に彷彿としてあらはれ來るものがその最たるものゝやうである。この意味に於て春城翁の隨筆を現代隨筆の白眉とすることに對しては何人も異存はあるまい。

本書は書藝叢談、圖書漫渉の二項を以つて始められ、次いで山水游記、雜間錄、亡友錄、雜俎の諸項に分けられて居るが、何れも豐醇なる和酒を玩味するの思あらしむるものである。

多方面に亙り然も淡泊なる翁の蒐集趣味或は壯年政治運動に沒頭し、或は種々の新聞の主筆として又記者としての活躍、明治大正の文豪との交友談等汲めども盡きぬ話柄である。所謂功なり名遂げ文墨の間に悠々自適の餘生を送られつゝある翁の面目は躍如として全篇に漂つて居る。

（昭和一〇、八、一九　杉並區高圓寺六ノ六五九　翰墨同好會　四六判四一二頁　二・三〇）

和琴抄

今井邦子著

著者はプララギ派の歌人としてすでに著名である。本協會ではさきに隨筆集「茜草」を推薦した。本書も「茜草」同樣隨筆集であるが、短歌あり詩あり評論あり隨想あり劇評あり、さらに一層品々をとりまじへて多彩である。

著者は年少上京して努力の結果今日の盛名をかちえた人のやうである。あくまで努力の人であり、普通人が刻苦精勵して鍛えあげた人といふ感を本書を通讀しても受けるのである。これ或は一層尊重すべきものであらう。堅實な地盤の上に立つてところどころ秀れた知見を見せてゐる。本書中古典の鑑賞批評に最も勝れたものを見せてゐる（例へば「枕草子を讀みて」）のは蓋し著者の本領を最もよく發揮し得たがためであらう。

「卷末記」に「私は隨筆は樂しみに書きますので、最もたくまず自然に、心のおもむくまゝ筆のおもむくまゝに書いてまゐります。」とある。たしかに著者は隨筆の世界で解放されてゐる。著者の歌を好まない人でも隨筆は好ましく思ふであらう。本書のやうにとりどりにいりまじつてゐると、なんとなく開いてゆくのが樂しみで、また一入の感興をおもえもしよう。婦人の好讀物として弘く推奬したい所以である。

（昭和一〇、六、一二　神田區神保町二ノ二　紫式部學會出版部　四六判三三七頁　一・八〇）

春興倫敦子

福原麟太郎著

著者の英京滯在中の見聞錄とも云ふべきもので「英語青年」その他に發表されたもの七十二篇を收めてゐる。その酒

落れた書名を通して覗はれるやうに輕快な筆致で物せられた、いかにも氣の利いた讀物であり、折々はユウモアを漂はせまことに才筆といふべきである。しかし内容は決して輕く讀過すべきものでなく英文學を愛する讀書子は元より、一般の讀書人を啓發するところのものが多い。

取材は著者の豐かな教養と趣味を反映していかにも多方面に亘り、現代の英文學を論じ、英語を論ずる一方、演劇を評し、倫敦の自然を描き、交友を物語る等端倪すべからざるものがある。昭和五年一月二十一日、折からの濃霧を景物とした倫敦會議に就いての一章、大英博物館へ日參するカーネギーの研究員バーゲンの悠々たる研究振りを書いた一章、簡潔に要點を描いた大英博物館の誌上案内の章などは本書中でも最も興味あるものであらう。

（昭和一〇、九、一五　麹町區富士見町一ノ五　研究社　四六判三六一頁　二・〇〇）

無極隨筆

成瀨無極著

無極成瀨清氏は京都帝大教授で文學博士、獨逸文學の專攻であるが、同時に隨筆家としても有名であり、又自ら小說、戲曲も創作するといふ多才である。本書は氏の近作を收めたものである。

卷頭の隨筆十三篇は氏の豐富な才能を隨所に張らせたものである。「大都市交響樂」は現代大都市の生活層を如實に描寫せる映畫、小說、戲曲を論じたもの、「秋の旅」は新潟から黑部峽谷への旅を描いたもので車中の人物の點描はなかなかの才筆である。「ブルジョア詩人としてのゲーテ」はヂイド、ハウプトマン、トオマス・マンのゲーテ觀を述べたもの「東京をおもふ」は谷崎潤一郎の東京と大阪の氣質を比較したこの一文をとりあげて著者の見解を示したもの、「魂の醫者」は獨逸文學に現はれてゐる魂の醫者なる不思議な力の所有者を論じたもの、其他である。

「謠曲漫談」は謠曲を通してみた氏の交遊錄ともいふべきもので、古都京都の教養人の雰圍氣がよく描かれてゐる。

「大正文壇の追憶」は氏が親しく交つて大正文壇の諸文豪の思ひ出の記である。上田敏、夏目漱石、森鷗外、島村抱月、廚川白村、有島武郎の性格が書かれてゐる。

「現代の獨逸小說に就いて」は新卽物主義の文學運動に始まり、戰爭小說・心理小說・世相小說・傳記小說・歷史小說・文化史的小說の時期を經てナチスの國家主義、國粹主義精神に基く鄕土文學・國民文學・民族文學の提唱に至るまでを紹介したものであるが、就中、世相小說に焦點を置きその作家と作品を詳細に論じてゐる。

「演劇六講」は氏の演劇への理解の深さを示すものであるが、演劇の理論、俳優論、東西劇術論その一、その二、映畫劇とラヂオ・ドラマ、演劇の社會性と新國民性よりなつてゐる。殊に東西劇は氏が親しく見た獨逸の諸名優の演技を論じ、併せて之を我國の俳優のそれと比較したもので最も興味を伴ふものである。モイッシイ、クラウス、ヤニングス等の我々も映畫で知つてゐる諸名優が述べられてゐる。

卷末に氏の創作にかゝる小說「西京夜話」、戲曲「死の顏」「海の哀歌」の三篇が添えられてゐる。豐かな教養を隅々まで漲らせた、上品な讀物として一讀を勸めるものである。

（昭和九、一一、一二　神田區小川町三ノ八　白水社　菊判二九〇頁　二・三〇）

思はざる收穫

內藤濯著

佛蘭西文學を中心にした隨筆集で、著者は佛蘭西の新文學に造詣と理解との深い人である。佛蘭西文學に關心を持つ人の一讀をお勸めしたい手頃の讀物である。卷頭の三篇、佛蘭西新文學の殺到、佛蘭西文藝の味はひ、饒舌から沈默へはなか〳〵力の籠つたもので、近代佛蘭西文學を貫ぬく思潮の變遷を論じたもので短章ながら讀者を啓發するところが多い。「味はひ」といふのは北歐文學の持つ重厚、深刻に對立させて佛蘭西文學の明るい表現の中に盛られてゐる靜かな觀照の世界を指したもので、人生の核心を把えるに兩者に優劣のないことを論じたものである。「人と作」と題する五章は佛蘭西近代の作家數人をあげて簡潔にその特色を說いたものでヴエルレエヌ、ヴイルドラック、カルコ等が扱はれてゐる。「印象と追憶」十章はアルルの女、フイガロの結婚、人間ぎらひなどの舞臺の印象記でその他滯佛當時の旅行記等であつて、演劇に對する著者の理解の深さを見ることが出來る。その他「讀後」「身邊雜事」の八章があり、終りに「十二人一首」と題して十三篇の譯詩が添えられてゐる。

（昭和一〇、四、一〇　神田區小川町三ノ八　白水社　四六判二六九頁　一・二〇）

德島の盆踊

花野富藏譯

本書は、さきに本協會で推薦した同じ譯者による「日本精

神」に次いで世に出たヴエンセスラオ・デ・モラエスの著作の譯本である。譯者の「あとがき」によれば、この「德島の盆踊」は「モラエスが亡き妻おヨネの幻影を追つて德島に移住した直後に書かれたもの」であるといふ。本書の扉には「亡き人々の追念に」と書かれてある。譯者はかういつてゐる。『モラエスはこの「德島の盆踊」を契機として、「追慕」の世界へ沒入して往つた』。そして『この「追慕」の一字がモラエスの詩藁を豐かにし、その思索を深めて、その文學の原動力となつてゐるのだ。』

本書には「德島の盆踊」と「死」の二篇が收められてゐる。いづれも日記風に隨想をしたゝめて、故國ポルトガルの「ポルト商報」へ送つたものであつて、「死」の中に收められてゐる「友への手紙」だけは同商報のペント・カルケージヤといふ人にあてた手紙で、本書の跋文の意味を持つてゐる。本書はモラエスが日本文學の精粹は古來の日記隨筆の類にあると觀じ、自らもその世界に沒入して、彼自身の隨筆文學を創作することを試みたものである。譯者はこれを「紅毛日本文學」と面白く呼んでゐるが、まさに西洋人による日本文學の試作である。モラエス自身も自覺せる如く、彼の血液は遂に日本の傳統的な精神界に參與することが出來なかつた。本書を讀む我々にはモラエスの追慕の念は切々として響くのであるが、遂に我々の傳統の血と異るものであることが掩ふべくもなく感受せられるのである。而も現在の我々がこの紅毛人の深く切實な感想に同感を禁じえないものゝあることは、我々にとつて二重に複雜した感銘を與へるのである。譯者の理解も深く、譯筆も流麗である。歴史並に文化について關心の高まつてゐる今日の時代に、いろ〳〵な意味で示唆を與へる良書であるとおもはれる。

（昭和一〇、九、一〇　麴町區三番町一　第一書房　四六判　三四九頁　一・五〇）

昭和十一年三月二十八日印刷
昭和十一年三月三十一日發行
良書百選第四輯
定價金二十錢
編輯兼發行者　社團法人　日本圖書館協會
代表者　松本喜一
印刷所　株式會社　東京築地活版製造所
發行所　社團法人　日本圖書館協會
東京市麴町區三年町一番地文部省内
振替東京二四一八一番

第一書房豫約

全十二卷
日本哲學全書
各卷一圓五十錢（毎月一卷配本）
申込金五十錢（最詳會費に加入）
配本開始中、締切三月末日。

監修
文學博士　井上哲次郎
文學博士　小柳司氣太
文學博士　高楠順次郎
文學博士　醫學博士　富士川游
編纂　三枝博音

本全書は日本文化の根幹となり、傳統を培ふ血液となつて我々に傳へられた各時代の哲學思想を系統ある整理によつて新しき世代に贈らんがために、あらゆる角度から集大成した思想財産の總目錄に外ならぬ。敢窮せられた思想家百三十人、その手によつて遺された劃期的名著二百種は、悉く本全書の「内容見本」中に解説して、厖大なる意圖を明かにした。

第一部　一般哲學
1 佛教篇
2 佛教篇
3 儒教篇
4 儒教篇、神道篇
5 國學篇
6 西洋哲學篇
第二部　自然哲學
7 佛教家の自然觀
醫學家の自然觀
8 天文家の自然觀
物理學家の自然觀
9 儒教家の自然觀
第三部　人生哲學
10 歴史論、經濟論
11 藝術論
12 宗教論兵法及武術論

第一回配本中　佛教家・醫學家の自然觀

内容見本並びに實物見本全國書店にあり!!

全十卷
フランス現代小説
ジイドを先頭とするフランスのN・R・Fとわが第一書房との國際的握手による劃期的壯擧成る。
各卷一圓五十錢（毎月一卷配本）
申込金五十錢（最詳會費に加入）
豪華版　配本開始中、締切三月末日。

モンテルラン　堀口大學譯　闘牛士
ロシエル　山内義雄譯　女達に覆はれた男
マルロオ　小松清譯　王道
ダビ　岩田豐雄譯　北ホテル
グリーン　新庄嘉章譯　閉された庭
シャルドンヌ　佐藤朔譯　結婚
ラクルテル　青柳瑞穗譯　反逆兒
マツコルラン　永田逸郎譯　女騎士エルザ
ジオノ　葛川篤譯　運命の丘
フエルナンデス　菱山修三譯　青春を賭ける

第一回配本　闘牛士
アンリ・ド・モンテルラン　堀口大學譯
「肉體の文學」の名はモンテルランとともに生れた。ロマン・ローランは彼を激賞して「君はフランス文學に存在する最大の力である」と述べた。本書はモンテルランの代表作として、彼が弱年に熱中する青年のあまりにも健康な肉體の自由とスポーツの心理とをあらゆる角度から描破した名作であり、同時に明るい南欧の太陽の下に花咲いた近代愛の燦然たるロマンスである

第一書房
東京市麴町區三番町一
電話九段三三四四
振替東京六四二二三

材料研究會編

工業材料便覽
—非金屬—

四六判1090頁 價7圓 送.22

本書は邦文書としては勿論、外國書にも比儔すべき類書をみざる新著にして斯方面の新鋭及權威者卅餘名が各々得意とせる所を分擔執筆せる稀有の便覽である。無機質材料、有機質材料、一般問題の三項に現今各方面で使用せられてゐる非金屬材料の全部を網羅して遺憾がない。

工學博士 內田俊一・幡野佐一 共著

高壓裝置の理論と實際

菊判408頁 價4圓 送.14

高溫及高壓應用の各種工業は最近世界的に躍進して現代の化學工業の全貌を變化せしめつゝあり、その技術は漸く完成せる技術としての體系を備ふるに至つてゐる。本書は豐富な資料を自由に驅使して現在達し得る最高水準を究めて、その理論及實際を詳述して餘蘊なき新著である。

工學博士 厚木勝基著 〔全訂改版〕

人造絹絲

菊判580頁 價5圓50錢 送.22

斯界の權威的文獻の全的新創改版
人造絹絲の最近の製造法及性質を詳細正確に記述するのみならず、製造原理及その性質の依つて來る原因を明說し、隨所に獨創に富む新研究を點綴し、將來の動向、更に人造紡績纖維を論盡してゐる。

帝國森林會著

航空寫眞測量と其應用

四六判91頁 口繪21枚 價1圓 送.08

最近に於て實際化されて來た航空寫眞測量について、その概要及各方面への應用並に森林調査に就て理解し易く、その要諦を盡せるもの。滿洲國に於て近々半ケ年によく二百八十萬町歩の森林調査を完成せる帝國森林會の著になり、最も權威あるものとして推奬し得

工學博士 青木 保著

精密工學 第I卷
精密測定及計測機器

菊判393頁 價3圓70錢 送.14

一般機械類が近き將來に現在の所謂精密機械と同等の工作を必要とするに到るのは自明であり、そのために精密測定を伴ふことは云ふまでもない。本書は主として機械工作上必要な測定法と測定機器の構造、用法、精度等を簡明に說明し、初學者にも理解し得るよう配意せるもの。

東京日本橋通・本社電話日本橋(24)2121・2131・振替東京5番

行所 丸善株式會社
(東京—神田・三田・早稲田・丸ビル)—大阪・神戸
京都・名古屋・横濱・福岡・仙臺・札幌・京城

日本評論社 讀本シリーズ

圖書目錄進呈
東京京橋三丁目四
振替東京一六番
電話京橋六一九一番

法學博士 上杉慎吉著 **憲法讀本** 菊上一七四 價一・〇〇 送料・一〇〇

法學博士 穗積重遠著 新訂 **民法讀本** 菊一二五〇 價一・〇〇 送料・一〇〇

經濟學博士 太田正孝著 再訂 **經濟讀本** 菊一一八〇 價一・〇〇 送料・一〇〇

經濟學博士 永井亨著 **社會讀本** 菊一三〇二 價一・〇〇 送料・一〇〇

尾崎行雄著 改訂增補 **政治讀本** 菊一二〇四 價一・〇〇 送料・一〇〇

東大助教授 小川太一郎著 **航空讀本** 菊一四〇 價一・五〇 送料・一四〇

平田晉策著 **陸軍讀本** 菊一三九八 價一・〇〇 送料・一四〇

平田晉策著 **海軍讀本** 菊一三八 價一・〇〇 送料・二〇八

土田杏村著 **思想讀本** 菊一二三 價一・〇〇 送料・一四〇

法學博士 山崎覺次郎著 **貨幣讀本** 菊上一二〇 價一・二〇 送料・一四〇

法學博士 松井茂著 **警察讀本** 菊一四〇六 價一・〇〇 送料・一四〇

理學博士 渡邊萬次郎著 **金銀讀本** 菊一二八 價一・五〇 送料・一四〇

經濟學博士 土方成美著 **國民經濟讀本** 菊上二四 價一・二〇 送料・一四〇

友松圓諦著 **宗教讀本** 菊上三二 價一・二〇 送料・一四〇

小山松吉著 **日本精神讀本** 菊上三二 價一・五〇 送料・一四〇

醫學博士 入澤達吉著 **內科讀本** 菊一四 價一・五〇 送料・一四〇

醫學博士 木下正中著 **產科婦人科讀本** 菊一三一 價一・二〇 送料・一四〇

山田耕筰著 **音樂讀本** 菊上三〇 價一・五〇 送料・一四〇

安田銀行 高山藤次郎著 **銀行讀本** 菊上二三 價一・二〇 送料・一二〇

東大助教授 橋爪明男著 **銀行讀本** 菊一四〇 價一・八〇 送料・一四〇

高濱虛子著 **俳句讀本** 菊上三四八 價一・五〇 送料・一四〇

文學博士 佐佐木信綱著 **萬葉讀本** 菊上二九 價一・五〇 送料・一四〇

白水社版

模範 佛和大辞典
特價7.50 送料.33 定價9.00
専門十大家編

標音佛和辞典
特價1.80 送料.15 定價2.00
山本直文編

佛蘭西語不規則動詞逆引辞典
特價2.20 送料.15 定價2.50
野口洪基編

新佛和熟語辞典
特價2.30 送料.15 定價2.80
徳尾俊彦編

泉社和佛辞典
特價3.30 送料.21 定價3.80
丸山順太郎編

新佛和小辞典
特價2.30 送料.14 定價2.80
佛文學會編

特價 全一書店齊
3月5日—5月10日

ソウェート略語辞典
佐藤通男編 特價1.30 送料.06 定價1.50

泉社露和大辞典
滿鉄東亞經濟調査局編
原型版 特價 10.00 送料市内12・内地57 其他88 (定價12圓)
縮册版 特價 7.50 送料市内12・内地45 其他75 (定價8圓半)

標音露和辞典
前陸軍教授 岩澤丙吉編
特價1.80 送料.15 定價2.00

東京神田駿河臺下
振替東京24176
電話神田 3598
白水社

感想集 子供と母の領分

鷹野つぎ著

新菊判三三〇頁
鳥ノ子裝端麗本
定價壹圓八拾錢
送料四種十四錢

新刊

女流作家として質實な一境地を有する著者が、傍ら家庭婦人として、久しき年月に亘り、子女を見守る母の生活から生み出されてきた感想を集めたものが本書である。第一篇子供は希む、第二篇指導への考察、第三篇子供の世界、第四篇新らしき母性、第五篇無言の感謝、第六篇愛別記と類別して編まれてゐる。

「子供は希む」十一項目には、子供の立場から子供たちの要求する事柄に關して書かれてあり「指導への考察」十一項目には、小學兒童の教育者と保護者への希望と所感があり、「子供の世界」十五項目には、主として著者の見た子供たちへの濃やかな觀察が盛られてゐる。「新らしき母性」十一項目には、招來されたい幸福な母子生活の熾烈な要求と、現實的な母子の生活に關する深い觀察と思索とが集められてゐる。而して「無言の感謝」十七項目には、著者の母として日常の所懷の表白があり、「愛別記」十六項目には、四人の子供と死別した著者の不幸な打擊の數々より自得した心境が語られてゐる。

是等の各篇には、何れも著者自身の日常生活から味到した心情が籠られてゐて、一讀した世の多くの母子生活者にも、隣人として親しき伴侶の思ひを懷かしめられずにはゐないであらう。一母性の文集にして、斯くの如く廣く世に提携を促がさずにはゐない生活感の優れたる特色が本書には旺溢してゐる。一般の必讀を奬める所以である。

發行所 古今書院
東京市神田區駿河臺二丁目三番地 振替東京三五三三番 電話(25)三五七四〇番

東京文理科大學
助教授 福原麟太郎先生著

春興倫敦子

東京高師教授 大塚高信先生評 「春興倫敦子」は單なる旅行土產の見聞記ではない。短信、消息、雜記、所見などの表題から見ると事務的な、案内的な啓蒙的なものかと早合點する人があるかも知れないが、決してそんなものではない。滯京三ヶ年の間福原氏はどんな生活をし、どんな事を感じ、どんなに或る時は得意になり、またある時は悲觀したか、いひ換へればその間の氏の行動と心の動きとを最も忠實に記した日記がこの本である。同氏の有つ鋭い、而も飛躍的な觀察眼、纖細にして豐潤な感受性、きび〳〵した筆運びの中に柔かと潤ひとを持つ同氏特有の優れた表現能力は、さながら吾々をしてイギリスのエッセイを讀んでゐるやうな感を懷かせる。

忽再版

滋味滴る英京隨筆!!

福原先生の隨筆は既に世に定評高きものである。本書は先生が滯歐三年の間に見聞され體驗され、研究された事どもを獨自の流麗細緻なペンに綴られた隨筆感想集二十餘篇、鮮麗なる寫眞十六葉、高雅瀟洒なる裝幀と相俟つて出版界第一書と讃仰されてゐる。果然、發賣忽ちにして重版、切に諸賢の淸讀を俟つ!

四六判局紙裝高雅・380頁美本
定價 ¥ 2.00 (〒8)

～本書の内容～

○英京短信……
○倫敦消息……
○クリスマス前後……
○春興倫敦子……
○倫敦所見……
○英京雜記……
○主知主義的會食……
○EXPRESS DAIRY……
○ゴラッス先生……
○THE NATIONAL GALLERY……
○ロンドンの古本屋……
○オウルド・ヴィックの沙翁史劇……
○プレイフェア氏演出……
○シェリダンとコルマン……
○ナポリ出港……
○ギリシヤ語……
○アメリカ迄歸る……
○惜春賦……
○英語を讀む樂み……

東京麹町富士見町 研究社 振替東京一〇六八二

東京科學博物館
天文學部主任 鈴木敬信先生著

宇宙・古代宇宙觀から膨脹宇宙說まで

內容見本進呈

四六判五百九十二頁
寫眞版凸版九十八圖
總クロース裝幀函入
定價三圓二十錢
送料十八錢

平山淸次博士
山本一淸博士
鏑木政岐博士 推薦

最近の革命的宇宙觀！膨脹宇宙說が建設せらる迄五千年間の天文文化史であり科學的宇宙觀變遷史である。認識の根抵として哲學宗教界が擧げて聽かんとしてゐる今日の知識！

支那・印度の天文學、埃及・バビロニアに起つた天文學がトレミーによつて天動說にまとめられ、天動說からコペルニクスの地動說に移つて如何に哲學界や宗教界が動搖したか。太陽系內に限られてゐた宇宙論が、ハーシェルの銀河系研究によつて如何に擴大せられたか。特に最近二三十年間の天文學の發展は過去五千年間の業績に數倍すると迄言はれ、特にアインシュタイン相對律の導入に依て發展した球狀宇宙論は古典的宇宙觀に根本的革命を要求してゐる。卽ち渦狀星雲の後退によつて導かれた膨脹宇宙說は單に天文學上の問題のみならず哲學界や宗教界が擧げて聽かんとしてゐる認識の根本問題である。本書は古代から現代までの詳密なる天文文化史であり、科學的宇宙觀變遷史である。

日本圖書館協會推薦書

理學士 鈴木敬信氏著★ 暦と迷信 萬年暦附 ◇定價一圓五十錢 送料十錢

理學博士 平山淸次氏著★ 暦法及時法 ◇定價一圓八十錢 送料十錢

理學博士 山本一淸氏著★ 初等天文學講話 ◇定價二圓五十錢 送料十四錢

發行 東京芝區南佐久間町二の四 振替口座東京六四六七番 恒星社
發賣 東京麹町下六番町 振替東京五九六〇〇番 厚生閣

「若き日のゲーテ」研究

東大教授 文學博士 木村謹治著

翹望久しき

普及版

菊判布上製・本文七〇六頁
定價三圓八十錢送料廿二錢

著者の願ふ處は著者の愛する青年諸氏の間に、ゲーテの灰を一人でも多く獲得せんとするにある。青年ゲーテの生活に對する態度が如何に眞摯にして、ひたむきであり、自己完成の衝動が內發的必然性から盛り上つて、若木のやうなすなほさを持つたものであるか、更に、それがたとひ萠芽の相に於てではあるにしても、如何に社會的全體的共存の有機制の最も明澄なる自覺にまで進展せずには息まないものを暗示してゐるかを、その生きた姿に即してわが若き友の心に懇へることができるならば、この小著の使命は充されるであらう。

新たなる日本文化建設の負擔者は、「何を」の前に「如何に」を、「素材」の前に「心構」を、世相の幻惑的渾沌に臨む前に、最初にして最後的なる「決意」を把持すべきものである限り、此の天才兒ゲーテの「生き方」には、學ぶべき多くのものが潜在することを信じて疑はないものである。

昭和十年十一月

著者

東京 伊藤書林 發行
麹町・飯田町一丁目・振替東京六三六四八

選擇自由・實用農藝全書

書明說容內
進呈

福岡縣農事試驗場技師
高石發著

肥料

新四六判洋布函入・三五二頁
定價一圓二十錢送料十錢

肥料に對する農業者の知識の深淺は直ちに作物生產の全般を左右する導因である。茲には肥料學に關する基本的事項と作物栽培上實際に知悉すべき事項が洩さず解說されてゐる。就中肥料の各論的方面はその性質・成分・肥效・施肥法等に亘つて一々詳細に記述せられ、季節・土地等の關聯の下に主要作物の施肥例等を各主產地農事試驗場の成績を藉りて讀者の參考に供する等凡ゆる點に實用上の考慮を配つて懇切周到を極めてゐる。

兵庫縣地方農林技師
西田悅夫著

果樹園藝

新四六判洋布函入・二九六頁
口繪寫眞四頁挿入 圓四五圓
價一圓二十錢送料十錢

果樹の栽培と經營に關する實利的指針として好評無比

既刊・第一册

廣島縣農事試驗場技師
松木五樓著

土壤

新四六判三四六頁・圖六六
定價一圓二十錢 送料十錢

農業生產に於ける根本的要素としての土壤についてその基礎的並に應用的事項を網羅し、平明に講述されたもの、土壤に關する最新知見は能ふ限り之を攝容し、また術語には一々外國名を附し、標準用語を採擇するなど、全編の構組と記述に細心の注意を拂ひ初學者をして容易に理解し得るやうに努めてある。難解なる土壤の理論と實用的事項はかくして極めて平易に讀者大衆のものとなるであらう。

刊行豫定書

食用作物……田尻矩次郎著
育種……高橋道太郎共著
害蟲……嵐武內嘉一晴好共著
病害……織田富士夫共著
害……武內晴好共著
畜產……美川重夫共著
農產加工……平田政雄著
後藤新共著
蠶業……高橋伊勢次郎著
蔬菜園藝……渡邊誠三著
養蠶……野中幸兵衛著
桑樹栽培……岡部康之著
測量……千種虎正共著
近坂百一共著
農業土木……千種虎正共著
近坂百一共著
米穀……渡邊五六著
農業經營……石橋幸雄著

（以下續刊）

東京市神田區錦町一丁目
明文堂
振替東京一三一〇九
電話田錦二六八〇・五九四番

露光量違いの為重複撮影

文章心理學

法政大學講師 波多野完治著

菊判・ボブリン裝・三八二頁・函入 定價三圓 送料十錢

日本語の表現價値

著者は本書に於て最近特にその進展目覺しき獨逸のゲシタルト心理學及び佛蘭西の社會學的心理學の理論を基礎とし、從來の修辭學を解體せしめて、新しき文章理論を樹立せしめた。著者は又、新しき思想や感覺を盛るには、舊き文章理論 は最早何等の用をなさないことを實證せんが爲に、潤一郎、直哉等の文章を科學的に分析し吟味して、これら現代の偉大なる作家が自己を表理する新しき作品の爲に如何に新しき文章形態を用意し、又これが解決に如何に苦慄してゐるかを詳細に敍述してゐる。文章論の喧しき今日、文章道に志す人は勿論、文藝家、愛好家諸賢の御試讀を切望する。

目次概略

緒論 レトリックの再生

第一篇 文章心理學原理
文章心理學とは何か—文章心理學の課題及歷史—文章心理學の基礎理論—言語的表理手段の心理的價値

第二篇 文章性格學
文章と性格—文章の樣式學

第三篇 歷史的現在の心理學
邊修辭學の解體

心理學概論 黑田亮著 ¥3.80

痩松園隨筆 黑田亮著 ¥1.80

縱と横 西川義方著 ¥2.50

條件（隨筆集） 林髞著 ¥1.50

理學新風景 竹內時男著 ¥1.50

心を打つもの 鈴木文史朗著 ¥2.00

東京振替大阪振替京都振替 市東市大神京西阪田三區八區一阿一神五波三保五座〇〇町五下〇〇一番通番

三省堂

賴山陽名著全集

樣裁 賴成一
好尙 木崎愛吉 責任編著

一、賴山陽先生直系五世の令孫樣崖賴成一、現代山陽研究の權威者木崎愛吉兩先生の責任編著であるから、本書の實なること天下無比であり、以つて定本となすに足ること。

全十卷

第一卷 日本外史 上卷
第二卷 日本外史 下卷
第三卷 日本政記
第四卷 通議文集
第五卷 詩集日本外史府
第六卷 春秋講義書後題跋其他
第七卷 書翰集
別卷第一 山陽評論集
別卷第二 日譜
別卷第三 山陽遺墨集

毎卷 四六判ルビつき三〇〇頁內外 上製函入美本 口絵アート紙挿寫眞數葉入 定價毎卷二圓五〇錢 但し第十卷山陽遺墨集に限り定價五圓

全十卷前金一時拂特に割引二五圓

全卷前金一時拂の方に限り合計定價二十七圓五拾錢のところ特に金貳拾五圓也（他送料東京六〇錢地方二圓二〇錢申受〔〕に割引提供

全十卷を前金一時拂の方に限り合計定價二十七圓五拾錢のところ特に金貳拾五圓也（他送料東京六〇錢地方二圓二〇錢申受〔〕に割引提供

全卷前金拂御申込の方に

東京 紺屋文盛堂 大阪 御影屋書店 名古屋 川瀨書店

發行元 章華社 東京市日本橋區中山縣二ノ五八二 電話高輪(44)三〇四五番 振替東京六七五二二番

大取次

藤田東湖全集

編讀 高須芳次郎編著

毎卷 四六判ルビつき三六〇頁內外 上製函入美本 口絵アート紙挿寫眞數葉入 定價毎卷一圓五〇錢

全六卷前金一時拂八圓—に割引 送料 毎卷 東京市內六錢 地方一四錢 荷造料 毎卷 二四錢 郵稅 二四錢

【全六卷】

第一卷 回天詩史 常陸帶
第二卷 弘道館記述議
第三卷 東湖詩歌集
第四卷 隨筆小品集
第五卷 東湖書翰集
第六卷 東湖封事篇

◇本全集刊行の趣旨を賛し全六卷の前金申込みの方に限り特に八圓に割引提供す

◇全六卷分前金申込みの方に限り鎭西用藤田東湖先生肖像を贈呈す

二大奉仕

東京 紺屋文盛堂 大阪 御影屋書店 名古屋 川瀨書店

發行元 章華社 東京市日本橋區中山縣二ノ五八二 電話高輪(44)三〇四五番 振替東京六七五二二番

大取次

露光量違いの為重複撮影

文章心理學

日本語の表現價値

法政大學講師 波多野完治著

菊判・ボブリン裝・三八二頁・函入
定價三圓 送料十錢

著者は本書に於て最近特にその進展目覺しき獨逸のゲシタルト心理學及び佛蘭西の社會學的心理學の理論を基礎とし、從來の修辭學を解體せしめて、新しき文章理論を樹立せしめた。著者は又、新しき思想や感覺を盛るには、舊き文章理論 は最早何等の用をなさないことを實證せんが爲に、潤一郎、直哉等の文章を科學的に分析し吟味して、これら現代の偉大なる作家が自己を表現する新しき作品の爲に如何に新しき文章形態を用意し、又これが解決に如何に苦慄してゐるかを詳細に敍述してゐる。文章論の喧しき今日、文章道に志す人は勿論、文藝家、愛好家諸賢の御試讀を切望する。

目次概略

緒論 レトリックの再生
第一篇 文章心理學原理
文章心理學とは何か—文章心理學の課題
及歴史 文章心理學の基礎理論—言語的
表理手段の心理的價値
第二篇 文章性格學
文章と性格—文章の樣式學
第三篇 歴史的現在の心理學
舊修辭學の解體

心理學概論 黒田亮著 ¥3.80
瘦松園隨筆 黒田亮著 ¥1.80
縱と横 西川義方著 ¥2.50
條件（隨筆集） 林髞著 ¥1.50
理學新風景 竹内時男著 ¥1.50
心を打つもの 鈴木文史朗著 ¥2.00

三省堂
東京市神田區神保町五番地 振替東京一番
振替東京一番
大阪市東區淡路町五丁目 振替大阪一番

賴山陽名著全集

樣嚴 賴成一 好尙 木崎愛吉 責任編著

一、賴山陽先生直系五世の令孫樣嚴賴成一、現代山陽研究の權威者好尙木崎愛吉兩先生の責任編著であるから資料の尊富にして確實なること天下無比であり、以つて定本となすに足ること。

全十卷
第一卷 日本外史 上卷
第二卷 日本外史 下卷
第三卷 日本政記
第四卷 通議文集
第五卷 詩集日本乞府
第六卷 春秋講義書後題跋其他
別卷第一 山陽遺墨集
別卷第二 山陽詩話
別卷第三 山陽遺墨集

毎卷 四六判ルビつき三六〇頁内外 上製布裝箱入美本 口繪アート紙寫眞數葉入
定價 毎卷 二圓五〇錢
但し第十卷山陽遺墨集に限り 定價五圓
送料 毎卷 東京市内六錢 遠方 二錢 太郎 二四錢 北海道樺太朝鮮米 六〇錢

全十卷前金一時拂特に割引二五圓
全十卷前金一時拂特に割引二五圓也（他送料 東京市内六〇錢 地方二圓二〇錢）

全十卷を前金一時拂の方に限り合計定價二十七圓五拾錢のところ特に全貳拾五圓也（他送料東京六〇錢 地方二圓二〇錢申受〈〉）に割引提供

全卷前金一時拂の方に限り
大取次 東京 畑屋文盛堂 東京市日黒區中目黒二ノ五八二
大阪 柳原書店
名古屋 川瀬書店
發行元 章華社 電話高輪 村二〇四五番 振替東京六七五二二番

藤田東湖全集

柳渓 高須芳次郎編著

【全六卷】

第一卷 回天詩史 常陸帶
第二卷 弘道館記述議
第三卷 東湖詩歌集
第四卷 隨筆小品集
第五卷 東湖書翰集
第六卷 東湖封事篇

毎卷 四六判ルビつき三六〇頁内外 上製布裝箱入美本 口繪アート紙寫眞數葉入
定價 毎卷 一圓五〇錢
送料 毎卷 東京市内六錢 遠方 一四錢 臺灣樺太 二四錢 朝鮮 二四錢 支那滿米 六〇錢

全六卷前金一時拂八圓—に割引

◇本全集刊行の趣旨を賛し全六卷の前金申込みの方に限り特に八圓に割引提供す
◇全六卷分前金申込みの方に限り藤田東湖先生肖像を贈呈す

=二大奉仕=

大取次 東京 畑屋文盛堂 東京市日黒區中目黒二ノ五八二
大阪 柳原書店
名古屋 川瀬書店
發行元 章華社 電話高輪 村二〇四五番 振替東京六七五二二番

終

日本圖書館協會御推薦

〔忽ち再版〕

皇國日本

東京高師教授 亘理章三郎先生著

四六判上製函入・定價一圓六十錢
紙數二四四頁・送料十錢

我が國家、國體の歴史的事實に本づき諸方面より其の認識を深く且つ明かにし皇室を永遠とする一元の國家、一體の民族の眞理を究めて國運發展の具體を說く書

【目次】序說（三章）皇室を本源とする一元の民族一元の國家　民族の一元的同化と多元的混成との差別より觀たる日本民族　我國古來の諸民族と其の民族關係　原始時代の國家日本と其の民族　氏族時代に於ける民族的同化　律令時代に於ける民族的同化の進展　武家時代に於ける民族的同化の醇熟　皇國日本として國運の發展と其の組織的擴大（五章）皇室を絶對の中心とする國家の維新的創造（四章）皇國日本の特殊性（五章）我が國體の倫理的意義（六章）

〔忽ち再版〕

現代社會と人格生活

文學博士 吉田靜致先生著

四六判洋裝函入・定價一圓六十錢
紙數二四六頁・送料十錢

こゝに倫理學界の耆宿吉田博士は人格の辨證法的發展を論じて複雜なる現代社會層を徹底批判し眞なる道德生活の理念を道破さる新時代の生活聖典。

【目次】人格の特性　人格の二重性と道德生活　現在的生活と超現在的生活　現在主義批判　部分的生活と無限的全體　自覺的生命　眞の無限　現實と理想　有限卽無限的生活　道德的生活と宗教的生活　特殊卽普遍主義　現代社會同一體的生活　國家と國民全一主義と排他主義　富批判　國家と自利主義　罪と罰　戰爭　實質至上主義と自利主義　愛國心の二種　人格の辯證法的發展　社會我（普遍我）と言語　生物學的人生觀　進化論の批判　個體的遺傳と社會的遺傳　自己本位的力主義（以下略）

〔忽ち再版〕

皇國の行くべき道

文學博士 荻原擴先生著

四六判上製函入・定價一圓五十錢
紙數二〇〇頁・送料十錢

東洋倫理研究の覇者たる博士が、こゝに國民生活の諸相を究めて、錯雜簇生する現下の諸問題の悉くを解明し、而して將來への方途を示す、正に國民必讀の信條

【目次】題目に就て　皇國現下の諸問題　將來行くべき道　現實の皇國—現下の諸問題　國際問題　國內問題　人口と領土との問題　皇國の道　皇道の文學と意義　日本國の理念皇道と外國文化　皇道の價値　皇道の實現　本邦の國是　外國文物の批判的取捨　制度及び生活の皇道化　大義の世界的顯揚　皇道と教育　教育改善の問題　教育者の職責　皇國の道について

發兌　東京市神田區靖河臺三丁目　振替東京二八〇九番　目黑書店